

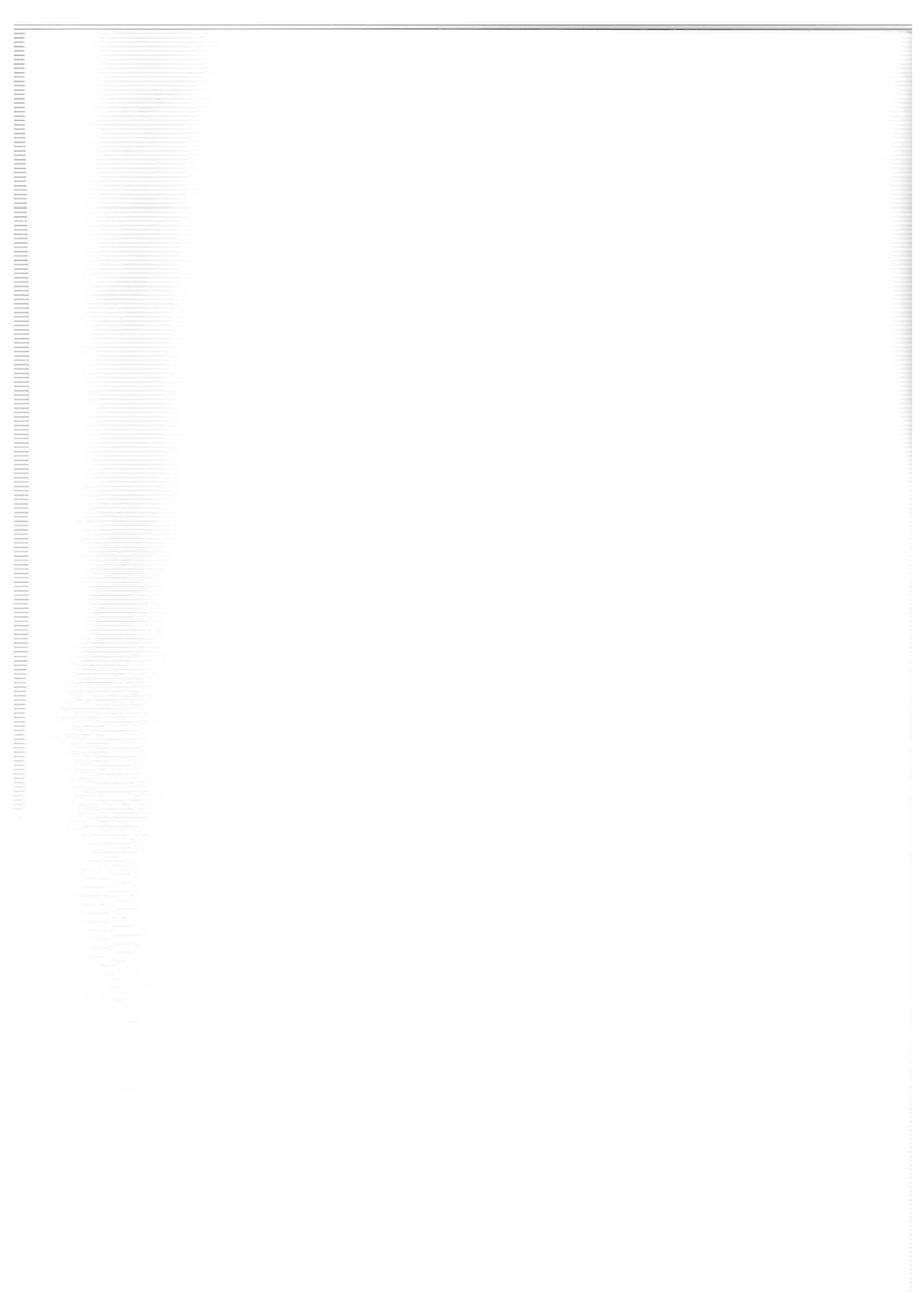
いしかり曆

- 高島家文書 明治三十六年六月廿日 運動会順序 ……………三島 照子… 1
- 村山家文書解説
「村山本家石狩転出ニ伴う十二ヶ条心得ノ事」 ……村山家文書を読む会… 8
- 古谷長兵衛について ……………工藤 義衛…16
- 石狩市内の屋号 ……………高瀬たみ・吉岡 玉吉編…20
- 「丸山出し」と石狩湾のさかなたち ……………吉岡 玉吉…45
- 厚田ハタハタ・寄りブリコ ……………吉岡 玉吉…48
- 石狩小学校、花川小学校の開校と統廃合の経緯 ……………安井 澄子…50
- いしかり曆（創刊号から第21号まで）の総目次 ……………石橋 孝夫編…54
- いしかり曆（創刊号から第21号まで）の執筆者別目録 ……石橋 孝夫編…61

第 21 号

2008. 3

石 狩 市 郷 土 研 究 会



高島家文書 明治三十六年六月廿日 運動会順序

三島照子

厚田区、浜益区を除く、旧石狩市には明治大正から戦前にかけての公文書はほとんどありません。というのには昭和二十年七月十五日のいわゆる「石狩空襲」により石狩町役場が焼失し、保存されていた公文書ほとんどが灰燼に帰してしまっただけです。しかし今回紹介する「高島家文書」のように民間で保管され、後に市に寄贈された文書も一部あり、これらは当時の石狩市を知る上でかけがいのない資料となっています。

高島家文書は主に二冊の綴りからなり、約九百七十点の文書が収められています。年代的には大体、明治三十年代から大正三、四年ごろまでの文書ですが、中心は明治三十六年から明治四十年代となっています。この文書を残したのは高島晴信（たかしま はるのぶ）という人で弘化元年（一八四四）福山生まれ、石狩役所の足軽のち兵部省、開拓使の役人となり明治七年退職して漁業を始めた人です。明治七年から明治三十年代までの公的な履歴は調査中ですが、高島家文書の中心となる明治三十六年ごろから同四十二、三年ごろは石狩町の第一部の部長や衛生組合の公職を務めておりました。当時、石狩町は全町が十二部に分けられ、各部に部長を置き道や役場の文書を伝達する仕組みになっておりました。第一部とは石狩本町地区のことです。規定では部長は名誉職となっていますが、この下に事務方など実務に携わる人がいたはずですが具体的にどのような運営だったか良く分かっていません。

なおこの文書は昭和六十二（一九八七）年ごろ、石狩市弁天町にあり、廃屋同然となっていた高島家を解体するというところで関係者が家の整理を行なった際、不要な書類を焼却しようとして八幡神社に依頼

しました。その後神社から教育委員会に連絡があり、内容を確認したところ重要なものと判断し、後日高島家関係者に確認をとり寄贈を受けたものです。

また文書の全体の内容は仮の分類ですが教育関係四十七、各種団体（石狩水産組合、衛生組合）二百三、行政事務（通知）百四十四、軍事（徴兵・出征）百二十七、産業（農業、物産品評会など）百九十などとなっています。なかには税金賦課に関係の名簿や税務関係の書類もあり、当時の税負担や居住者を知るためには重要な資料です。

今回紹介するのは、高島家文書にある明治三十六年の「運動会順序」という文書です。文書番号は「TII-191」で和紙にコンニャク版印刷で運動会のプログラムが記されたもので、別に筆で「三十六年六月廿日」と添え書きされています。この文書にある運動会とは、明治時代から昭和初期にかけての初等教育機関の尋常小学校と高等小学校を併置した小学校で行われたものです。

明治三十六年頃に石狩にあった小学校は、石狩尋常高等小学校、若生尋常小学校、花川尋常小学校、樽川尋常小学校、生振尋常小学校、高岡尋常小学校、志美尋常小学校、美登位尋常小学校、南線簡易教育所、発泉尋常小学校、参泉分教所ですが、この運動会順序はこの小学校かは記載されていません。しかし「運動会順序」の中に尋常科と高等科の区別があること。そして高島晴信が第一部長だったという点から考えて「石狩尋常高等小学校」の運動会プログラムだと考えて良いと思われます。高島文書中にはもう一つ「石狩尋常高等小学校運動会順序」（TII-151）という文書もありますが、こちらは日付が書かれていません。綴られた前後の文書から明治四十三年ごろと思われる。また、高島文書の中に「三十九年春季石狩、若生両校連合運動会費取決算書」（TII-95）という文書もあります。この文書から当時は石狩川兩岸の小学校が合同で運動会を開いていたこともあったようです。さらに同文書から春秋の二回運動会があったこと、運営

費は寄附をあてていたことも分ります。この文書の寄付者には「伊藤房次郎」も名を連ねていて「五十銭」の寄附をしています。この運動会の寄附収入は総額「参拾五円参銭五厘」で支出が「参拾五円八拾銭」で赤字となったようです。赤字は藤田利兵衛が特別寄附をして埋めたと書かれています。また若干時代は古くなりますが、明治二十二年六月八日付の北海道毎日新聞には「石狩においては去る二日字西浜にて小学校の運動会を催し、芋拾い、背面競争、旗奪、一人三脚、人運び、ベースボール等の遊戯を演じ余興には競争、綱引きとあり、中々の盛会なりしが、殊に有志者十名と小学校生徒中強健のもの二十名との比較綱引きは何れも力の平均の得たる為勝負決せずして引き分けとなりしは頗る面白かりしと。当日は郡吏並びに市中の主たる人々も招待したるが井尻、村山その、中島房蔵、高橋儀兵衛、宮崎儀光諸氏及び供救組合等より賞品、菓子等を寄贈ありたりと」(鈴木二〇〇七)とある。この記事から当時運動会は、西浜で行なわれ、招待者、賞品の提供などもあり町を上げた一大行事だったことが窺われます。

なお、解説中、「徒競争、綱引」など競技が現在もあるものは、解説を省きましたが、調べていくなかで現在とは競技内容が違うものは解説をつけてあります。また、「お手玉」「連立競走」は、どのような競技か調べきれませんでした。なお、運動会順序の「尋」は尋常科、「高」は高等科のことである。

三十六年六月廿日

運動会順序

午前の部

一 矯正術……………尋二男

身体の姿勢を矯正するために行う体操

三十六年六月廿日

項目	種別	性別	順位
一 矯正術	尋二男	男	一
二 徒手体操	尋二男	男	二
三 柔軟体操	尋二男	男	三
四 旗取	尋二男	男	四
五 盲目旗取	尋二男	男	五
六 徒競走	尋二男	男	六
七 徒競走	尋二男	男	七
八 徒競走	尋二男	男	八
九 若手玉	尋二男	男	九
十 救急	尋二男	男	十
十一 救急	尋二男	男	十一
十二 救急	尋二男	男	十二
十三 救急	尋二男	男	十三
十四 救急	尋二男	男	十四
十五 救急	尋二男	男	十五
十六 救急	尋二男	男	十六
十七 救急	尋二男	男	十七
十八 救急	尋二男	男	十八
十九 救急	尋二男	男	十九
二十 救急	尋二男	男	二十
二十一 救急	尋二男	男	二十一
二十二 救急	尋二男	男	二十二
二十三 救急	尋二男	男	二十三
二十四 救急	尋二男	男	二十四
二十五 救急	尋二男	男	二十五
二十六 救急	尋二男	男	二十六
二十七 救急	尋二男	男	二十七
二十八 救急	尋二男	男	二十八
二十九 救急	尋二男	男	二十九
三十 救急	尋二男	男	三十
三十一 救急	尋二男	男	三十一
三十二 救急	尋二男	男	三十二
三十三 救急	尋二男	男	三十三
三十四 救急	尋二男	男	三十四
三十五 救急	尋二男	男	三十五
三十六 救急	尋二男	男	三十六
三十七 救急	尋二男	男	三十七
三十八 救急	尋二男	男	三十八
三十九 救急	尋二男	男	三十九
四十 救急	尋二男	男	四十
四十一 救急	尋二男	男	四十一
四十二 救急	尋二男	男	四十二
四十三 救急	尋二男	男	四十三
四十四 救急	尋二男	男	四十四
四十五 救急	尋二男	男	四十五
四十六 救急	尋二男	男	四十六
四十七 救急	尋二男	男	四十七
四十八 救急	尋二男	男	四十八
四十九 救急	尋二男	男	四十九
五十 救急	尋二男	男	五十
五十一 救急	尋二男	男	五十一
五十二 救急	尋二男	男	五十二
五十三 救急	尋二男	男	五十三
五十四 救急	尋二男	男	五十四
五十五 救急	尋二男	男	五十五
五十六 救急	尋二男	男	五十六
五十七 救急	尋二男	男	五十七
五十八 救急	尋二男	男	五十八
五十九 救急	尋二男	男	五十九
六十 救急	尋二男	男	六十
六十一 救急	尋二男	男	六十一
六十二 救急	尋二男	男	六十二
六十三 救急	尋二男	男	六十三
六十四 救急	尋二男	男	六十四
六十五 救急	尋二男	男	六十五
六十六 救急	尋二男	男	六十六
六十七 救急	尋二男	男	六十七
六十八 救急	尋二男	男	六十八
六十九 救急	尋二男	男	六十九
七十 救急	尋二男	男	七十
七十一 救急	尋二男	男	七十一
七十二 救急	尋二男	男	七十二
七十三 救急	尋二男	男	七十三
七十四 救急	尋二男	男	七十四
七十五 救急	尋二男	男	七十五
七十六 救急	尋二男	男	七十六
七十七 救急	尋二男	男	七十七
七十八 救急	尋二男	男	七十八
七十九 救急	尋二男	男	七十九
八十 救急	尋二男	男	八十
八十一 救急	尋二男	男	八十一
八十二 救急	尋二男	男	八十二
八十三 救急	尋二男	男	八十三
八十四 救急	尋二男	男	八十四
八十五 救急	尋二男	男	八十五
八十六 救急	尋二男	男	八十六
八十七 救急	尋二男	男	八十七
八十八 救急	尋二男	男	八十八
八十九 救急	尋二男	男	八十九
九十 救急	尋二男	男	九十
九十一 救急	尋二男	男	九十一
九十二 救急	尋二男	男	九十二
九十三 救急	尋二男	男	九十三
九十四 救急	尋二男	男	九十四
九十五 救急	尋二男	男	九十五
九十六 救急	尋二男	男	九十六
九十七 救急	尋二男	男	九十七
九十八 救急	尋二男	男	九十八
九十九 救急	尋二男	男	九十九
一百 救急	尋二男	男	一百

二 徒身体操……………ク三男

三 柔軟体操……………高男

四 旗取……………尋一男

五 盲目旗取……………尋一女

六 二人三脚……………高二男

七 徒競争……………尋三男

八 全……………高女

器具・機械を用いないで行う体操

身体をやわらかにさせる目的で、四肢・胴体・頭部の諸関節を十分に屈伸して行う体操

競争者の数に応じ、各旗の間を一メートル五〇センチほどずつ隔てて、旗を立てる。合図にて疾走して旗を取り、早く決勝戦内に入った者を勝ちとする。

紅白に分かれ、両組は約二〇メートル隔て一列横隊に対抗し並ぶ。各自の前方約一〇メートルの所に旗を立て、全員手ぬぐいで目をおおい、合図で走り、前方の旗を取り元の位置に戻る。全員が早く取り終わり元の位置に戻った組が勝ち。

二人一組になり前後にならび右足と右足、左足と左足をひもで結び前の人は両手を腰に、後ろの人は両手を前の人の肩にかける。あるいは、二人一組になり横に並び内側の手は肩甲骨の所で組み合わせ、内側の左右の足はくるぶしの所でひもで結び競争する。

尋三男

高女

午前部

1 開會式	2 徒競争	3 徒競争	4 徒競争	5 徒競争	6 徒競争	7 徒競争	8 徒競争	9 徒競争	10 徒競争	11 徒競争	12 徒競争	13 徒競争	14 徒競争	15 徒競争	16 徒競争	17 徒競争	18 徒競争	19 徒競争	20 徒競争	
...

以上

十 牛若韓信……………高三
四男

二列横隊に約一〇メートル間隔に並べ、その前方に五間間隔に横線を五か所に引き、六線目に競争する組だけの色旗を立てる。用意で、前列の生徒はかがみ、合図で後列の生徒は前列の生徒を飛び越え、前方の線まで行き両足を広げ立つ。後から来た生徒は股下を潜り前方の線まで行きかがみ、これをくりかえす。

十一 数学競争……………高一男

一列横隊に並び、前方約二〇メートル位の所に競争者の数だけの石盤と石筆を並べて置き、石盤には同一の数学問題を書いて置く。合図により競争し各自任意の石盤の所に行き、名前を書いて数学の問題を解き早く戻ったものが勝ちとするが、答が正しく名前をきちんと書いていなければいけない。

十二 韓信競争……………尋二男

生徒を二列横隊に一〇メートル間隔に並べ、その前方に一〇メートル間隔に横線を五か所に引き六線目に競争する組だけの色旗を立てる。用意で前列の生徒は両足を広げ、その後列の生徒は前列の生徒の股下より頭を出し準備をする。合図で後列の生徒は股下を潜り駆け出し前方の線まで行って両足を広げて立つ。これを順番に繰り返す。

十三 全……………ク

十四 名所探り……………ク二女

有名な名所を幅三〇センチ、長さ六〇センチ位の

十五 亜鈴競争……………ク三
四女

厚紙に適当な名所の絵と文字を記入し、これをメートル五〇センチ位の竹の先に挟み、厚紙の下に半紙を細く切つて、厚紙と同じ名所をかいた札を数枚付けておく。名所の立札を競技場の適当な場所に置き、合図により走りそれぞれの立札から細い札を取り、名所全部を巡つた者を勝ちとする。名所が一か所でも不足していたら負けとする。

十六 源平旗送り……………ク一
女

赤(平家)白(源氏)の二組に分け、各組ともその組と同じ小旗を先頭に持たせ、児童は旗を円の如く地上に並べて開始の合図を待っている。合図とともに各組の戦闘は小旗を肩にして右方から並べてある輪の中を片足ずつ入れて飛び走り、一巡して自分の位置に戻ると同時に小旗を次の児童に渡す。

次の児童は又その旗を肩にして右に一巡して次の者に渡す。最後の児童が早く旗を中央なる教師に渡した組が勝である。

十七 亜鈴送り……………ク三
四男

数組を横隊とする。各組の距離を四歩ないし六歩とし整頓し、亜鈴と小国旗を一番の生徒の右側に置き、両足を左右に開く。合図で一番の生徒は亜鈴を二個ずつ両手に取り上体をねじって順次に後方の生徒に送る。最後に小国旗も送り、勝負を決

十八 源平縄跳……ク高女
する。

全生徒を源氏(赤)・平家(白)二組分け、同一線上に横隊に並べ各組より二名ずつを出して、約一〇メートルの所に、長さ二メートル余りの縄を持た、ここより約一〇メートルの前方に旗を立てる。合図で一番の生徒はこれを飛び越え、前方の旗を巡って帰る、帰る時にも縄を飛び越える。その縄を飛び損ねたら元の位置に戻り、再び縄を飛ぶ。

十九 源平旗送り……尋二女
二十 球集め……ク三女

グラウンドに直径三メートルの円形を描きその中央に二個の籠を置く。籠の側に赤白の旗一本づつを立てて、その周りに赤白の玉を撒く。円の周囲に生徒を配列し、番号を付け奇数は赤偶数を白とし、右の方へ向かせる。

生徒は教師の号令により唱歌を歌いながら円周を行進する。唱歌が終わると同時にせいとは列を解き、赤組は赤球を白組は白玉をかごに入れる。拾いこれを自分の籠に入れる。先生の「やめという」合図まで入れ籠に多く入れた方が勝ち。球をかごに入れるときは円周より中に入ってはいけない。

休憩 昼食

午後の部

一 開いた………尋一女

遊技者のそれぞれの手をつなぎ円形にし、互いに「蕾だ蕾だ蓮の花蕾だ」と歌いながらつないだ

二 櫻………ク二女

手を円の中心に集める。また「開いた開いた蓮の花開いた」と歌いながら集めた手を開き円形に戻る遊戯。

三 友取り遊ビ………三、四女

一列円陣または、二列円陣となり「さくら」の歌にあわせ遊戯をする。

四 方形連鎖………高一

行進の一つで、正面八人の八列又は偶数で行う。始めは足踏みをし、こうしんを始めるが、前後に重なるように足を揃える。四歩、六歩、八歩が最終まで、左あるいは右に回転し、方形行進をする。

五 騎馬競争………高一

馬は一人前に立ち、その後ろに二人屈み両手で前の人帯につかまる。その上に乗り騎手となる。一定の競走路を回ってくるか、または旗を取ってきて早く決勝線内に入った組を勝ちとする。

六 札合せ………尋三女

厚紙または木札の約三センチ角のものを作り、これに大将二、□□中將二・少將四・大佐六・大尉八・中尉八・少尉八・間者二・工兵八・地雷八をつくる。全生徒を二分して、赤・白の両軍とし、

作つた各札をそれぞれに持つ。各組は指揮者一人を決め、札を適当に生徒に配り、各組の本城を決め旗を立てる。合図で双方戦場に入り乱れ敵を捕えてお互いに持つている札を出して合わせ、位で負けたら負傷兵として自分の本城に帰り動くことができない。こうして進み敵の本城にはいったら勝ちとする。

七 全……………ク二女

八 徒競走……………ク男

九 全……………ク

十 兎飛び……………ク一男

生徒を兩組に分け各一列に並べ奇数あるいは偶数を一歩前進させ、向かい合わせる。合図により手をつなぎ、奇数の組は手をつないだ偶数の組をくぐり、飛び、くぐり、飛びを交互に繰り返す。奇数の組が終わつたら偶数に組が同様に言い、最後者が早く運動を終えた方を勝ちとする。

十一 円形旗送り……………高男

二組に分かれそれぞれに同じおきさの円形を作る。先頭の生徒は大将旗を持ち合図とともに円形の外側を走り次の生徒に旗を渡す。早く終わった方を勝ちとする。

十二 連立競争……………尋一女

十三 源平旗送り……………ク二男

十四 盲啞競争……………ク三男

四男

生徒は二列横隊並び、二番目の生徒は目を覆い一番目の生徒は言葉を話すことができない啞者とな

る。合図とともに盲者と啞者は始めの交代線まで走り、次の交代線までは盲者は啞者を背負い啞者は盲者に方向を教えながら走る。決勝線までは啞者が盲者を背負い走る。

十五 全

十六 提灯競争……………高女

提灯・ろうそく・マッチを用意し、出発線から数間離れた所に提灯・ろうそく・マッチを並べて置く。合図で走り、その提灯に火を入れ持つて走る。決勝戦内に早く入っても消えた提灯では勝ちにならず、もし途中で消えた場合、元に戻つて点火し再び走る。

十七 障害物競争……………ク二男

全生徒を二組に分け縦に一列に並べ、障害物の名称(橋・坂道・山・海・川・谷)を記した旗を障害物とする。旗に「橋」とあれば片足で、坂道は坂道を歩くように、山は山を登るように、川は次の生徒の来るのを待ちその生徒に背負われて渡り、谷は幅跳びをするなどして早く終わった方が勝ちとする。

一八 全……………ク三男

四男

一九 綱引……………尋一女

二十 来賓競争

余興

なお参考に高島文書の中の「石狩尋常高等小学校運動会順序」(本文3P下段)を記せば、以下のとおりである。

「1開会ノ辞2君ガ代3カラス4一人一脚5お給仕6芋拾ヒ7お手玉8二人三脚9お手玉10縮足11掃除仕度12背面13唐籠14徒歩15使命16蛇行17鎖行進18徒歩19二人三脚20徒歩21スプーン22兵式体操23物干24旭二匂25徒歩26十字横送り27友愛28アンベルコーラス29徒歩30トンボ釣り31札合せ32徒歩33旗取34城落35大角力 昼休み 36桃太郎37提灯38徒歩39全(徒歩)40バスケットボール41食菓42メーボルダンス43綱引き44糸巻キ45障害物46選手47全(選手)48各種競争49来賓50委員51卒業生52職員53□□し54閉会ノ辞55萬歳 以上」

参考資料・引用文献

『実験団体新遊戯法』吉井栄著、辻本宇蔵 明治三十六・二一

『実験日本遊戯』佐藤福雄他、宝文館 明治三十六・五

『新聞に見る石狩・厚田・浜益歴史年表』(明治21年～明治25年)

二〇〇七 鈴木トミエ編著

『日本新遊戯法』米田源次、堂 明治三十三・六

『小学遊戯法卷1-3』

花岡朋太郎編、大辻文盛堂、明治二十一・五

十八 源平縄跳……ク高女

全生徒を源氏赤・平家（白）二組分け、同一線上に横隊に並べ各組より二名ずつを出して、約一〇メートルの所に、長さ二メートル余りの縄を持た、ここより約一〇メートルの前方に旗を立てる。合図で一番の生徒はこれを飛び越え、前方の旗を巡って帰る、帰る時にも縄を飛び越える。その縄を飛び損ねたら元の位置に戻り、再び縄を飛ばす。

十九 源平旗送り……尋二女

二十 球集め……ク三女

グラウンドに直径三メートルの円形を描きその中央に二個の籠を置く。籠の側に赤白の旗一本ずつを立てて、その周りに赤白の玉を撒く。円の周囲に生徒を配列し、番号を付け奇数は赤偶数を白とし、右の方へ向かせる。

生徒は教師の号令により唱歌を歌いながら円周を進行する。唱歌が終わると同時にせいとは列を解き、赤組は赤球を白組は白玉をかごに入れる。拾いこれを自分の籠に入れる。先生の「やめという」合図まで入れ籠に多く入れた方が勝ち。球をかごに入れるときは円周より中に入ってはいけない。

休憩 昼食

午後の部

一 開いた………尋一女

遊技者のそれぞれの手をつなぎ円形にし、互いに「蕾だ蕾だ蓮の花蕾だ」と歌いながらつないだ

手を円の中心に集める。また「開いた開いた蓮の花開いた」と歌いながら集めた手を開き円形に戻る遊戯。

二 櫻………ク二女

一列円陣または、二列円陣となり「さくら」の歌にあわせ遊戯をする。

三 友取り遊ビ………三、四女

児童を紅白の両組にわけける。紅白にわけたものを四人ずつにわけける。その内の一人を友として、友を一番最後にして四人手を繋ぎ、走りながら他の組の友を取る。参考文献では「友奪い」となっている。

四 方形連鎖………高一

行進の一つで、正面八人の八列又は偶数で行う。始めは足踏みをし、こうしんを始めるが、前後に重なるように足を揃える。四歩、六歩、八歩が最終まで、左あるいは右に回転し、方形行進をする。

五 騎馬競争………高一男

馬は一人前に立ち、その後ろに二人屈み両手で前の人を帯につかまる。その上に乗り騎手となる。一定の競走路を回ってくるか、または旗を取ってきて早く決勝線内に入った組を勝ちとする。

六 札合せ………尋三女

厚紙または木札の約三センチ角のものを作り、これに大将二、□中將二・少將四・大佐六・大尉八・中尉八・少尉八・間者二・工兵八・地雷八をつくる。全生徒を二分して、赤・白の両軍とし、

作つた各札をそれぞれに持つ。各組は指揮者一人を決め、札を適当に生徒に配り、各組の本城を決め旗を立てる。合図で双方戦場に入り乱れ敵を捕えてお互いに持っている札を出して合わせ、位で負けたら負傷兵として自分の本城に帰り動くことができない。こうして進み敵の本城にはいったら勝ちとする。

七 全……………ク二女

八 徒競走……………ク男

九 全……………ク

十 兎飛び……………ク一男

生徒を両組に分け各一列に並べ奇数あるいは偶数を一歩前進させ、向かい合わせる。合図により手をつなぎ、奇数の組は手をつないだ偶数の組をくぐり、飛び、くぐり、飛びを交互に繰り返す。奇数の組が終わつたら偶数に組が同様に言い、最後者が早く運動を終えた方を勝ちとする。

十一 円形旗送り……………高男

二組に分かれそれぞれに同じおきさの円形を作る。先頭の生徒は大将旗を持ち合図とともに円形の外側を走り次の生徒に旗を渡す。早く終わった方を勝ちとする。

十二 連立競争……………尋一女

十三 源平旗送り……………ク二男

十四 盲啞競争……………ク三男

四男

生徒は二列横隊並び、二番目の生徒は目を覆い一番目の生徒は言葉を話すことができない啞者とな

る。合図とともに盲者と啞者は始めの交代線まで走り、次の交代線までは盲者は啞者を背負い啞者は盲者に方向を教えながら走る。決勝線までは啞者が盲者を背負い走る。

十五 全

十六 提灯競争……………高女

提灯・ろうそく・マッチを用意し、出発線から数間離れた所に提灯・ろうそく・マッチを並べて置く。合図で走り、その提灯に火を入れ持つて走る。決勝戦内に早く入っても消えた提灯では勝ちにならず、もし途中で消えた場合、元に戻つて点火し再び走る。

十七 障害物競争……………ク二男

全生徒を二組に分け縦に一列に並べ、障害物の名称(橋・坂道・山・海・川・谷)を記した旗を障害物とする。旗に「橋」とあれば片足で、坂道は坂道を歩くように、山は山を登るように、川は次の生徒の来るのを待ちその生徒に背負われて渡り、谷は幅跳びをするなどして早く終わった方が勝ちとする。

一八 全……………ク三男

四男

一九 綱引……………尋一男

二十 来賓競争

余興

なお参考に高島文書の中の「石狩尋常高等小学校運動会順序」（本文3P下段）を記せば、以下のとおりである。

「1開会ノ辞2君ガ代3カラス4一人一脚5お給仕6芋拾ヒ7お手玉8二人三脚9お手玉10縮足11掃除仕度12背面13唐籠14徒歩15使命16蛇行17鎖行進18徒歩19二人三脚20徒歩21スプーン22兵式体操23物干24旭二句25徒歩26十字横送り27友愛28アンベルコーラス29徒歩30トンボ釣り31札合せ32徒歩33旗取34城落35大角力 昼休み 36桃太郎37提灯38徒歩39全（徒歩）40バスケットボール41食菓42メーボルダンス43綱引き44糸巻キ45障害物46選手47全（選手）48各種競争49来賓50委員51卒業生52職員53□□し54閉会ノ辞55萬歳 以上」

参考資料・引用文献

『実験団体新遊戯法』吉井栄著、辻本宇蔵 明治三十六・二

『実験日本遊戯』佐藤福雄他、宝文館 明治三十六・五

『新聞に見る石狩・厚田・浜益歴史年表』（明治21年～明治25年）

二〇〇七 鈴木トミエ編著

『日本新遊戯法』米田源次、堂 明治三十三・六

『小学遊戯法卷1―3』

花岡朋太郎編、大辻文盛堂、明治二十一・五

「村山本家石狩転出二伴う十二ヶ条心得書ノ事」

村山家文書を読む会

心得書之事

一 本店引越一条諸事

爰許ニおゐて 評決相成候

半々豫其懇意有之度

候事

一 問屋店又七殿家族

當年中引越ニ相成候

哉心得度候 兼而城下表

ヨリ数度問合ニ預リ居候事

一 漁場ヶ処々々近年到而

破損いたし候ニ付手配行

届候半々夫々修理いたし

申度候事

心得書之事

一 本店引越一条諸事

爰許ニおゐて 評決相成候

半々豫其懇意有之度

候事

一 問屋店又七殿家族

當年中引越ニ相成候

哉心得度候 兼而城下表

ヨリ数度問合ニ預リ居候事

一 漁場ヶ処々々近年到而

破損いたし候ニ付手配行

届候半々夫々修理いたし

申度候事

一 城下表ヨリ當春中

差下し候番人中引越

願兼而申出も有之候得者

可否急速返答

申遣し度候事

一 石狩表居合之番人中

給料取究呉候様兼而

願出も候得者 前同断

之事

一 スクツシ歎願向兼而

村山唯五郎様より内意も

有之候得者差扣罷在候得共

当年入方周旋向心付

候廉者無遠慮申出

速ニ舊復いたし候様

取計申度候事

城下表ヨリ當春中
差下し候番人中引越
願兼而申出も有之候得者
可否急速返答
申遣し度候事

石狩表居合之番人中
給料取究呉候様兼而
願出も候得者 前同断
之事

スクツシ歎願向兼而
村山唯五郎様より内意も
有之候得者差扣罷在候得共
当年入方周旋向心付
候廉者無遠慮申出
速ニ舊復いたし候様
取計申度候事

一 本店引越一条旧冬
 以来函館表并城下
 表二おもても布施様并
 御留主居福井様杯江
 内実申上置候儀ニテ往々
 者是非爰許ニテ起
 業可有之哉与存候得者
 只今爰許ニテ永住
 願差出し可申哉又者
 明春差延可申哉
 決定御差圖ニ預リ
 申度候事

一 兼而注文い多し
 南部表ニ出来相成候
 問屋店建家急速
 當方江引取申度候事

一 本店引越一条旧冬
 以来函館表并城下
 表二おもても布施様并
 御留主居福井様杯江
 内実申上置候儀ニテ往々
 者是非爰許ニテ起
 業可有之哉与存候得者
 只今爰許ニテ永住
 願差出し可申哉又者
 明春差延可申哉
 決定御差圖ニ預リ
 申度候事

一 兼而注文い多し
 南部表ニ出来相成候
 問屋店建家急速
 當方江引取申度候事

一 石狩業躰模様

二寄臨機應変之取計
可申儀者兼而決心罷在
候得共尚可然御心付
も候半々御教諭ニ預リ
申度候

一 南部番人船頭役之

者共以後下仕候ニ付而者
心得向決定御差
圖ニ預リ度候

一 明春者鯡漁業至而

六ツケ敷年柄ニテ当年
冬中ヨリ夫々手配
いたし置不申候而者以の
外不都合可有之哉
与存候得共秋味業
躰無之候而者越年之
者多人数差置候譯

一 石狩業躰模様

寄臨機應変之取計
可申儀者兼而決心罷在
候得共尚可然御心付
も候半々御教諭ニ預リ
申度候

一 南部番人船頭役之

者共以後下仕候ニ付而者
心得向決定御差
圖ニ預リ度候

一 明春者鯡漁業至而

六ツケ敷年柄ニテ当年
冬中ヨリ夫々手配
いたし置不申候而者以の
外不都合可有之哉
与存候得共秋味業
躰無之候而者越年之
者多人数差置候譯

合二も参り兼可申哉左候
得者城下来り之番人
稼方之内是非手ばなし
かた幾者共人撰いたし
右取仕度いたさせ申度
既二前段城下来り番人
引越し願も有之候得者
此儀与照らし合せ都合
能御工夫方御決定
成度候事

一
勝内元場大破損二
相成迎秋中凌方も
無之哉二心得居候取繕
見込丈問屋普請
序ヲ以聡と作事向
決談いたし度候事

合二も参り兼可申哉左候
得者城下来り之番人
稼方之内是非手ばなし
かた幾者共人撰いたし
右取仕度いたさせ申度
既二前段城下来り番人
引越し願も有之候得者
此儀与照らし合せ都合
能御工夫方御決定
成度候事

一
勝内元場大破損二
相成迎秋中凌方も
無之哉二心得居候取繕
見込丈問屋普請
序ヲ以聡と作事向
決談いたし度候事

右十二ヶ條之外御心付
之廉々急速御決
談御諭命奉仰候

以上
午

六月十一日日

《語句の意味》

- 一条(いちじょう) 〓 一件
- 爰許(ここもと) 〓 この場所 福山のこと
- 半々(はば)
- 豫(かねて あらかじめ)
- 懇意(こんい) 〓 心安いこと 村山家と付き合いの深い方
- 又七 〓 阿部屋村山廻船問屋二代目利兵衛
妻可久(かく) は村山金六の娘で又七は婿
- 明治三年春小樽へ移る 『小樽商人の軌跡』より
- 心得(こころえ) 〓 承知する
- 可否(かひ) 〓 いいか悪いか
- 取究(とりきわめ) 〓 きめる
- スクツシ(シツクシ) 〓 祝津 寛永年間には蝦夷部落として既に知られていた 『小樽市史 第一巻』より
- 村山唯五郎(阿部屋) 〓 村山家親類 明治三年春小樽へ移る
問屋頭取に任命される 『小樽商人の軌跡』より
- 入方(いりかた) 〓 年の終わり
- 周旋(しゅうせん) 〓 世話をする あっせん
- 廉(ところ) 〓 ある事柄の原因 理由となる点
- 舊復(きゅうふく) 〓 復旧
- 旧冬(きゅうとう) 〓 去年の冬 昨冬 明治二年

右十二ヶ條之外御心付
之廉々急速御決
談御諭命奉仰候

- 函館 〓 明治二年に「箱館」が「函館」に改められた
- 布施様 〓 布施忠治のことか？
- 杯 (など)
- 当方江引取 〓 建築材料の注文をやめる
- 業躰 (ぎょうたい) 〓 経営のありさま
- 下仕 (したつかえ) 〓 船頭役乗組員を格下げする
- 六ツケ敷 (むつかしき) 〓 難しい
- 与 (と)
- 越年 (えつねん・おつねん) 〓 年を越すこと
- 譯合 (わけあい) 〓 意味 わけがら
- 幾 (き)
- 既二 (すでに)
- 迎 (とても) 〓 国字
- 凌 (しのぐ) 〓 苦しい局面を切り抜けること
- 取繕 (とりつくろう) 〓 ていさいをかざる
- 聡と (しかと) 〓 はつきりと たしかに まちがいなく
- 普請序 (ふしんじょ) 〓 土木工事の始め
- 午六月十一日 〓 明治三年庚午 (かのえうま) 年と思われる

※この文書は阿部屋村山金八郎 (七代目) の頃のものと思われるが、宛先がどこであるか不明である。

解説

今回取り上げた「村山本家石狩転出二伴う十二ヶ条心得ノ事」は、明治三年の文書と推定される。村山本家が石狩に移転した年次は、必ずしも明らかでないが、村山耀一氏による「年表で見る村山家の沿革」によれば明治五年 (一八七二) 八月に村山伝次郎名で「石狩本陣再興嘆願書」が出ていることから、少なくともこの時期よりも前に本家移

転が行われていたと考えられる。この文書は、番人の配置や採用、漁場の補修などの諸問題をどうするのかなど移転に伴う諸問題を上げ、指示決断を請願う内容である。書いたのが七代目金八郎とすれば、有力な親戚筋あるいは町年寄などに宛てた書状と考えられるが詳細は不明である。

ところで村山家に関する文書資料は大きく二群あり、現在二つの図書館が所蔵している。一つは「村山家資料」というコレクション名で昭和五十八年村山家から北海道開拓記念館に一括寄贈された資料で総数一〇六九点ある。もう一つは北海道大学付属図書館に所蔵されている「村山家文書」と呼ばれる、簿冊七十三冊、書状・証書類千二百二十三点、地図三十点、発句集六十七の一三九三点の資料である。今回の「村山本家石狩転出二伴う十二ヶ条心得ノ事」はこの北大の「村山家文書」の中の一つである。

村山本家が松前から石狩に移転した理由は様ざま考えられるが、やはり石狩改革そして戊辰戦争などの社会的混乱により手広い漁場経営ができなくなったことが上げられる。ことに村山家は松前 (福山) の有力な町年寄の一人である。松前に於ける町年寄は単に市中とをつなぐ補助的な役割でなく藩政に深くかかわるものであり、特権的商人として大きな影響力があった。またそうであったからこそ、場所請負人としての地位が保証されたのである。それが幕末期の石狩改革そして間もなくの維新とそれに伴う大きな社会制度変革により、存立基盤が失われ生活が成り立たなくなった。また町年寄りという組織制度も崩壊し相互扶助も出来なくなったことから創業の地 (松前) を捨てざるを得ない事態になったと考えられる。とくに明治に入ってから明治元年十二月の榎本臨時政権によって石狩場所請負を命じられ運上金二千五百両のうち六百両を即納させられる事件が起こり、これが原因で明治二年の新政権による審問、入牢、漁場建物、蔵、道具類の封印、出稼ぎ引場の接収、本陣守の罷免などの処分が起きた。こうした一連

の事件は事業経営をさらに悪化させ、本家の石狩移転もやむなしの方向性が出され、この決断をする過程でこの「十二ヶ条心得ノ事」が作成されたのだろう。また、石狩が引越し先として選定されたのはやはり、西蝦夷地の中心であり村山家の根拠地として長く慣れ親しんでいたことがあげられるだろう。

意味の充分取れない部分もあるが、「本店の引越しに伴っての城下および函館表への相談。あるいはこの春派遣した番人らの引越し願いどうしたらいいか。石狩番人らの給料支払いの件。南部に立てた問屋建物の引き渡しの際。石狩の経営を臨機応変に行なうようにとの指示してくれる様にとの依頼。南部にいる番人船頭の今後の処遇の決定。明春の鯨漁の準備不足に伴い城下の番人のうち有能なものを選び準備させて欲しい。(小樽の) 勝内場所が被害を受けて秋はしのぎきれないので問屋普請を始めることに決定したいこと。」など十二の課題を並べこれらについて結論を出して欲しいと書いている。時あたかも戊辰戦争終結からちょうど一年余り、まだ幕府軍への協力事件の余燼もくすぶる中で石狩引越しあるいはそれを伸ばすべきかなど、重要な決断を迫られている様子が窺われ、維新の激動の波に洗われる旧場所請負人の姿が垣間見てとれる重要な文書である。

なお、村山家文書の年代は天明四年～明治三十八年(一七八四から一九〇五)にわたる。八代の栄蔵が石狩を去り小樽に移ったのが明治四十一年のこと、この資料群には村山本家が石狩を去る間際までの文書が含まれていることになる。(石橋孝夫)

古谷長兵衛について

工藤義衛

平成十九年三月二十日、石狩市新町一番地の宝珠山金龍寺が所蔵する「妙鮫法亀善神」像が、「金龍寺の鮫様」として北海道の民俗文化財に指定された。

古谷長兵衛は、「金龍寺の鮫様」の奉納者で、明治時代の漁場経営者である。この古谷長兵衛の経歴については、すでに田中實氏によって紹介されている。(注1)

ここでは、文化財の指定を機会に、古谷長兵衛に関する資料を整理しておくこととしたい。

古谷長兵衛の経歴についての唯一の資料は、河野常吉の聞き書きである。河野常吉は、北海道史研究の泰斗で、明治三十六(一九〇三)年五月に石狩町を訪れ、高嶋晴信、山田久五郎、古谷長兵衛の古老三入から聞き取りをおこなった。その際、河野は古谷について「古谷長兵衛 福山ノ人ニテ⑤ノ番人ナリ石狩ニ来テヨリ五十三年間ト云、今年八十二歳」と書いている。(注2)

古谷は、松前(福山)出身で、明治三十六年に八十二歳であったというから文政三(一八二〇)年頃の生まれと推定される。石狩に来たのは明治三十六年の五十三年前、つまり嘉永三(一八五〇)年頃である。「⑤」は、石狩場所請負人として知られる阿部屋(村山家)の屋号である。古谷長兵衛は、阿部屋が経営する漁場の番人が仕事であった。

古谷は、明治に入って村山家から独立し、自ら漁場を経営していた。明治期の鮭漁に係わる各種資料に古谷長兵衛の名が見える。(表1)

漁場は海(海岸)と川のそれぞれに持っていた。明治四十二(一九〇九)年の「漁場標準価格表(鮭ノ部)」では、海鮭第二号漁場が古谷長兵衛の漁場となっている。(注3)北海道庁作製の「石狩郡漁場実測図」によれば、この二号漁場は、分部越のややオタルナイ川河口よりに位置する。(注4)古谷がいつ頃からこの付近の漁場に関わっていたのかはつきりしないが、明治十一年に分部越に魚干場という名目で土地を持っており、この頃すでに分部越の漁場経営に携わっていたと推定される。(注5)

川にあった漁場については、若干の変動はあるものの、ほぼ明治時代を通して、現在の伏籠川河口の対岸付近にあった「オタペリ」の漁場か、その周辺の漁場の経営をおこなっていたようである。



古谷の所有地とオタペリ漁場

古谷長兵衛とオタベリ漁場のつながりを示す最も古い資料は、明治4、5年ころの漁場のようすが記載されているとみられる「石狩郡図(三番)」である。同図に「ヲタヘリ 凡取揚高 五万三拾四石七斗八升三合三勺三才 古谷長兵衛持」とある。(注7)

オタヘリの漁場は、古くはアイヌの漁場であったが、この頃から古谷ら和人の名前が見えるようになる。(注7)

古谷長兵衛の住居は、親船町南十六番地にあった。(注8) 明治三十九年の「石狩明細地図」(注9)でも古谷が同地を所有していたことを確認できる。

また、同図では、オタベリ漁場に程近い生振南三線三号付近の土地も所有している。こうした土地の所有は、オタベリ漁場経営に関連するものだったのだろうか。

前出の明治四十二年「漁場標準価格表(鮭ノ部)」には、各漁場の価格も掲載されている。これによれば、古谷が所有する漁場価格の総計は、千九百円であった。この資料にある魚場主三十六人のうち、評価額が千円を超えるのは十六名である。古谷は、上から十二番目で、村山コト、遠藤又兵衛、井尻静蔵は、ずば抜けているが、佐藤松太郎、工藤重作などとは肩を並べており、中堅の漁業者といったところであろうか。

明治十三年には石狩漁民会社の頭取(注11)を、明治三十六年には石狩郡水産組合議員を務めている。(注12)

所有する漁場の評価額や、漁業団体の役員を歴任していたこと、明治時代を通して漁場経営に携わっていたことから、古谷が石狩町の主だった漁場主の一人であったことは間違いない。

明治二十二年九月十五日に「鮫様」像を金龍寺に奉納した。金龍寺にある像を収める厨子の内側に朱漆で、

「奉納 明治二十二年九月十五日

古谷長兵衛
宝珠山二世嗣法代」

とあった。(注10)

残念ながら金龍寺が厨子を塗り直した際に、この文字は塗りこめられ、現在は見る事ができない。

没年も生年と同様、明確ではない。これまで何度も引用した明治四十二年「漁場標準価格表(鮭ノ部)」では第三十六号漁場の漁場主となっているが、翌明治四十三年の「漁場見積標準価格表」では、第三十六号漁場の漁業者は「古谷慶吉」となっている。(注13) 明治四十二年に亡くなったとすれば、九十才前後であったろう。

生振の古老、菅原三郎は、「今の茨戸ガーデンのところに古谷という大きな漁場(鮭の引き網の場所)があった。」と述べている。(注14)

菅原は、明治四十一年生まれであるから、明治四十二年頃に古谷長兵衛が亡くなった後、大正に入ってもしばらくは、古谷家による漁場経営が続いていたと推測される。

謝辞

本橋を「いしかり暦」に掲載することをお許しいただいた石狩市郷土研究会の皆様には感謝申し上げます。

注1 「古谷長兵衛は福山の人で文政三年生まれ、村山家の番人として嘉永三(一八五〇)年頃石狩に來た。明治期はバラト附近の鮭漁場などを経営した。」

石狩弁天社創建三百年記念事業実行委員会編 (一九九七) 石狩辨天社史

注2 河野常吉「石狩場所」 「石狩古老三名の談話 明治三十六年五月」 北海

- 道大学附属図書館所蔵（請求番号 別51・4 Kon）『石狩辨天社史』に該当部分が収録されている。
- 注3 田中實・前田薫徳編（二〇〇二）『石狩漁業組合史』石狩湾漁業組合
- 注4 北海道庁（一九〇一）石狩郡漁場実測図
- 注5 石狩町（一九八五）石狩町誌中巻1 八十三ページ
- 注6 「石狩郡図（三番）」北海道大学附属図書館所蔵 請求番号図類23
- 注7 「石狩アイヌと共救組合（樺太アイヌ）の石狩川鮭場所推移一覽表（稿）」田中實・前田薫徳編（二〇〇二）前出八十ページ
- 注8 高嶋家文書「東西蝦夷地旧請負人村山伝次郎履歴概略調書」（整理番号T-1-21）石狩市教育委員会所蔵
- この資料は、道立図書館所蔵の河野資料にあり、かつて長谷川嗣氏により紹介されている。（長谷川嗣編 一九七三『石狩場所請負人村山家記録』石狩町資料第3号）しかし、古谷の住所は、高嶋家文書のみに見られるものである。
- 注9 石狩新聞社（一九〇六）『石狩明細地図』（親船町南16番地は、現在の親船町16番地にあたる）
- 注10 石橋孝夫（一九八一）『鮫様の誕生』いしかり暦第2号 石狩町郷土研究会
- 注11 石狩町（一九八五）石狩町誌中巻1 一三七ページ
- 注12 高嶋家文書「承諾書」（整理番号T-1-197）石狩市教育委員会所蔵
- 注13 高嶋家文書「漁場見積標準価格表」（整理番号T-1-44-2）石狩市教育委員会所蔵
- 注14 前川道寛（一九八〇）『生振古老物語』いしかり暦創刊号 石狩町郷土研究会

表1 古谷長兵衛関係資料一覽

年代	内容	容	資料名	出典
明治一三年	<p>漁場区域 収獲高石数 収税高石数</p> <p>当矢白 二一、〇一三本三五〇石 五、二五四本八七石</p> <p>茨戸太 二四、三七九本五七九石 八、五九五本一〇三石</p> <p>丸木舟一 保津舟二 引網間数 統数 漁夫人員 漁場主</p> <p>丸木舟二 一五〇 二 二八 古谷長兵衛</p> <p>丸木舟一 一五〇 二 三二 古谷長兵衛</p>	<p>明治十三年石狩川鮭漁獲漁具一覽表</p>	<p>石狩漁業協同組合史</p>	
明治一五年	<p>サツポロプト(札幌太) 古谷長兵衛</p> <p>代佐藤弥右衛門 四、九五〇本</p>	<p>石狩郡漁民会社役職者</p>	<p>石狩町誌中卷一</p>	
明治一九一〇年	<p>ヲタビリ 木戸萬蔵</p> <p>サツポロプト 古谷長兵衛</p> <p>ヲタビリ 木戸萬蔵</p> <p>サツポロプト 古谷長兵衛</p>	<p>石狩アイヌと共救組合の石狩鮭場所 推移一覽表</p>	<p>石狩漁業協同組合史</p>	
明治二二年	<p>石狩郡鮭漁業人 三拾五名連署</p> <p>藤野弥三兵衛、高嶋晴信、船水元吉、古谷長兵衛、大矢垣次郎、工藤多六、村山ソノ、石川正叟、共救組合、石狩アイヌ、長浜吉松、菊地喜助、金沢勇吉、奥村兵助、白井権蔵、柳内亀之進、鈴木徳右エ門、玉川啓吉、寺尾秀次郎、田中武左エ門、森山友太郎、古谷忠三郎、福永作太郎、牧口賢祐、齊藤甚七、赤石せき、木戸萬蔵、山崎忠兵衛、横山喜蔵、村山宗策、泉賢次郎、岡本久兵衛、程山熊次郎、南次之吉、</p>	<p>石狩郡鮭漁業組合規約並契約</p>	<p>石狩漁業協同組合史</p>	
明治二二年	<p>(海面) 古谷長兵衛</p> <p>(河面) 木戸萬蔵</p> <p>ヲタビリ 古谷長兵衛</p> <p>ヲタビリ 古谷長兵衛</p> <p>茨戸太 古谷長兵衛</p> <p>サツポロプト 古谷長兵衛</p>	<p>石狩アイヌと共救組合の石狩鮭場所 推移一覽表</p>	<p>石狩漁業協同組合史</p>	
明治三三年	<p>「三百五拾五東四尾 百拾八石四斗 建網巻」雇夫 内地人一一北海道一七 二七 分部越 古谷長兵衛</p> <p>「百六十三東五十四石三斗三升三合 曳アミ二 内地人十三北海道入十五 二八人 茨戸左 古谷長兵衛」</p>	<p>明治三拾三年鮭収獲高其他一覽表</p>	<p>高嶋家文書</p>	
明治四二年	<p>漁場見積備格円 漁場番号 漁業者氏名</p> <p>一四〇〇 古谷長兵衛</p> <p>一五〇〇 川鮭第三十六号 古谷長兵衛</p> <p>一五〇 川鮭第二十号 古谷長兵衛</p>		<p>石狩漁業協同組合史</p>	

石狩市内の屋号

高瀬たみ・吉岡玉吉編

調査協力 田中實・中島勝久・沖本義尚・

蓮田栄一・石橋孝夫

「昔は屋号ばかりで呼び合い、本名なんて知らなかった」というほど屋号が家の名前だった本町地区。現在もわずかに屋号で呼び合う風習が残る同地区の人たちから、「知っている人たちから聞いて記録してほしい」という声と、以前から「今、残さなければ」という気持ちがあったところに、市民図書館で行われている古文書学習「村山家文書を読む会」で、文書に屋号が記されているのを見て、会代表の村山先生から「屋号を調べてみるのも面白いかもしれないね」といわれたのがキツカケで、屋号を調べてみようと思いたつ。

しかし、どうやって調べたらいいのか。石狩市関係の書物といっても『石狩町誌』中巻一に少し載っているだけしか知らなかった私は、思ったより難しいことだとしらされた。それでも石狩市関係の本から探し、人から聞いて記録してみたがまとまった数にならず困っていたところ、石狩市郷土研究会々員であり私設資料館尚古社館長の中島勝久さんが同資料館所蔵の古い市街地図に載っている屋号を書き出して下さった。地図には、商店名の上に商売の信用でもある屋号がしっかりと記載されていたのである。

表1は、明治三十一年八月付け『北海道毎日新聞』商号登記公告に掲載された中から石狩町関係のものを抜粋した「石狩町の商家」である。これは秩父事件首謀者の井上传蔵（本町地域に二十三年間伊藤房次郎の偽名で居住）の研究者で知られる俳人の中嶋幸三氏が新聞のマイクロフィルムで探したもの。残念ながらこのときは小間物屋を営んでいた井上传蔵の商号登記はなかったが、表5 明治三十九年の広告

『石狩実業家案内』に「イ伊藤房次郎 小間物 文具商」と掲載されている。この広告から居住地と、どのような商いをいつごろからしていたのか分かったのである。この資料も私設資料館尚古社提供である。会顧問の田中實先生からは、同氏著書の『石狩漁業協同組合史』に漁業者の屋号が記されていることを教示され、表8とさせていただいた。漁場という仕事場で、漁具にそれぞれの所有物であることを示す印（家印）が、そして市場に出荷する箱にも焼印が必要だったという。また、同氏から昭和十三年の電話帳より抜粋した屋号資料もいただいた。表7である。「表18 平成2年・平成5年の電話帳」と比べると商いの「のれん」である屋号の記載が多い。

さらに、同会々員の吉岡玉吉さんが調べた表9から13には、呼び名、渾名が記載されている。当初は普段使っている呼び名、渾名まで屋号に入るのだろうか、と疑問に感じ調べたところ広い意味で含まれることが分かった。読むにつれ、当時の本町地区の様子がよみがえるようである。

本町に在住の滝村静子さんは「昔、電話の交換手をしていたころは、電話番号の問い合わせに屋号が多かったですよ。というのも同じ苗字の家が多いからそのほうが分かるんです。だから今も本町の人たちはマルダイ・ヤマタマ・カネダイ・カネカのおばちゃんって呼んでいます」と話してくれた。本人に向かって言うときはヤマタマさん・カネダイさんと「さん」を付けるという。親類が集まる同姓の家が多い本町のような狭い地域だからこそ便利に使われた。そして親密な付き合いのなかで渾名が付けられる。一種のブームであったような気がする。とにかく屋号は日常生活の中で人々が使っていた呼び名であること、いままも地域で生きていることを改めて学ぶ機会となった。

これで石狩市の屋号はだいたい出揃ったかなと思ったころ、「いしかりガイドボランティア」の仲間から「五の沢の山谷さんにもある」と教えられた。早速、郷土研究会々員の沖本義尚さんに伺ったところ

高岡・五の沢の農家の家々で屋号を使っていたという。さらに、古い事柄を大切にされる北生振の蓮田栄一氏に尋ねたところ、「生振のほとんどの家にあつた」という。早速、調べて下さったのが表17で同時に会の沖本義尚さんが調査した高岡五の沢での調査も掲載した。また、「中生振も元は陸続きだったので持っているはず」と話された。今回は調査をしていないが、折を見てあつてみようと思う。このように石狩の場合、農業や漁業で使っていた所有印も屋号と呼んでいたようである。

他にも、神田商事(運送業)の神田広次さんには姓名を使わず屋号だけで取引できたころの話を、まるで佐藤水産には社の屋号の変遷をお聞きした。

1 屋号の歴史と変遷

「屋号は姓のない時代の名残でないか」と高岡の沖本さんの言葉にハッと、気軽に親しみをこめて呼んでいた屋号にどんな歴史があつたのか知りたくなつた。

岡野信子『屋号語彙の開く世界』に「明治三年(一八七〇)、新政府はそれまで貴族、士族、豪商など特定の階層だけが名乗っていた姓を平民にも許すとの布告をだした。これは徹底せず、明治八年(一八七五)には「自今必苗字相唱可申」(じこんかならず苗字相唱申すべし)と、再び太政官布告が出されている。しかし、依然として徹底は困難だつたようで、例えば農村の寺の過去帳に姓名が見えるのは、私が拝見した限りでは明治十六年頃以降で、それ以前は屋号と名前が書かれていた。」と記載されていた。やはり、沖本さんの言うとおり江戸時代は武士と特例を除いて姓氏を付けることができないう時代であつた。

姓を名乗れなかつた時代、広い地域にわたって商いをするのに「どここの誰兵衛」じゃ都合が悪い商人は、阿部屋・飛騨屋・栖原屋などのように出身地の地名を付けた言葉だけの屋号とか、廻船問屋・旅館屋・髪結屋・鍛冶屋・床屋・桶屋など生業を名乗る言葉屋号を付け

苗字代わりとし、その下に「誰兵衛」と名前を付けて表示した。それが古文書に出てくる名前の書き方である。また、⑤のように記号と文字を組み合わせた家印は、縁起の良い記号と漢字・仮名文字を組み合わせ、辞書にも載っていないシルシとなる造語を作り家印とした。それらを総称して屋号といい、読み方は上から下へ、左から右へとよむようである。『屋号語彙の開く世界』から引用すると

○ マル 金運・福德・円満を表す。

△ ヤマ 富が山ほどつもるように。漢字の山も同じ。

□ カネ 木工職人の用いる曲尺の形を模す。金と同音であることから富は願望。

メ シメ 金が入つたらメて出さない。

入 イリ 富が入るように。すなわち招福の願望。

△ ウロコ 漁獲を意味する。

□ マス ますます繁盛との願望。

× チガイ 互いに助け合う。二本の矢を交差させた図柄「違矢」に発想。と記されているように、家印には「ますます繁盛するように」と将来への期待や願望が込められている。

屋号には、商号・商標として登記した屋号、所有権を示す家印、人々が容姿・性格・居住地の地勢など様々な特徴をとらえて自然に呼んだ渾名も入るといふ。

その屋号も時代とともに使われなくなってきた一方、商人の屋号は時代とともに変化している。最近では商号・商標としての屋号がデザイン化・彩色され、会社の「シンボルマーク」、「ブランドマーク」または「ロゴマーク」と呼称し屋号と呼ばれなくなってきたことである。

たとえば、本町地区を創業の地とする一九四八(昭和23)年創業の「まるだい佐藤水産」は創業者の思い入れのこもった屋号⑥マルダイであった。同社発行の「カムイチェブ」所収の「佐藤水産シンボルマークの由来」によると「大きな会社を目指して○に大」とある

㊦の屋号は、40年間同社の信用の商標として使われてきた。その間に大きく成長した同社は、一九八七年から二度の変更を経て現在の通称ハートマーク[㊦]になった。今現在、シンボルマークは併せて二種類あり、新鮮な二匹の鮭と会社を支える人と真心(ハート)をデザインした企業理念をあらわすマーク[㊦]は生産・製造・全国卸販売で、[㊦]は小売店舗・レストランのブランドロゴマークとして使用しているという。ところで、創業の地である親船町に現在建設中の「魚醬工場」で㊦の旧屋号が復活使用されるようである。この春完成予定の工場なので出ま上がってみたいと分らないが、外観完成予想図は長い歴史をもつ本町地域に似合った蔵造りの工場で、その妻壁に初代の心意気が伝わる㊦の屋号が付いているのである。また、「マルダイ、マルダイさん」と親しまれた屋号が創業の地親船町で蘇えることを心から望むところである。

2 商店の屋号

屋号を調べるのに最初にあたったのが市街地図だった。古い地図ほど屋号が書かれ、それも大きく入れてあり、中には屋号のみというものも多くある。旅館、大きな商店から小さな商いを営むものまで屋号をもっていたことを示している。ということは当時、名前は知らないが屋号は知っているという時代だったようである。屋号で呼ばれ親しまれている店にとっては、地図上の屋号は探しやすいし、屋号のみを掲載するほど家印が信用されていたように感じた。

本町地区の㊦マルゴ中島商店は金運・福徳・円満を表す○に店の創立者中島伍作の五を中に入れ屋号としている。伍作の子の房蔵の弟亀蔵が近くにのれん分け(分家)をした時㊦の下に一を付けて㊦マルゴイチとした。本家・分家の関係は本家の屋号の下に漢数字の一とか二を付けて表していると『屋号語彙の総合的研究』岡野信子著にも記している。

また、表に見る大黒屋・桜湯・石狩座のように家印のない屋号もある。大黒屋はたぶん七福神の一人で福徳を与える神にあやかりたいと付けた願望の屋号化。桜湯は浴場にふさわしい屋号。劇場の「石狩座」も通称の呼び名であるが、これも屋号に入る。

地図から屋号を拾って分かったことであるが、「扇屋」のように屋号の他に商号としての家印[㊦]、[㊦]と三種類持つっているのは、味噌醬油醸造と貸座敷を商っていた同家が商売によって使い分けていたようである。

運送業神田商事を営む神田さんは「商売で発行する市場の仕切書(金券)も屋号だけで取引をしたものです。姓をあまり使わず屋号で通っていたときは、屋号の方がピンとくる」と商家や漁家の印を表示するだけで良かった便利な時代を懐かしむように話された。

今も本町地区では、ヤマタマ(すでに屋号が食堂の名前になっている村田商店)、カネダイ(金大亭)、マルダイ(佐藤水産)、マルマン、カネタイチ、カネキチ……など屋号が商店名より使われている。

富良野出身の私は屋号で呼んだ記憶があまりない。『屋号語彙の開く世界』岡野信子著によると「屋号は漁村に多かった」と記しているように、開拓の遅かった北海道の内陸よりもやはり早くに開けた石狩の方が多く、また日常的に使用する頻度も多いのだろう。

都市化が進み生活必需品は大資本の大型店でほとんどまかなう現在、「看板に屋号を掲げた専門店が姿を消した中心街は以前のような活気がなくなり、おもしろみがなくなった。」「隣近所の付き合いが薄くなった住宅地では渾名もなくなった。マイナス面の渾名は良くないが、何だか味気ない気がする。」と、石狩市郷土研究会の例会で『旧石狩市の屋号』と題して発表したとき聞かれた意見である。

「表20 現在、看板などに見る屋号」(平成19年現在)で多くみられるのは、花川のメイン通りより一歩なかに入った住宅街で見られたのが特徴である。経営者の思い入れが伝わる屋号が結構あったので表19

として入れた。また、石狩湾新港の工業地では、昔ながらの屋号はほとんど見られない。大きな会社は現代に合ったシンボルロゴマークばかりである。ここにも時代を感じる。

番	名	品	名	数	量	番	名	品	名	数	量	番	名	品	名	数	量
1	石狩	魚	魚	1	尾	1	石狩	魚	魚	1	尾	1	石狩	魚	魚	1	尾
2	石狩	魚	魚	1	尾	2	石狩	魚	魚	1	尾	2	石狩	魚	魚	1	尾
3	石狩	魚	魚	1	尾	3	石狩	魚	魚	1	尾	3	石狩	魚	魚	1	尾
4	石狩	魚	魚	1	尾	4	石狩	魚	魚	1	尾	4	石狩	魚	魚	1	尾
5	石狩	魚	魚	1	尾	5	石狩	魚	魚	1	尾	5	石狩	魚	魚	1	尾
6	石狩	魚	魚	1	尾	6	石狩	魚	魚	1	尾	6	石狩	魚	魚	1	尾
7	石狩	魚	魚	1	尾	7	石狩	魚	魚	1	尾	7	石狩	魚	魚	1	尾
8	石狩	魚	魚	1	尾	8	石狩	魚	魚	1	尾	8	石狩	魚	魚	1	尾
9	石狩	魚	魚	1	尾	9	石狩	魚	魚	1	尾	9	石狩	魚	魚	1	尾
10	石狩	魚	魚	1	尾	10	石狩	魚	魚	1	尾	10	石狩	魚	魚	1	尾

昭和15年から20年代の長野商店の大福帳の一部⑤、右、の屋号が見られる。(いしかり砂丘の風資料館蔵)

3 漁家の屋号

漁業を営む家の屋号は、農家の屋号と同じように、所有物であることを表すため海上や陸で使用する漁具や、船に付けられた所有印である。海上では浮標(ダンブ)に付けられた屋号で誰のものか見分けがつき漁ができたという。漁村には同じ名前が多かったので取引も屋号の付いた箱で出荷、伝票も屋号だけで通用したという。必需品だったのである。

「表11 昭和初期から同20年代の船名」、「表7 昭和13年6月石狩

地方電話番号簿の屋号」では、所有する漁船や運送船の名前を呼び名(広い意味でこれも屋号)としていたことが分かり興味深い。同じ姓が多い小さな漁村では作業面や取引で家印屋号が重宝されたが、普段は屋号で呼び合うことはあまりなかったという。

4 農家の屋号

農家の屋号も漁家の屋号と同じで所有者名を示す家印屋号である。高岡の沖本義尚さんによると「とくに忙しい脱穀のときなどは、筵・箕(み)を持ち寄り手間返しをしていた。道具が人数分ないので筵や箕などは墨で、鋸・鋏・マサカリ・皮はぎなどは焼印をして持ち寄っていた。だから、屋号を見れば誰のものかすぐ分かった」というように高岡や五の沢では家々の屋号をおぼえていたという。しかし、農家の家印、屋号は商家のそれと違い道具の持主の判別だけで、屋号で呼び合うことはなかったという。表15の他にも屋号を持っていた家があったそうだが、同じ開拓期に入植していても付けていない家もあるという。所有者の印から農家の助け合いの一端をみる思いである。

同じ高岡の増田さんは、「出身地の愛媛で宮大工を家業としていたが、事情があつて財産を処分して一家をあげて北海道に移住したので、愛媛で使用していた屋号をそのまま使っていると思う」という。また、驚いたことに、増田家の☐カネマスという屋号は今も現役だという。ミニトマトを入れて農協に出荷するコンテナや、共同作業などに使うスコップに焼印を付けているそう。屋号の良いところを大切に利用する優しさに感激した一瞬であった。

また、北生振の屋号を調べてくださった蓮田栄一さんは「水田の用排水路直しや収穫など皆で作業をするときに使うスコップやホーク・トウミなどに屋号が付いていると間違がわなかった。水路も昭和40年後半から機械積みになり今はコンクリートで固められているから必要なくなったね」、「他には町営牧場に預ける馬や牛にも屋号をつけた。

5月に入れるときに馬は爪に焼印、牛は毛をきりこんで印を付けて牧場に放す。そして、10月に我が家の目印の付いているのを連れて帰ってくる。そうすると間違わなくてすむ」という。家畜にも印を付けていた貴重な話を聞かせていただいた。難しくいえば私有物占有印というところだろう。「この辺の者は未だに八幡町の店なんかは屋号で呼んでいるからね。高梨商店のヤマダイ、マルハチの床屋、マルハチのオンチャ(弟のこと)、マルハチのてんぷら屋って普段使っているよ」と日常的に使っていることもわかった。

郷土研究会々員の吉永さんは「国有林から払い下げを受けた木にも家々の焼印が付いていた。それが各家庭に頼んだ木が届けれ、それを冬の燃料に使う薪にするんです」いわゆる木印というもので、普通の家庭にも占有印があったようだ。

5 終わりに

調査には正確な所有者、職業、時代を知るため石狩市に残る地図を使った。また、目的のために作る地図は関係者から資金を集めて作るので鮭漁業者関係のみとか、商業関係のみという地図が多く、従って記載されない屋号がかなりあると思う。しかし、吉岡玉吉氏が調査した資料(表10、13)には地図に無い屋号が多い。

この調査には本町地域の滝本静子氏、神田広次氏、佐藤水産(株)の伊勢屋敦志氏、北生振の蓮田栄一氏、石狩市郷土研究会の沖本義尚氏、田中實氏、中島勝久氏、石橋孝夫氏に調査・お話しを伺い、例会で発表した折には皆さんから貴重なご意見をいただきました。(高瀬たみ)

(補注) 調査の結果多数の屋号が採集され、表1、20(一部江別町の屋号も含む)に示した。このうち表7以降に示した昭和前半期の屋号について、

比較検討は済んでいないため一部疑問も残る部分があり、今後さらに精査が必要であろう。また、屋号の読み方については調査者が調べた



(いしかり砂丘の風資料館蔵)

読みに従っているが、表2、表7、表8については石橋が読み方を付した。このほか明らかな読み違いなどについて石橋が訂正した。なお、桜湯の屋号については同店発行の切符に桜の花びらのなかに片仮名の「サ」と書いたマーク付されたもの最近発見されたが、これが屋号であるかどうか不明である。参考までにその切符を示しておく。

(石橋孝夫)

表1 明治31年8月 北海道毎日新聞「札幌区裁判所 商標登記公告」の屋号
中島幸三資料

屋号	読み名	商号所有者・職業	登記年月日	営業所・他
二	カクニ	長野徳太郎 酒類製造及び販売	明治三二年八月二五日	八幡町
三	カクニ	長野徳太郎 呉服・太物・唐物・和洋小物	明治三二年八月二五日	親船町
高橋酒造所		高橋一精 酒類製造及販売	明治三二年八月二五日	八幡町
一	カクイチ	石川善七郎 太物・小間物・紙書籍・荒物・雑貨	明治三二年八月二五日	親船町
五	マルゴ	中嶋房蔵 呉服太物洋物鉄物瀬戸物米穀雜貨	明治三二年八月二五日	本町
田	カネタ	田口伍助 菓子類・小間物販売	明治三二年八月二五日	親船町
弁	ハチイ	八木栄三郎 金物瀬戸物塗物古着仕立物雜貨	明治三二年八月二五日	親船町
七	マルシチ	計良勇蔵 呉服・太物・荒物商	明治三二年八月二五日	親船町
キ	キ印繁遠桜	今泉泰吉 旅人宿	明治三二年八月二五日	親船町
余	ヤマキ	遠藤重吉 太物・小間物・荒物・雜貨商	明治三二年八月二五日	親船町
十	イチジュウ?	赤石ラク 旅人宿	明治三二年八月二五日	本町
五	マルゴイチ	中嶋亀蔵 呉服西洋織物洋酒紙鉄物荒物商	明治三二年八月二六日	親船町
キ	イチキ?	吉川仁佐 荒物雜貨商	明治三二年八月二六日	親船町
サ	カネサ	若月徳太郎 酒・菓子・書物・雜貨商	明治三二年八月二六日	親船町
余	ヤマキ	木下専松 □□□□□□細工	明治三二年八月二六日	本町
余	ヤママツ	羽生西蔵 呉服・太物・荒物	明治三二年八月二六日	親船町
星	カネホシ	星野辰之助 古物・仕立物・雜貨商	明治三二年八月二六日	親船町
一	イチ印	赤石ラク 荒物類・味噌・醬油	明治三二年八月二六日	本町
五	ゴニ	長嶋周蔵 呉服太物唐物和洋小間物米穀荒物雜貨	明治三二年八月二六日	親船町
下	チガイト	佐藤クラ 菓子製造及販売	明治三二年八月二九日	親船町
全	カネシメ	佐藤儀三郎 荒物・魚類販売	明治三二年八月二九日	親船町
八	ハチ印	本間栄蔵 菓子雜貨商	明治三二年八月二九日	親船町
八	カネシメ	柿崎金太郎 古物・仕立物・雜貨商	明治三二年八月二九日	親船町
山	カネヤマ	山内百度 古物古着荒物商	明治三二年八月二九日	親船町
玉	カネタマ	相馬治郎吉 質屋兼古物商	明治三二年八月二九日	親船町
カ	カネカ	江田源太郎 菓子製造及販売	明治三二年八月二九日	本町
イ	イレマス	川野栄吉 和洋酒乾物缶詰海産物雜貨荒物雜貨商	明治三二年八月二九日	本町
合	ヤマヨ	吉川与之吉 太物小間物米穀荒物雜貨	明治三二年八月二九日	若生町

表2 明治32年10月水陸産物共同委託販売店発起人一同「目論見書」の屋号
田中實調査

屋号	読み名	住所	氏名	備考
イ	イレマス	本町	川野栄吉	
合	ヤマジュウイチ	親船町	佐藤信次	
全	カネマン	本町	金谷長之助	
一	ハチニ	親船町	堀部銀蔵	
全	ヤマジョウウ	船場町	佐藤岩蔵	
水	ミズイチ	船場町	高橋甲子	
余	ヤマホン	本町	榑谷竹蔵	
二	ヤマニ	親船町	村井チヨ	
山	カクシヨウ	仲町	祝田徳工衛	
八	カネシメ	船場町	岡田寛造	
留	ヤマトメ	船場町	田中亀太郎	
十	カネジュウ	親船町	畠山禮造	
八	ヤマハチ	親船町	川村初五郎	
小	カネショウ	親船町	古川多三郎	
今	ヤマウ	親船町	三浦小八郎	
小	チガイマル	親船町	中野宇之助	
小	ヤマシヨウ	親船町	藤井沢馬	
林	カネバヤシ	船場町	高橋定造	
又	カネキユウ	仲町	小林喜作	
又	カネマス	仲町	相原久五郎	
又	カネマス	仲町	堀 清松	
又	カネマス	仲町	北出甚七	
又	カネマス	仲町	古川仁佐	
升	カネマス	船場町	佐藤治郎吉	
各	ダイコク?	親船町	中村清太郎	
各	ヒサマル	親船町	齊藤万太郎	
各	ヒサマルボシ	親船町	齊藤万次郎	
吉	カネキチ	親船町	後藤金吉	
吉	マルフ?	親船町	横谷村治	
合	ヤマサ	若生町	坂田貞吉	

表3 明治36年2月田尻與吉発行「江別町、石狩、厚田市街地明細図」の屋号

注 「石狩、厚田、江別町市街明細図」は36年2月28日小樽田尻與吉出版された一枚ものの図で裏面に「江別石狩厚田名家紹介表」がある。ここでは「明細図」を表3、「紹介表」を表4とする。

石狩市街明細図

高瀬たみ・中島勝久・石橋孝夫調査

屋号	読み名	地図記載の商店名・職業	備考
本町			
㊦	マルニジュウゴ	村山宅 村山漁場 村山建場	村山コト
全	ヤマオウ	漁業 井尻静蔵	
ㄱ	カネマン	漁業 遠藤又兵衛	
ㄴ	カクイチ	石川商店	石川祐太郎
ㄷ	カネタマ	古着・質商	
キ	キジルシ	今泉旅館	今泉余吉
ㄹ	カタニ	商店	長野徳太郎
ㄺ	イレマス	商店	川野栄吉
ㄻ	カネカ	菓子商	紺野捨吉
ㄼ	オオギチヨウ	呉服店	
ㄽ	マルゲン		貸し座敷 陽春樓 山本勘四郎
ㄾ	マルオオギ		貸し座敷 扇松樓
ㄿ	オオギヤ		林長五郎? (喜代吉)
㊀	カネダイ		石黒幸次郎
㊁	マルトク		嘉尋美 徳丸料理店 三上徳太郎
㊂	マルサダ		貸し座敷 松岡定吉
㊃	カクゴン		貸し座敷 阿部権四郎
㊄	マルゴ	中嶋商店	中嶋房蔵
㊅	マタカセ	呉服店	
㊆	ウロコイ	商店	岩崎清五郎
㊇	マタカノウ	奥村	旅人宿 奥村忠吉39年の広告に人馬継立所
㊈	ヤマイゲタ	呉服店	
㊉	マルニシ	西端菓子店	西端淺吉
㊊	カネラ	大越	大越利平
㊋	チガイ	巻野商店	巻野庄九郎
㊌	カクス	加藤薬店	薬店加藤守恵二代目戸長加藤

厚田市街地明細図

石橋孝夫調査

屋号	読み名	地図記載の商店名・職業	備考
㊍	ヤマキユウイチ	佐藤	
㊎	カネマンイチ	池田	
㊏	ヤマゴボシ	高田金物店	
㊐	マルハチ	有山	
㊑	ヨドガワ	中居	
㊒	ヤマジユウ	淀川料理店	
㊓	カタイ	藤林	
㊔	カタナオ	古山	
㊕	カクマタ	福森	
㊖	マルシヨウ	清水	
㊗	ヤママル	中居	
㊘	ヤママル	佐藤	
㊙	イジルシ	佐藤宅	
㊚	マルコ	磯部菓子製造	
㊛	マルト	田中商店	
㊜	ダイチヨウ	小松料理店	
㊝	カネコ	三木商店	
㊞	ヤママチ	金子商店	
㊟	マルマタ	池田菓子製造所	
㊠	マルオ	土屋商店	
㊡	カネカ	長尾呉服店	
㊢	ヤマヒラ	兼田商店	
㊣	マタイチ	河合	
㊤	マルキチ	小倉	
㊥	ヤマル	平山	
㊦	ヤマタツ	漁場	
㊧	カネイチ	大和	
㊨	カクゴン	品田商店	
㊩	ミツボシ	阿部	
㊪	マルウロコ	成田	
㊫	ヤマイン	石田	
㊬	ヒロカワザ	広川座	
㊭	カクト	柳田	

他

江別町市街地明細図

屋号	読み名	地図記載の商店名・職業	他
①	マルセン	ちとせ川醸造元千歳や	
②	カネイ	奇功湯 造船所	
③	マルタイ	菓子舗	
④	ヤマト	岡田商店	
⑤	マルニ	高崎商店	
⑥	イチジルシ	大島商店	
⑦	ヤマトモ	田中商店	
⑧	ヤマカ	小西商店	
⑨	マルナカ	鋸鍛冶	
⑩	マルコン	井口商店	
⑪	マルサ	呉服店	
⑫	カネコ	まんちゅう菓子商	
⑬	カクマル	まんちゅう菓子商	
⑭	イゲタイチ	そばや	
⑮	ヤマジヨウ	荒物店	
⑯	マルサン	荒物店	
⑰	カネカ	荒物店	
⑱	マルタ	多田質店	
⑲	マルチヨウ	千歳樓	
⑳	マルチヨウ	千歳座	
㉑	フウキロウ	富貴樓	
㉒	ホクセイロウ	北盛樓	
㉓	オオギト	厨屋料理店	
㉔	マルチヨウ	料理店	
㉕	マルシメ	鉄物商	
㉖	カネワ	そばや	
㉗	マルニ	桶登や	
㉘	マルキチ	湯屋	
㉙	マルイチ	宅地	
㉚	ヤマチヨウ	山下館	
㉛	カクイチ	商店	
㉜	カネヒラ	商店	
㉝	ヤマジユウ	まんちゅう呉服商	
㉞	マルハチ	山田工場	
㉟	ヤマニヨツボシ	山田工場	
㊱	カネキユウ	まんちゅう菓子商	

石橋孝夫調査

表4 明治36年2月田尻與吉発行「江別石狩厚田有名家紹介表」の屋号

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊲	カネマンイチ	池田末吉	漁業	厚田郡厚田村	開茫然楽館主
		佐藤弁蔵	漁業農業	厚田郡厚田村	
					浜益郡尻内
					全郡字押琴
					全郡字コタン
					全郡字コタン
					全郡全村字サキ
					全郡全村
					全郡厚田村
					全郡廿五番地
㊳	ヤママル	佐藤松太郎	漁業漁場	厚田郡厚田村大字厚田	厚田郡ヤスセ元場
㊴	ヤマジユウ	藤林嘉兵衛	漁業	厚田郡厚田村	
㊵	マルシヨウ	中居末吉	漁業	厚田村大字厚田	
					全若生町字ワカオイ
					全町字米札沓番地
					全町下堀神式番地
㊶	カネマン	遠藤又兵衛	漁業鮭漁場		石狩浜町字上堀神三番地
					全弁天町字大綱
					全弁天町字川口
㊷	マルジユウゴ	村山コト	漁業鮭漁場	石狩親船町南廿五番地	石狩船場町下テイネ
㊸	ヤマオウ	井尻清蔵	漁業鮭漁場	石狩町北三拾番地	石狩若生字ヤウスバ
㊹		畠山清太郎	漁業	石狩若生町西五番地	

漁業之部

石橋孝夫調査

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
①	マルハチ	中居儀助	漁業	厚田郡厚田村	
②	カクト	和田礎三郎	漁業	厚田郡厚田村字別狩	
③	マタイ	古山萬助	漁業	厚田郡厚田村	
④	ヤマハイ	河合平蔵	農業兼漁業	厚田郡厚田村	
⑤	マルヨシ	平山浅吉	漁業	厚田郡厚田村	
⑥	ヤマゴ	大和庄市	漁業	厚田郡厚田村	
⑦	ヤママル	佐藤東吉	漁業	厚田郡厚田村	
屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑧	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑨	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑩	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑪	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑫	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑬	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑭	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑮	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑯	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑰	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑱	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑲	読み名	氏名	職業	住所	備考
⑳	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉑	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉒	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉓	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉔	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉕	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉖	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉗	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉘	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉙	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉚	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉛	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉜	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉝	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉞	読み名	氏名	職業	住所	備考
㉟	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊱	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊲	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊳	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊴	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊵	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊶	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊷	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊸	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊹	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊺	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊻	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊼	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊽	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊾	読み名	氏名	職業	住所	備考
㊿	読み名	氏名	職業	住所	備考

米雑穀荒物雑貨商之部

海陸物産商之部

呉服商之部

旅館之部

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
①	マルハチ	金子治作	履物類小間物	厚田郡厚田村廿四番地	
②	カネコ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
③	ダイチヨウ	三木商店	質商紙類荒物		
④	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑤	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑥	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑦	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑧	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑨	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑩	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑪	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑫	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑬	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑭	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑮	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑯	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑰	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑱	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑲	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
⑳	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉑	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉒	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉓	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉔	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉕	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉖	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉗	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉘	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉙	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉚	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉛	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉜	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉝	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉞	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㉟	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊱	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊲	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊳	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊴	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊵	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊶	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊷	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊸	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊹	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊺	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊻	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊼	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊽	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊾	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	
㊿	カネカ	兼田芳吉	紙類其他諸品	厚田郡厚田村	

酒造業部

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
①	マルセン	千歳屋	醸造元	石狩国江別町	銘酒千と勢川醸造元
②	マルイ	石崎益太郎	酒類醸造業	石狩国江別	電略(○イ又イ)
③	カネイチ	品田興三次郎	酒造業兼仲買	厚田郡厚田村	
④	ヤマイシ	石田元一	酒類醸造業	厚田郡厚田村	

菓子商部

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
カ	カネカ	江田源太郎	菓子製造卸商	石狩本町西七番地	
西	マルニシ	西端浅吉	菓子製造卸小売物商	石狩八幡町東五番地	
イ	イジルシ	磯部重太郎	菓子製造業	厚田郡厚田村	
大	マルダイ	大久保和吉	菓子調進所内 外農産種子 本家都まんち う和洋かし類	石狩国江別町	電略(マルダイ)
古	ナネコ	松本商店		石狩国江別町廿六番地	
○	カクマル	辺見商店	元祖開化饅頭	石狩国江別町	
久	カネキユウ	根森ヨシ	大黒まんちう 其他菓子商	石狩国江別町	

金物業之部

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
⋯	ヤマニヨツボシ	山田勇太郎	農具馬具器械 製作所	石狩国江別町	電略(ヤマタ)
⊗	マルシメ	石井邦吉	萬金物打刃物 類販売	石狩国江別町	電略(イシ井)
⊕	ナカマル	中川清吉	鋸製造所	石狩国江別町	
一	カクイチ	藤原興吉	フリキ細工履 物商	石狩国江別町	電略(カクニ)

医師之部

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
	読み名	長佐古 太郎	江別病院	石狩国江別町	院長長佐古 太郎

諸会社之部

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
★		稗貫良太郎	獣医 稗貫蹄 鉄工場	石狩国江別村百五拾七 番地	
		補助航行福山 組		江別、月形間 月形、 浦臼村字札の岡、江別、 石狩間 江別月形間ハ *丁日上船 江別、石 狩間月形札の間ハ毎月 四回航行	
		運輸部			
		厚田共済株式 会社		厚田郡厚田村	

筆耕業部

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
		佐藤傑光	土地売買周旋 金銀貸借紹介 諸願代書所	石狩国江別町	
		田中 蔵	東洋両全合資 会社代理店	石狩国江別町	

湯屋業之部

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
吉	マルキチ	内田吉蔵	湯屋業	石狩国江別町	市内中央便利よし
令	イゲタニ	中田愛吉	恵比寿湯諸請 負業	石狩国江別町	
弁	カネベン	堀川熊吉	奇功湯造船所	石狩国江別町	

諸営業之部

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
寿	カクス	加藤す恵	諸売業大販売	石狩国石狩八幡町東六 番地	
小	コイチ	工藤喜八郎	古着古道具委 託売買仲立所	石狩町大字本町西二番 地	
カ	カナカ	笠羽孫四郎	鮮魚仲買干物 荒物雜貨商	石狩国江別町	
木	カナキ	木谷平七	木材陸揚台車積 卸人夫供給業	石狩国江別町	
丹	マルタン	丹波文治郎	疊商桶商	石狩国江別町	
分	ヤマカ	小西嘉七	木材割社肉類 豆腐業	石狩国江別町	
夕	マルタ	多田定次郎	質屋	石狩国江別町	

料理店之部

屋号	読み名	氏名	職業	住所	備考
		樺澤忠蔵	劇場千歳座	石狩国江別町	座主
		樺澤セツ	千歳楼	全町	
ⓧ	マルチヨウ鶴之屋	樺澤ツネ	即席料理御膳	全町	
ⓧ	オオギト扇屋	山田源平	即席料理御膳	石狩国江別町	
ⓧ	イゲタイチ	桜井イワ	即席料理御膳	石狩国江別町	
和	カネワ	牧口重石工門	即席料理御膳	石狩国江別町	
轟	富貴楼	東條ワサ	料理業	石狩国江別町遊郭	
轟		田中ヨシ	料理業	石狩国江別町遊郭	
權	カクゴン	阿部スカ	御料理	厚田郡厚田村遊郭	
齊	ヨドガワ	齊藤宇吉	御料理御膳	厚田郡厚田	
ト	マルト	小松美野	即席料理御膳	厚田郡厚田	
直	カクナオ	福森直吉	即席料理御膳	厚田郡厚田	
ヲ	カネヲ	大越利平	薪炭商	石狩八幡町六番地	
		日刊北星新報	(新聞社)	本社札幌市北条条西三丁目	
		便利商会	和洋塗物・漆器・板調製油・絵水・彩画・肖像・一式・画□ら引幕揮毫・其他何でも出来ます	支社小樽住吉町廿番地	定ヶ月金卅銭郵税拾三銭
		北海彈正台		小樽区山田町	
				小樽区住吉町拾九番地	

表5 明治39年4月発行石狩新聞社発行「石狩実業家案内」の屋号

高瀬たみ調査

屋号	読み名	広告に記載の氏名・商店名・職業	備考
ウメニ	ウメニ	高橋儀兵衛 諸缶詰・鯉鱈種製塩蔵・糠積製造業	船場町
ヤマオウ	ヤマオウ	漁業 井尻静藏	横町
マルジュエウゴ	マルジュエウゴ	漁業 村山コト	親船町
マルゴ	マルゴ	中嶋商店 呉服太物・米穀・荒物・その他種々	本町 中島房藏
マルゴイチ	マルゴイチ	中嶋商店 呉服太物・米穀・学校用具・和洋小間物国定教科書売捌所	親船町 中嶋龜藏
キジルシ	キジルシ	今泉旅館・質屋 今泉米吉	親船町
カクス	カクス	加藤薬店 薬種雑貨・化粧品・筆墨紙・書籍・肥料	八幡町 (戸長)
マルロク	マルロク	成田録平 諸官庁筆耕・代書業・土地売買周施・製図測量	親船町
イジルシ	イジルシ	伊藤房次郎 小間物・文具商	親船町(本名井上伝藏故郷秩父の屋号はⓧ)
マルコ	マルコ	塩原豊次郎 国栄堂薬種舖	本町 丸小旅館
ダイキトコ	ダイキトコ	齊藤喜市	本町
ヤマヒサボシ	ヤマヒサボシ	橋亭 橋り七 御料理仕出し	八幡町
カナタイチ	カナタイチ	鈴木利二 着物・小間物・煙草・諸雑貨	若生町
アサヒマル	アサヒマル	佐藤米七 川崎船運送業	船場町
イレマス	イレマス	川野栄吉 荒物・小間物・乾物・味噌・醤油・石油類	本町 川野栄吉
カクニ	カクニ	和洋銘酒 缶詰類・宇治銘茶・砂糖・紙類・其他数々	本町
テンシヨウドウ	テンシヨウドウ	長野徳太郎 呉服太物・和風小間物・米穀・荒物・其他数々	親船町
ヨジメ	ヨジメ	本間印舖	本町
イレゴ	イレゴ	松本與吉 呉服荒物・小間物類	本町
マルト	マルト	尾崎重助 古物売買所・煙草小売	親船町
カクタケ	カクタケ	齊藤惣司 藥館 和漢洋藥品・各国有名売薬	親船町
ヤマホン	ヤマホン	小林武五郎 海産物仲買商	親船町
ヤマジュウ	ヤマジュウ	榎谷商店 川崎運送業・魚類仲買商	親船町
マルヒサ	マルヒサ	石割亀松 桶藏製造販売	仲町
マルナカシルシ	マルナカシルシ	米谷熊吉 船大工 大小川崎船・傳馬・磯舟新造及修理	新町
		北出甚七 海陸産物仲買・鮮魚仲買商	舟場町

屋号	読み名	広告に記載の氏名・商店名・職業	備考
①	チ	岩谷慶吉 海産商	親船町
②	マルカミ?	緑屋 御料理・生蕎麦	遊郭角
③	ヤマフク	篠崎清助 旅館	八幡町
④	オオギチヨウ	林商店 呉服・太物・米穀・荒物・和洋小間物其他雜貨味噌・醤油醸造販売	本町
⑤	マルヤス	佐藤さん 呉服太物・瀬戸物・小間物・酒類・味噌・醤油学校用具一切	生振
⑥	マルウエ?	上野源兵衛 漁業・材木商	本町
⑦	マルゲン	陽春楼 山本勘四郎 貸座敷	横町
⑧	マルジョウ?	みどり屋 川端萬藏 御料理・生蕎麦	横町
⑨	カネダイ	小林幸次郎 御料理 宴会向	新町
⑩	カクト	石山藤太郎 豆腐屋業	新町
⑪	?	墓田伊作 屋根柱木材	船場町
⑫	ウロコイ	岩崎徳太郎 呉服太物・荒物・小間物・和洋酒・缶詰・煙草・卸小売	若生町
⑬	カネタマ	相場留七 古着小売業・質業	
⑭	マルトモ	三上新達 乗合馬車・荷馬車仕立所	親船町
⑮	マルチヨウ	川島長松 川崎船運送業・物品販売業	親船町
⑯	マルイチ	田中 海岸物仲買鮮魚取扱	舟場町
⑰	カネイチリキ	遠藤又兵衛 鮭漁場は浜町・上掘神・下掘神・八幡町・来札・若生町	
⑱	ヤマヒサ?	細野捨吉 人馬車貨物雜立取扱所乗合馬車・荷馬車仕立所	親船町
⑲	カネカ	勝又三四郎 理髮業	親船町
⑳	オオヤ	中村太惣治 乗合馬車・荷車仕立所	親船町
㉑	カネマン	金谷長之助 質業 和洋菓子全砂糖米穀麦粉・和洋酒缶詰類各種	本町
㉒	マルサダ	松岡定吉 貸座敷	本町
㉓	マルダイ	大瀧栄次郎 御料理・生蕎麦	本町

表6 昭和三十八年(昭和四十一年)調査 高瀬たみ調査

屋号	読み名	広告に記載の氏名・商店名・職業	住所
①	マルトク	嘉尋美 和洋料理	弁天町
②	マルニカミホシ?	江別木工場挽割材一手販売材木製御小売商	石狩支店 船場町
③	ウロコイ	岩崎商店 呉服・荒物・雜貨・農産	若生町 岩崎清五郎
④	イレマス	川野商店 和洋酒類・雜貨商	本町 川野栄吉
⑤	カクニ	長野商店 呉服・太物・荒物・米穀・雜貨	親船町 長野徳太郎
⑥	ヤマオウ	井尻支店 倉庫業	横町 井尻静藏
⑦	イゲタチヨウ	二山商会 二本柳貞一 米噌和洋酒缶詰・荒物雜貨大坂アルカリ 樽邊燐酸石狩一手捌・農家用薬・海陸物産	八幡町
⑧	マルゴ	中島商店 呉服・太物・荒物・小間物・和洋酒・缶詰・陶器雜貨	本町 中島房藏
⑨	ウメニ	高橋儀兵衛 鮭塩蔵燻製・鮭鱒其他・缶詰・粕漬	船場町
⑩	キジルシ	今泉旅館	親船町 今泉泰吉
⑪	マルキ?	鳥羽商店 米・農産・雜貨類売買	生振

表7 昭和13年6月「石狩地方電話番号簿」の屋号

屋号	読み名	商 店 名	職 業	住 所	他
石狩病院	石狩病院	病院 鈴木信三		辨天町	
八幡病院	八幡病院	病院 田中 豊		八幡町	
ヤマゴ	ヤマゴ	海産雑貨商 後藤直満		親船町	
マルエイ	マルエイ	漁業 相原重治		辨天町	
オオカワヤ	オオカワヤ	宿業 大川政雄		八幡町	
キングダイテイ	キングダイテイ	料理店業 石黒幸三郎		新町	
アサヒ丸?	アサヒ丸?	運送業 堀松為春		船場町	
ハチニ	ハチニ	米穀雑貨荒物商 堀部銀蔵		親船町	
ヤマホ	ヤマホ	呉服雑貨商・乗合自動車業 堀江武		八幡町	
イチイ	イチイ	鮭鱈漁業 吉田庄助		辨天町	
ヤマキユウ	ヤマキユウ	海産商 村山九郎		船場町	
ヤマタマ	ヤマタマ	湯屋・飲食店 村田安太郎		親船町	
マルトモ	マルトモ	運送業 三上新造		親船町	
カネフク	カネフク	水産加工業 海産商 福岡長次郎		横町	
カネナカ	カネナカ	海産商 中村信一		八幡町	
カクニ	カクニ	呉服雑貨商 長野安太郎		親船町	
ニジルシ	ニジルシ	鮮魚海産商 戸田善作		船場町	
カズマル?	カズマル?	船舶運送業 寺尾政次郎		八幡町	
マルテラ?	マルテラ?	船舶運送業 塚谷政之助		親船町	
カネジ?	カネジ?	雑貨荒物海産商 塚谷政之助		親船町	
マルイチ	マルイチ	海産商 田中松次郎		船場町	
ヤマダイ	ヤマダイ	呉服米穀荒物商 高梨健助		八幡町	
マルヨシ?	マルヨシ?	海産商 高沢喜代治		船場町宮内庁に新巻献納	
イチジルシ	イチジルシ	北千島鮭鱈漁業 後藤要次郎		親船町	
カネカ	カネカ	運送業 紺野捨吉		親船町	
マルヨシ?	マルヨシ?	自動車待合業 北原重吉		八幡町	
マズルシ	マズルシ	薪炭商 茅野新次郎		親船町	

田中實資料

表8 昭和15年「鮭出荷数名簿」の屋号

屋号	読み名	氏 名	住 所
ヤマウロコ	ヤマウロコ	山下由蔵	八幡町来札
カネセ	カネセ	清野義一	〃
カネハ	カネハ	林勇太郎	〃
キジルシ	キジルシ	橋本富士雄	〃
カネブン	カネブン	宮嶋文一	〃
イジルシ	イジルシ	木村留作	〃
ヤマナカ	ヤマナカ	中村秀太郎	〃
カネショウ	カネショウ	小本惣七	〃
カネヨ	カネヨ	吉村吉太郎	〃
カネイ	カネイ	池田一郎	〃
チガイマル	チガイマル	木村寅雄	〃
マタジユウ	マタジユウ	小本千代三郎	〃
カネミヤ	カネミヤ	宮嶋宇三郎	〃
シメ	シメ	上田岩蔵	〃
チガイアヤマニ	チガイアヤマニ	久保田慶三	若生町ヤウスバ
カネタマ	カネタマ	小野春松	〃
マルタ	マルタ	藤田富三	〃
キムラ	キムラ	木村留作	〃
カネタ	カネタ	田中喜一郎	〃
ダイイ	ダイイ	伊藤栄三郎	〃
キイチ	キイチ	今井金次郎	〃
イマイチ	イマイチ	今井栄八	花畔村
ハヤシ	ハヤシ	林 弥市	〃
カネマル	カネマル	大石初太郎	〃
マルイシ	マルイシ	大石石太郎	生振村

田中實資料

屋号	読み名	氏名	住所
食	ヤマチヨウ	川崎長作	石狩町横町
本	カクホン	吉田松三郎	〃
イ	カネイ	伊藤鉄蔵	〃
余	ヤマホン	本間茂八	〃
余	ヤマホ	保坂由造	〃
キ	キジルシ	金田清吉	〃
食	ヤママサ	山形政夫	〃
父	ヤマヒサ?	吉田要太郎	〃
サ	カネサ	佐々木嘉一郎	〃
重	カネジユウ	工藤重次郎	〃
キ	カネキ	佐々木庄一	〃
㊦	マルシヨウ	永井庄兵衛	〃
㊧	ダイニ	佐々木仁太郎	石狩町一區
㊨	キネキチイチ	吉田林三郎	〃
㊩	マルサイチ	下沢市太郎	〃
雷	ナカタ	中田秀雄	〃
介	ヤマリ	山根茂樹	〃
石	カネイシ	坂上石太郎	〃
天	テンジルシ?	土橋健吉	〃
吉	カネキチ	赤田常次郎	〃
又	カネマタ	鎌田常吉	〃
大	ダイジルシ	大津留吉	〃
工	カギエ	清水栄太郎	〃
六	ヤマロク	萩原茂	〃
下	カネト	渡辺東助	〃
令	ヤマヤ	鍋谷清一	〃

屋号	読み名	氏名	住所
今	ヤマジユウ	東藤太郎	〃
冬	マタジユウ	有田留三郎	〃
全	ヤマナカイチ	天間勝太郎	〃
㊪	マルイ	岸部儀八郎	〃
夕	ヤマタ	有田久治	〃
一	カネイチ	平亀治	〃
矢	ヤマダイ	有田久松	〃
㊫	マルゴ	鈴木伝吉	〃
㊬	マルシヨウ	岡崎清助	〃
㊭	カネセ	越後清太郎	〃
㊮	カネツ	車谷常次郎	〃
△	カネウロコ	真田丹次郎	〃
㊯	カネオウ	越後清松	〃
谷	ヤマジン	梶原栄太郎	石狩町新町
カ	カジルシ	間沢亀吉	〃
松	マネマツ	松田末蔵	〃
井	カネイ	藤井市郎	〃
ア	カネア	阿部軍平	〃
兵	ヤマヘイ	吉田亀太郎	〃
㊰	チガイニ	長谷川甚五郎	〃
食	ヤマサタ	宮下定治	〃
ニ	ニジルシ	宮下三郎	〃
夕	カネタイチ	近徳三郎	〃
子	カネコ	金子茂三郎	〃
令	ヤマヨ	吉岡與平	〃

石狩漁業協同組合史

表9 昭和初期から同20年代の本町・八幡町地区商店街の屋号 吉岡玉吉調査

屋号	読み名	店名・職業	経営者など	住所	備考(通称あだ名含む)
⑧	マルトモ	製菓業	墓田吉蔵	親船町	ハカタ
⑨	カクニ	呉服雑貨	長野徳太郎	親船町	米穀味噌正油
⑩	マルカ	理容業	勝又半四郎	親船町	カツマタ
キ	キジルシ	旅館業	今泉奈吉	親船町	ヨウサン祖父要作のあだ名
		小間物玩具	末武 蔵	親船町	
		旅館業	佐藤	親船町	
金	ヤマゴ	青果小間物雑貨	後藤満雄	親船町	オヤキヤ
カ	カネカ	小間物雑貨	紺野庄太郎	親船町	集合荷馬車、馬櫓
		晝店	篠山二一	親船町	タタミヤ
		燃料店	茅野三三郎	親船町	カヤノ(長舟運送)
又	カネキユウ	小間物雑貨	塚谷政之助	親船町	リンキヤ
又	カネマタ	鉄工所	本庄一雄	親船町	カジヤ ホンジョウ
△	ハチニ	菓子店(饅頭)	下平	親船町	パンヤ(昭和十二、三年閉店)
		雑貨小間物	堀部銀蔵	親船町	米穀学用品
△	ダキヤマニ	鮮魚商	青木留松	親船町	イサバヤ
		靴修理業	佐々木樹太郎	親船町	
		菓子商	三上	親船町	ポハイ
ヤ	カネヤ	青果小間物	中村	親船町	中村商店
		青果小間物	家中	親船町	家中商店ヒコキ屋
△	ヤマサン	豆腐店	大滝岩吉	親船町	大滝の豆腐屋
金	ヤマタマ	銭湯料理食料品	村田弥五郎	親船町	やまさん旅館
		石狩郵便局	薮又太郎	親船町	局長
		若月新聞店	若月豊太郎	親船町	ワカツキ
		矢嶋代書所	矢嶋トメ	親船町	ダイシヨ、文治郎

屋号	読み名	店名・職業	経営者など	住所	備考(通称あだ名含む)
⑤	マルゴイチ	板金・豆腐	工藤久蔵	本町	ブリキヤ トウフヤ
⑥	マルコ	旅館業	中島亀蔵	本町	
		古物商	塩原豊次郎	本町	ザツピンヤ
⑦	マルマン	理髪店	街道栄太郎	本町	床屋、カイドウ
◇	イゲタイ	小間物雑貨	伊藤(斉藤)	本町	サイトウ
		漁業、鮮魚商	吉田繁雄	船場町	
		渡船場	山本林蔵	船場町	トセンバ
		鮮魚商	永井床兵衛	船場町	献上鮭製作 ナガイ
△	イレマス	製菓業	川野栄一	船場町	昭和10年ごろ転換
		海運業	宮下清治	船場町	ミヤシタ小樽通いの機帆船
①	マルイチ	鮮魚商	田中松太郎	船場町	
△	イレゴ	海産商	田中伍郎	船場町	
②	マルイシ	船大工	青木石松	船場町	中央バス待合所
		鮮魚商	石井政治	船場町	イサバヤ
		燃料店	神田広治	船場町	長舟運送
		石狩病院	鈴木信三	弁天町	
		石狩座	渡辺吉三郎	弁天町	芝居小屋、映画館
④	オオギチヨウ	正油製造	林 喜一郎	横町	
		運送・駄送	羽沢	横町	うまや
⑤	オオギヤ	貸し座敷(扇松楼)	林 喜一郎	横町	ゴケヤ昭和14年廃業
福	カネフク	水産加工	福岡英隆	横町	ロクバン入植地番号六番
△	マルダイ	鮮魚商	大馬定雄	横町	うまや
		運送・駄送	佐藤三男	親船町	
		運送石狩トラック	松尾(本田)	親船町	イサバヤ
		鮮魚商	青木	親船町	ピツピヤ おもちやも扱っていた
		小間物化粧品	杉山延一	親船町	ヨウフクヤ
		洋服仕立て	洋服仕立て	親船町	備考(通称あだ名含む)

屋号	読み名	店名・職業	経営者など	住所	備考(通称あだ名含む)
久	カネヒサ	菓子製造	菅原 誠	八幡町	オカシヤ
久	ヤマダイ	時計店	兼子重之	八幡町	トケイヤ
久	カネタ	理髪業	阿部 清	八幡町	トコヤ
久	カネタ	装蹄業	藤川	八幡町	金物 プリキヤ
久	カネタ	板金業	工藤豊治	八幡町	
久	カネタ	小間物雑貨	高梨フミ	八幡町	ゴフクヤ洋服、寝具
久	カネタ	呉服雑貨	田岡定男	八幡町	
久	カネタ	豆腐屋	工藤 正	八幡町	トウフヤ
久	カネタ	鮮魚商	中村信一	八幡町	イサバヤ
久	カネタ	雑貨商	小野田	八幡町	
久	カネタ	石狩八幡郵便局	加藤正男	八幡町	川向のユウビンキョク
久	カネタ	医院	田中 豊	八幡町	川向のイシヤ
久	カネタ	洋服仕立て	石岡	八幡町	ヨウフクヤ
久	カネタ	食品店	高橋久雄	八幡町	引物調進
久	カネタ	板金業	後藤光雄	八幡町	プリキヤ
久	カネタ	青果業	柿田 亨	八幡町	アオモノヤ
久	カネタ	畳屋	佐藤正夫	八幡町	川向のタタミヤ
久	カネタ	養狐業	坪川	八幡町	キツネヤ
久	カネタ	歯科医	尾崎鹿雄	八幡町	ハイシヤ
久	カネタ	旅館業	成田キエ	八幡町	
久	カネタ	割烹(金大亭)	石黒コウ	新町	幸一郎カネダイ キンダイテイ
久	カネタ	造船業	南 甚一郎	仲町	元ニシン漁、船大工
久	カネタ	鮮魚商	高澤定雄	仲町	
久	カネタ	食堂	岡田	本町	オカダ
久	カネタ	青果、漁業	梁川徳太郎	本町	ヤナガワ
久	カネタ	菓子製造業	金谷長之助	本町	
久	カネタ	浴場	佐々木万吉	本町	
久	カネタ	時計店	高橋俊介	本町	トケイヤ

屋号	読み名	店名・職業	経営者など	住所	備考(通称あだ名含む)
久	キラク	自転車修理販売	工藤正明	八幡町	クドウノジテンシヤヤ
久	キラク	美容院	菅池豊作	八幡町	パーマヤ
久	キラク	電気商	長野一星	八幡町	ラジオ修理
久	キラク	飲食店	岩淵文次郎	八幡町	鮭鍋
久	キラク	精米所	三寺啓三	八幡町	コメヤ
久	キラク	綿打ち直し	山根敏雄	八幡町	ワタヤ
久	キラク	自転車修理販売	鈴木スミ	八幡町	ジテンシヤヤ
久	キラク	精米所	山本菊太郎	八幡町	
久	キラク	鉄工所	関 多一	八幡町	プリキヤ
久	キラク	鮮魚商	板垣	八幡町	
久	キラク	馬具商	阿部 悟	八幡町	バグヤ
久	キラク	鉄工所	渡辺一美	八幡町	カジヤ
久	キラク	呉服運送	堀井寅吉	八幡町	ゴフクヤ
久	キラク	荒物雑貨	清野亀太郎	八幡町	ミセヤ
久	キラク	鮮魚商	藤井政秋	八幡町	イサバヤ
久	キラク	運送業	鈴木伝吉	八幡町	ホコイ タマゴヤ
久	キラク	造船業	若林精作	八幡町	ワカバヤシ
久	キラク	海運業	寺尾政次郎	八幡町	カズマル(和丸)
久	キラク	食堂バス待合	北原重吉	八幡町	キタハラ 公衆浴場、馬糞
久	キラク	馬具商	浜岡政吉	八幡町	ハマオカ
久	キラク	飲食店	岩淵豊太郎	八幡町	バグヤ
久	キラク	洋服仕立て	松本清太郎	八幡町	
久	キラク	理髪業	伊藤 清	八幡町	ヨウフクヤ
久	キラク	小間物雑貨	富木雄三	八幡町	トミキ
久	キラク	旅館業	大川修司	八幡町	
久	キラク	薬局	田中三雄	八幡町	クスリヤ
久	キラク	菓子店	小原	八幡町	オカシヤ

表10 昭和初期から同20年代の本町・八幡地区漁業者屋号・家印 吉岡玉吉調査

屋号	読み名	経営者など	住所	備考(主な漁撈形態など)
舎	イレキチ	佐々木政雄	親船町	流・刺
厶	ダイニ	佐々木仁太郎	親船町	流・刺・小手繰・鱈流し
厶	マルショウ	永井庄兵衛	親船町	流・鱈流し・水産加工
厶	カネキ	佐々木庄一	親船町	流・鱈流し
厶	カネジユウ	工藤重次郎	親船町	流・刺・小手繰・鱈流し
厶	ヤマヒサ	吉田要太郎	親船町	流・刺
厶	ヤママサ	山形政夫	親船町	流・刺
厶	キジルシ	金田清吉	親船町	流・刺
厶	ヤマホ	保坂由造	親船町	流・刺・小手繰
厶	ヤマホン	本間茂八	親船町	流・刺・鱈流し・小手繰
厶	カネイ	伊藤鉄蔵	親船町	流・刺・北寄・鱈流し
厶	マルヨ	早坂与三郎	親船町	流・刺・北寄
厶	カネサ	佐々木嘉一郎	親船町	流・刺・北寄・鱈流し
厶	イチジルシ	後藤要次郎	親船町	流・小手繰・北千島
厶	サンタ	吉田三太	親船町	流・刺・鱈流し
厶	アイバラ	相原竜蔵	親船町	水産加工・冷蔵庫
厶	カネシメ	高橋松吉	親船町	流・刺
厶	カネサ	宮下哲夫	親船町	流・刺
厶		真田真二郎	親船町	流・刺
厶		金田仁太郎	親船町	流・漁撈長
厶	ヤマキチ	金田寅之助	親船町	流・鱈・北千島
厶	チガイカ	加賀田次郎造	親船町	流・刺
厶	ヤマサダ	宮下定吉	親船町	流・刺・鱈流し
厶	ヤマウロコ	山下由蔵	親船町	流・刺・鱈流し
厶	ヤマキユウ	柴田久吉	親船町	流・北千島
厶	ヤマヤ	鍋谷清一	親船町	流・刺・鱈流し

屋号	読み名	経営者など	住所	備考(主な漁撈形態など)
厶	カネト	渡辺東助	来札	流・刺・鱈流し
厶	エジルシ	清水米太郎	来札	流・刺・鱈流し
厶	ヤマロク	萩原茂	来札	流・刺・鱈流し・小型引網
厶	ダイジルシ	大津留吉	来札	流・刺・鱈流し
厶	カネマタ	鎌田常吉	来札	流・刺・鱈流し
厶	カネキチ	赤田常次郎	来札	流・刺・鱈流し
厶	ナカタ	中田秀雄	来札	流・刺・鱈流し
厶	マルサ	下澤市太郎	来札	流・刺・鱈流し
厶	カネキチイチ	吉田林太郎	来札	流・刺・鱈流し
厶	マルカ	加藤栄作	来札	流・刺・鱈流し
厶	マルタマ	大谷玉之口	来札	流・刺
厶	マルゴ	三浦吾一	来札	流・刺
厶	カネコ	金子丑太郎	来札	流・刺
厶	カネダイ	大道清治	来札	流・鱈流し
厶	カネイシ	坂上石太郎	来札	流・刺・鱈流し
厶	ドバシ	土橋健吉	来札	流・鱈流し・北千島
厶	マルア	荒木由松	来札	流・刺・鱈流し
厶	カクホン	吉田松三郎	横町	流・刺・鱈流し
厶	カ	間澤亀吉	横町	流・刺・鱈流し
厶	カクホン	長島長作	横町	流・刺・鱈流し
厶	ヤマチヨウ	吉岡与平	横町	流・刺・鱈流し
厶	カネコ	金子茂三郎	横町	流・刺・小手繰・八目
厶	チガイニ	長谷川甚三郎	横町	流・刺・鱈流し・小手繰
厶	ヤマサダ	宮下定吉	横町	流・刺・小手繰・鱈・八目・鱈
厶	ニジルシ	宮下仁三郎	横町	流・刺・小手繰
厶	カネフク	福岡茂次郎	横町	流・刺・水産加工
厶	ヤマシヨウ	吉田	横町	流・刺・小手繰・鱈・八目
厶	カネア	阿部重平	横町	流・刺・小手繰・漁撈長
厶	カネイ	藤井市郎	横町	流・刺・小手繰・北寄・鱈流し

屋号	読み名	経営者など	住所	備考(主な漁撈形態など)
松	カネマツ	松田末蔵	横町	流・刺・小手繰・北寄・鱒流し
入	ハセガワ	長谷川巳代治	横町	流・小手繰・鱒流し
下	カネイレ	本間仙松	横町	流・刺・鱒・小手繰・北千島
田	カネイト	石黒善太郎	横町	流・刺・鱒流し・小手繰
平	カネタ	有田市太郎	横町	流・刺・鱒・小手繰
六	カネロク	阿部権四郎	横町	流・刺・鱒・小手繰
三	イレサン	小端清五郎	横町	流・刺・鱒・北寄・漁撈長
長	カネチユウ	小端六太郎	横町	流・刺・鱒・小手繰・北寄
ヨ	カネチヨウ	吉岡三之助	横町	流・刺・鱒・北千島
田	カネヨシ	忠海多平	横町	流・刺・鱒・小手繰・八目・鱒
田	カネタイチ	小川長次	横町	流・刺・鱒
田	カネヨシ	有田与三郎	横町	流・刺・小手繰・八目
田	カネヨシ	金田正次郎	横町	流・刺・鱒・八目・小手繰・漁撈長
田	カネタイチ	後藤由太郎	横町	流・刺・鱒流し
田	カネタイチ	近徳三郎	横町	流・刺・鱒流し・北寄
田	カネタイチ	高橋健蔵	横町	流・刺・鱒流し
田	カネタイチ	佐々木一郎	横町	流・刺・鱒流し・鱒
田	カネタイチ	有田惣八	横町	流・鱒・小手繰・北千島
田	カネタイチ	吉田庄助	横町	流・刺・鱒流し・北千島
田	カネキ	三戸	横町	流・刺・鱒
田	カネキ	有田五郎	横町	流・刺・小手繰・漁撈長
田	カネキ	海沼仁太郎	横町	流・刺・鱒流し・北寄
田	カネキ	宮森	横町	流・小手繰・水産加工
田	カネキ	高橋虎一	横町	流・刺・鱒流し・北寄
田	カネキ	ナカイチ	横町	流・刺・鱒流し・八目
田	カネキ	星 小三郎	横町	流・刺・鱒流し・北寄
田	カネキ	吉岡政之助	横町	流・刺・鱒・八目
田	カネキ	吉岡玉内	横町	流・刺・鱒・小手繰
田	カネキ	山崎喜作	横町	流・北寄
田	カネキ	相原重治	横町	流・北寄

屋号	読み名	経営者など	住所	備考(主な漁撈形態など)
仁	ヤマニ	梶原栄太郎	新町	流・刺・鱒流し
玉	カネタマ	越後清松	新町	流・刺・鱒流し・小手繰
△	カネウロコ	真田丹次郎	新町	流・刺・小型引網・鱒
七	カネセ	越後清太郎	新町	流・刺・鱒流し
清	カネキヨ	越後	新町	流・刺・鱒流し
正	マルシヨウ	岡崎清助	新町	流・刺・鱒流し・小手繰
番	マルゴ	鈴木伝吾	新町	流・刺・鱒流し・鱒
尖	ヤマダイ	有田久松	新町	流・刺・鱒流し・鱒
全	ヤマシヨウ	岡村庄松	新町	地引網
一	カネイチ	平 龜治	新町	流・刺・鱒流し
イ	カネツネ	岸部儀八郎	新町	流・刺・鱒流し
常	カネツネ	車谷常雄	新町	流・刺・鱒流し
分	ヤマタ	有田久治	新町	流・刺・鱒流し・小型引網
モ	カネモ	杉之森豊作	新町	流・刺・鱒流し・八目
モ	カネモ	柳田常蔵	新町	流・刺・鱒流し
平	マルヒラ	平田 勇	新町	流・刺・鱒流し
平	ヤマジユウ	東藤太郎	新町	流・刺・鱒流し
モ	マルモ	畑中	新町	流・鱒流し
全	ヤマナカイチ	天間勝太郎	新町	流・刺・鱒流し
全	ダキヤマニ	久保田慶蔵	新町	流・刺・鱒流し
命	メジルシ	上田岩蔵	新町	流・刺・鱒流し
壺	カネキチチ	吉田林三郎	新町	流・鱒流し
密	カネミヤ	宮嶋守三郎	新町	流・八目
圣	マタジユウ	小本千代三郎	新町	流・八目
①	チガイマル	木村寅雄	新町	流・八目
イ	カネイ	池田 一郎	新町	流・八目・鱒流し
印	ヤマモト	山本惣八	新町	流・八目・鱒流し
印	カネヨ	吉村吉太郎	新町	流・八目・鱒流し
印	カネヨ	木村留吉	新町	流・八目・鱒流し
印	カネハ	林勇太郎	新町	流・八目・鱒流し

屋号	読み名	経営者など	住所	備考(主な漁撈形態など)
替	ハヤシジルスシ	林 弥市	若生町ヤウスバ	流・八目・鱒流し
文	カネブン	宮嶋文一	若生町ヤウスバ	流・八目・鱒流し
壽	キジルシ	橋本富士雄	若生町ヤウスバ	流・八目・鱒流し
介	ヤマナカ	山根茂樹	若生町ヤウスバ	流・八目・鱒流し
命	ヤマナカ	中村秀太郎	若生町ヤウスバ	流・八目・鱒流し
七	カネセ	清野義一	若生町ヤウスバ	流・八目・鱒流し
正	カネショウ	小本惣八	若生町ヤウスバ	流・八目・鱒流し
キ	キイチ	今井金次郎	花畔	流・水産加工
芥	ダイイ	伊藤栄三郎	花畔	流・水産加工
田	カネタ	田中喜一郎	花畔	流・鱒流し
森	キムラ	木村留作	花畔	流・鱒流し
玉	マルタマ	藤田富三	花畔	流・鱒流し
玉	カネタマ	小野春松	花畔	流・鱒流し
サ	マルサ	佐藤佐吉	花畔	流・鱒流し
今	ハヤシ	林春太郎	花畔	流・鱒流し
今	イマイチ	今井栄八	花畔	流・小手繰・水産加工
三	カネヨ	吉村吉太郎	生振	流・水産加工
カ	オカ	岡 直治	生振	流・水産加工
大	マルダイ	大石石太郎	生振	流・鱒流し
大	カネマル	大石初太郎	生振	流・小手繰
〇	ハセガワ	長谷川美代治	生振	流・鱒流し
	イシヤマ	石山丹次郎	生振	流・鱒流し
	ウチウミ	内海亀太郎	生振	流・鱒流し
㊦	マルサン	内海留三郎	生振	流・鱒流し
	トヨカワ	豊川 正	生振	流・鱒流し
	トヨカワ	豊川富作	生振	流・鱒流し
	カトウ	加藤亀太郎	生振	流・鱒流し
	スズキ	鈴木源次郎	生振	流・鱒流し
	ハタナカ	畑中辰三郎	生振	流・鱒流し
	カワイ	川合定吉	生振	流・鱒流し

表11 昭和初期から同20年代の船名

吉岡玉吉調査

船名	読み名	船の用途	氏名	区・住所	備考
北洋丸	ヨクヨウ	鱒流し網	宮下定吉	二区横町	一一・四三屯 二五馬力
吉星丸	キチセイ	北千島流し網			
昇龍丸	シヨウリュウ	鮮魚運搬	金田寅之助	二区船場町	二四・九六屯 八〇馬力ほか
昭宝丸	シヨウホウ	北千島流し網	吉岡与平	二区横町	一四・三五屯 一三馬力
幸徳丸	コウトク	鱒流し網	吉田庄助	二区弁天町	二四・九六屯 六五馬力ほか
石狩丸	ミヤシタ	海上輸送	佐々木仁太郎	二区親船町	一一・三八屯 一二馬力
長栄丸	チヨウエイ	北千島流し網	宮下栄吉	三区船場町	一八・四屯 三〇馬力
白龍丸	ハクリユウ	鮮魚運搬	吉岡三之助	三区横町	二四・九三屯 七五馬力ほか
宝永丸	ホウエイ	漁獲物運搬	後藤要次郎	三区親船町	二四・九六屯 六〇馬力ほか
萬歳丸	バンザイ	漁獲物運搬	清野清八	四区親船町	一九・四五屯 二五馬力
八幡丸	ヤハタ	海上輸送	忠海多平	四区横町	一〇・三六屯 一六馬力
稲荷丸	イナリ	海上輸送	平岩良二	五区船場町	一九・七六屯 三〇馬力
南丸	ミナミ	鱒流し網	岸 庄平	五区新町	五・八五屯 八馬力
扇松丸	オウシヨウ	鱒流し網	南 甚一郎	五区新町	五・七三屯 八馬力
松洋丸	シヨウヨウ	鱒流し網	鈴木伝吾	六区新町	一〇屯 二五馬力
			真田丹次郎	六区弁天町	九・四三屯 一五馬力

表12 厚田村鱈建網業者屋号

屋号	読み名	店名・職業	経営者など	住所	備考
イ	カネイ	漁業	伊藤貞松	別狩	
イ	イチヤマキ	漁業	佐藤	別狩	
久	カネキユウ	漁業	有田久蔵	別狩	
傘	ヤマコウ	漁業	米田幸太郎	別狩	
傘	イチヤマジユウ	漁業	伊藤市丈	別狩	
丁	カネチヨウ	漁業	小笠原	小谷	
↔		漁業(建網)	小坂徳司	本村	イレジョウ
三	イレニ	漁業(建網)	住谷 治	本村	
山	イレヤマ	漁業(建網)	佐藤栄助	本村	
㊦	マルシヨウ	漁業(建網)	中井米吉	本村	
三	ヤマサン	漁業(建網)	柴野孫吉	本村	
⑧	マルハチ	漁業(建網)	中井儀助	本村	
堂	サンオウ	漁業(建網)	鈴木		
金	ヤママルイチ	漁業(建網)	佐藤	本村	
丸	カネマル	漁業(建網)	富田	本村	
㊦	カネマンシメ	漁業(建網)	池田	安瀬	
㊦	カネマンイチ	漁業(建網)	池田	安瀬	
各	キユウサ	漁業(建網)	河口久蔵	古潭	
芥	マタイ	漁業(建網)	古山 武	別狩	
丸	ヤママル	漁業(建網)	佐藤松太郎	本村	

吉岡玉吉調査

表13 厚田村商店屋号

屋号	読み方	店名・職業	経営者など	住所	備考
トコヤ		理髪業	福士	本村	
會	ヤマシタ	食品雑貨	八島政雄	本村	
	ヤマミヤ	和菓子店	宮崎	本村	
	ニシダ	運送業	西田幸一郎	本村	
	コン	小間物自転車	今	本村	厚田・小樽
又	マタイチ	板金店	小倉	本村	
	クスリヤ	薬屋	筒井	本村	
舎	ヤマキチ	食品雑貨	池田	本村	
子	カネコ	小間物雑貨	金子	本村	
	カジヤ	鍛冶屋	藤井	本村	
友	カネトモ	食品雑貨	品田清一	本村	
半	ヤマジユウ	呉服店	和泉留吉	本村	
日	カクイチ	文房具雑貨	鈴木藤吉	本村	
鑫	フロヤ	銭湯	笹川	本村	
全	イレジョウ	和菓子店	横浜	本村	
	ハヤカワ	呉服店	早川正美	本村	
	イケガキ	和洋菓子店	池垣修吉	本村	
	フクイ	料理店	福井	本村	
	タヌマのカジヤ	鍛冶屋	田沼	本村	
	ハナヤ	花屋	湊谷	本村	
	トダ	旅館業	戸田	本村	
	フナグイク	造船	櫛引繁太郎	本村	
	ブリキヤ	板金店	古山	本村	
	クリヤ	呉服店	栗谷	本村	
七	カネシチ	家畜商	川原田	別狩	
〇	マルイチ	小間物雑貨	田中	別狩	

吉岡玉吉調査

表12 厚田村練建網業者屋号

屋号	読み名	店名・職業	経営者など	住所	備考
イ	カネイ	漁業	伊藤寅松	別狩	
ネ	イチヤマキ	漁業	佐藤	別狩	
久	カネキユウ	漁業	有田久蔵	別狩	
幸	ヤマコウ	漁業	米田幸太郎	別狩	
平	イチヤマジユウ	漁業	伊藤市丈	別狩	
丁	カネチヨウ	漁業	小笠原	小谷	
レ		漁業(建網)	小坂徳司	本村	イレジョウ
三	イレニ	漁業(建網)	住谷 治	本村	
山	イレヤマ	漁業(建網)	佐藤栄助		
正	マルシヨウ	漁業(建網)	中井米吉	本村	
三	ヤマサン	漁業(建網)	柴野孫吉	本村	
八	マルハチ	漁業(建網)	中井儀助	本村	
望	サンオウ	漁業(建網)	鈴木		
允	ヤママルイチ	漁業(建網)	佐藤	本村	
丸	カネマル	漁業(建網)	富田	本村	
五	カネマンシメ	漁業(建網)	池田	安瀬	
五	カネマンイチ	漁業(建網)	池田	安瀬	
各	キニウサ	漁業(建網)	河口久蔵	古潭	
矛	マタイ	漁業(建網)	古山 武	別狩	
允	ヤママル	漁業(建網)	佐藤松太郎	本村	

吉岡玉吉調査

表13 厚田村商店屋号

屋号	読み方	店名・職業	経営者など	住所	備考
トコヤ		理髪業	福士	本村	
ヤマシタ		食品雑貨	八島政雄	本村	
ヤマミヤ		和菓子店	宮崎	本村	
ニシダ		運送業	西田幸一郎	本村	
コン		小間物自転車	今	本村	厚田・小樽
マタイチ		板金店	小倉	本村	
クスリヤ		薬屋	筒井	本村	
ヤマキチ		食品雑貨	池田	本村	
カネコ		小間物雑貨	金子	本村	
カジヤ		鍛冶屋	藤井	本村	
カネトモ		食品雑貨	品田清一	本村	
ヤマジユウ		呉服店	和泉留吉	本村	
カクイチ		文房具雑貨	鈴木藤吉	本村	
フロヤ		銭湯	笹川	本村	
イレジョウ		和菓子店	横浜	本村	
ハヤカワ		呉服店	早川正美	本村	
イケガキ		和洋菓子店	池垣修吉	本村	
フクイ		料理店	福井	本村	
タヌマのカジヤ		鍛冶屋	田沼	本村	
ハナヤ		花屋	湊谷	本村	
トダ		旅館業	戸田	本村	
フナゲイク		造船	藤引繁太郎	本村	
ブリキヤ		板金店	古山	本村	
クリヤ		呉服店	栗谷	本村	
カネシチ		家畜商	川原田	別狩	
マルイチ		小間物雑貨	田中	別狩	

吉岡玉吉調査

屋号	読み名	店名・職業	経営者など	住所	備考
〇	カネマル	小間物雑貨	渡辺 栄	望来	カナザワ
	ダイシヨ	代書	金沢	本村	
	ゲタヤ	下駄屋	中島	本村	
	ヤナギヤ	布団店	柳屋	本村	
	ヤドヤ	旅館業	磯部	本村	
㊦	マルシヨウ	農業	外崎	本村	
	マサヤ	榎屋	佐々木	本村	
	デンキヤ	電気屋	秋山	本村	
	タカハシ	食品雑貨	高橋	本村	
	シャシヤ	写真館	鈴木	本村	
	セオ	装蹄	米田□一	本村	
		豆腐屋	妹尾 孝	本村	
		食堂	相河善一郎	望来	

屋号	読み名	地図に記載の商店名・氏名・職業	備考
㊦	マルヒラ	平賀洋服店 たばこ販売店紳士服 子供服	
五	カネゴ	阿部馬具店	阿部 紳
△	ヤマイチ	清野商店	
㊦	マルイシ	石狩木材農機株式会社 水野栄 工販売 農機製作一般機械販売	建築資材木材加
㊦	タキノユ		
㊦	カネシメ	高橋工場	水産加工
◇	イゲタイ	吉田漁業部 吉田繁雄	吉田庄助の息子 元 道議会議員
㊦	マルキ	三戸漁業部 三戸俊夫	
㊦	マルチヨウ	長谷川加工場 長谷川水産	長谷川三代次
㊦	ヤマタマ	鮭鍋の風味は村田商店 石狩町明細地図販売店浜 茄子の味覚銘菓石狩の花	村田弥五郎
㊦	カネマタ	本庄鉄工場	本庄一雄
㊦	ヤマヨ	吉岡漁業部 吉岡綱雄	
イ	イチイ	吉田漁業部 吉田旅館 吉田庄助	元網元
㊦	イレサン	吉岡漁業部 吉岡由太郎	フアクトリ
㊦	マルダイ	佐藤商店	佐藤三男現サーモン
福	カネフク	福岡水産加工場 鮭新巻 鮭燻クンセイ 海産物 委託	福岡長次郎
○	マルイチ	田中松次郎商店五十集屋 海産商	五十集屋 海産商
小	マルコ	塩原旅館	塩原豊政
㊦	マルサン	有田漁業部 有田留三郎	
允	ヤマキユウ	工藤久蔵商店 トタン屋根葺 井戸ポンプ 請負各 種ストロップ製造 豆腐コンニャク製造小売	現水道工事店
㊦	カネシメイチ	平岩漁業部 平岩良二	
㊦	マルア	相原晃水産加工場 鮭鱈燻製塩蔵海産委託	
㊦	マルゴ	鈴木漁業部 鈴木傳吉	
㊦	カネグイ	本場石狩なべ 金大亭 鮭鱈料理	鮭料理 石黒コウ
㊦	マルエイ	相原漁業部 相原重治	元網元
他			他

表 14 昭和29年6月北日本出版社発行
「石狩市街明細地図・厚田村市街明細図」の屋号
中島勝久調査

屋号	読み名	地図に記載の商店名・氏名・職業	他
源	マルゲン	住谷	厚田村
一	カネイチ	高橋木工場	厚田村
		櫛引造船所	厚田村
		筒井薬店 医療品化粧品小間物	厚田村
		安田精米所 精米製麦製粉 とうふ製造業	厚田村
		池田商店 酒類荒物雑貨食料品	厚田村
		佐藤鉄工場	厚田村
イ	マルイ	八島商店 酒類漬物米穀雑貨小間物食料品	厚田村
夕	ヤマタマ	高橋商店 酒類食料品雑貨	厚田村
分	ヤマカ	小山漁業部	厚田村
轟	きらく	御料理名代の鮭なべ きらく	喜楽亭
壺	成田屋	成田屋旅館	
田	カネタ?	高橋菓子店 ぱんや 引物調達	
井	カネタ	井手壺工場 壺工事一式請負	
井	カネイ	田岡定雄商店 呉服洋品	田中周作
入		富木商店 日用品化粧品食料品	他

表15 昭和31年1月1日現在 「石狩町全町明細図」新産業地域指定記念の屋号 石橋孝夫調査

屋号	読み名	氏名・商店名	備考
仁	マルニ	伊藤商店 各種食料品	
下	チガイト	村田建築	
や	カネヤ	家中商店 鮮魚菓子雑貨	
又	カネマタ	本庄鉄工場 農機具漁船具	
カ	カネカ	後藤商店 タバコ菓子化粧品卸小売販売	
大	マルトモ	昇月 鮭鍋料理	
友	イゲタジン	協和造船工業KK 船舶新造内燃機関	
露	オオギヤ	扇屋林 石狩鮭鍋御料理	
小	マルコ	川野菓子店	
小	イレマス	塩原旅館	
キ	イチキ	梁川商店 菓子果物ラーメン	
丸	マルラ	押田薬局 医療品販売	
丸	アラキ	飲食店石狩名産鮭料理	
一	イチマル	堀江商店 織雑貨ゴム製品	
欠	ヤマキユウ	工藤商店 家庭金物電気製品ポンプ板金加工トーフ	
全	ヤマタマ?	後藤商店 各種食料品荒物雑貨	
浴	カネジ	塚谷商店 金物雑貨	
六	ハチニ	堀部商店 酒類雑貨文房具	
中	マルナカ	中村商店 菓子鮮魚雑貨	
宝	ヤマタマ	村田商店 和洋酒食料品雑貨	
サ	カギサ	若月新聞店 ヤクルト販売所	
若	マルワカ	若林造船所	
若	マルワカ	若林造船工場	

屋号	読み名	氏名	商店名	備考
八幡町				
㊦	マルブン	岩淵商店	馬具運動用具	
入	イレマル	富木商店	タバコ食料品ゴム製品	
㊧		加藤時計店	各種時計眼鏡付属品	
㊨	マルハチ	伊藤理容所		
㊩	ヤマダイ	高梨商店	酒類煙草食料品	
㊪	カネタ	田岡商店	呉服洋品	
㊫	マルイ	井手豊店	引物調進	
㊬	カネタ	高橋菓子店	引物調進	
㊭	マルサ	佐藤豊店	畳替藁布団	
㊮		アベ家具店	和洋家具建具	
㊯	イタガキヤ	本間商店	食料品青果鮮魚	
㊰	マルミ	清野富美雄商店	食料品雑貨文房具	
㊱	マルニタツ	深谷商事	家庭電気器具石油販売日立チェーンズ トール	日立のマークか?
㊲	マルナカ	中垣製綿所	ボロ加工綿打直し	
㊳	マルイ	井利元商店	菓子煙草	
㊴	ヤマサ	坂崎商店	鮮魚乾魚食料品	
余	ヤマホ	堀江商店	酒類衣料品食料品	
二	カネニ	清野商店	菓子食料品	
松	ヤママツ	水野家具店	家具建具製造	

表16 昭和43年7現在「石狩町全町明細図」屋号

屋号	読み名	地図記載の商店名・職業	備考
㊦	マルニ?	照井商店 食料品・雑貨	本町
㊧	マルキユウ	川内商店 雪印牛乳・北海タイムス	
㊨	ヤマタマ	村田商店 雑料理・酒類食品・雑貨	
㊩	ハチニ	堀部商店 酒・米・たばこ・文房具	
㊪	カネジ?	塚谷商店 荒物雑貨・金物・米類	
㊫	カネヤ	家中商店 総合食品販売	
㊬	カネマタ	本庄鉄工所	
㊭	カネカ	後藤商店 タバコ・葉・化粧品・事務用品 元細野商店 屋号をそのまま使用	
㊮	マルダイ	佐藤水産株式会社 石狩小売部	
㊯	ヤマゴ	後藤商店 食料品・鮮魚	
㊰	ヤマキユウ	打込ポンプ・板金・塗装	
㊱	イチキ	梁川商店 菓子・飲食業	
㊲	マルラ	押田薬舖 衣料品・化粧品販売	
㊳	イレマス	川野菓子店 和洋酒類雑貨商	
㊴	カネマン	栗谷商店 お菓子と喫茶店	元金谷商店、屋号をそのまま使用
㊵	マルコ	塩原旅館	
㊶	カクジン?	協和造船工業株式会社 造船・新造内燃機関	南造船所
㊷	イレマル	富木商店 食料品・日用品・衣料品・ゴム靴	
㊸	マルハチ	伊藤理容所	
㊹	カネタ	田岡呉服店 呉服・洋品・寝装	
㊺	マルイ	井出豊店	
㊻	カネタ	高橋菓子店	
㊼		阿部家具店 和洋家具・建具	
㊽	マルシヨウ	田中商店 精肉鮮魚・食料品・青果	
㊾	ヤマホ	堀江商店 呉服・洋品・酒類・石油	
㊿		川下板金工作所	
一	ヤママツ	水野家具店 家具・建具製造	
二	マルナカ	中垣ふとん店 夜具一式・綿打直しフランスベツ	
三	カクサン?	南出精米所	花畔
四	ヤマイチ	片山商店 食料品たばこ・文房具	
五	マルイ	横井商店 酒類・食品	
六	カネシメ	下川鉄工所 農機具修理溶接一切・ポンプ配管工事	

表17 石狩市高岡五の沢北生振地区の屋号

屋号	読み名	氏名	備考
仁	カネニ	蓮田栄一	北生振
三	カネサン	蓮田三雄	北生振
三	カネマス	熊倉正博	北生振
下	ヤマト	熊倉義弘	北生振
沢	カネサワ	熊倉輝則	北生振
伊	マルイ	伊藤 悟	北生振本家
伊	マルイ	伊藤 孝	北生振分家
イ	イジルシ	伊藤健治	北生振
イ	カネイ? オオガネイ?	伊藤 豊	北生振
イ	ヤマキ	木村桃江	北生振 元漁業
今	ヤマチヨウ	出塚富士夫	北生振
目	マルヨ	横山 勇	北生振
藤	ヤマフジ	藤山民男	北生振
サ	マルサ	齊藤良一	北生振
申	ヤマナカ	中村武史	北元漁業
石	ヤマイシ	石山俊一	北生振石狩産業(株)
モ	マルモ	森本 稔	北生振
メ	シメ印	上田晴男	北生振 元漁業
メ	ヤマイチ	清野正一	北生振
シ	マルシ	穴戸弘士	北生振
今	マタジユウ	小本千三郎	北生振六戸の内の一戸
今	ヤマオ	岡島保男	高岡
三	ヤマサン	沖本義高	高岡
三	カネマス	増田優治	高岡
竹	ヤマジユウ	竹水信義	高岡
福	マルフク	福田清治	高岡
喜	ヤマキ	山谷藤雄	五の沢
嘉	マルカ	高屋家	五の沢
キ	キジルシ	竹中家	五の沢

表18 平成2年、平成5年の電話帳の屋号

屋号	読み名	商店名・職業	住所・他
井	マルイ	横井商店 食料品全般・石油・製食品	花畔「石狩市電話帳」二〇〇五年
天	ヤマゲイ	高梨商店	八幡町「石狩市電話帳」二〇〇五年
カ	カネカ	近藤内燃機 (株)	花川東「石狩市電話帳」二〇〇五年
カ	カネヒデ?	後藤商店 事務用品文具・写真材料・洋品・薬・化粧品	親船「石狩市電話帳」二〇〇五年
倉	カネモト	岸本産業	花川北「石狩市電話帳」二〇〇五年
石	カネイシ	片石水産	八幡町「石狩市電話帳」二〇〇五年
倉	ヤマキ	京呉服しぶかわ	花川南「石狩市電話帳」二〇〇五年

表19 地図、広告にも出てこなかった屋号

屋号	読み名	商店名・職業	備考
大	カネダイ	小林幸次郎	花畔村道物産共進会要状受領
三	ヤマサン	石橋旅館 石橋仁	親船町
五	イレゴ	海産商 田中伍幣	八幡町
蠶	イシカリザ	劇場 渡辺吉三郎	八幡町現在シンボルマーク使用
蠶	サクラユ	佐々木久治	本町地域
蠶	ダイコクヤ	高橋時計店 高橋勲 六二部	宮内庁に新巻を献納
万	カネマン	金谷和菓子製造 金谷長之助	
吉	マルキチ	高沢海産業 高沢貞雄	
七	カネセ	簡長蔵 運送業 荷鞍馬で魚を札幌の市場に運ぶ冬は馬越 通称ロクパンサン	
六	ヤマニミツボシ	榎本建設	
石	マルイシ	中央バス待合所 青木石松	
井	マルイ	井利本商店 羊毛加工とお菓子専門の店	
久	カネキユウ	神田商事	
金	マルキン	のひとり粉製造本舗 金子清一郎	
メ	シメイチ	場所請負人の山田家(山田文右衛門)	

表20 現在、看板などに見る屋号 高瀬たみ調査

屋号	読み名	商 店 名	職 業	住 所 ・ 他
金	ヤマタマ	お食事処・民宿 やまたま		親船町
カ	カネカ	其田漁業部		親船町
茶	やなか	福田商店		親船町 元やなか商店
犬	ヤマダイ	高梨商店 米・たばこ・塩・酒・食料品		八幡町
丸		つりえさ EKOGAN		親船東
令	イゲタサン	三菱石油		志美
◇		諸澤ダクト		新港
敏		高橋商店 食料品雑貨		中生振
航		南一條電気商会		花川北
宝		宝すし		花川南
田	マルタ	島田商会		花川南
一	拍子木マーク	炭焼やきとり 石鉄田むら		花川南
キ	マルキ三河屋	お食事処 三河屋		花川南
三	マルサン	サンワ食品		花川南
三	マルサン	丸三ジンギスカン		花川南
幸	マルコウ?	花川質店		花川南
森	ヤマトヤ	旅館 大和屋		花川南

引用参考文献

石狩新聞社一八九八「石狩実業家案内」
 石狩新聞社一八九八・九「石狩案内」
 石狩新聞社 一九九二『石狩ライフ』
 石狩青年会議所二〇〇五『石狩市電話帳』
 石狩町役場一九五六 昭和三十一年一月一日現在「石狩町全町明細図」
 新産業地域指定記念
 石狩町役場一九八五『石狩町誌』中巻一
 岡野信子二〇〇三『屋号語彙の総合的研究』武蔵野書院
 岡野信子二〇〇五『屋号語彙の開く世界』生活語彙の開く世界10和泉書院
 北日本出版社一九五四 昭和二十九年「石狩市街明細地図・厚田村市街明細図」
 北日本出版社一九六八 昭和四三年七月現在「石狩町全町明細図」開基三〇〇年開町一〇〇年記念号
 佐藤水産株式会社『カムイチェブ』
 島 武史一九八六『屋号・商標一〇〇選—C Iのルーツをさぐる』日本工業新聞社
 田中實編著二〇〇二『石狩漁業協同組合史』石狩漁業協同組合
 田尻與吉一九〇三「江別石狩厚田市街地明細図」
 「江別厚田石狩有名家紹介表」
 北海道毎日新聞 一九九八・八 商号登記公告（中嶋幸三氏資料による）
 昭和十三年『石狩地方電話番号簿』

「丸山出し」と石狩湾のさかなたち

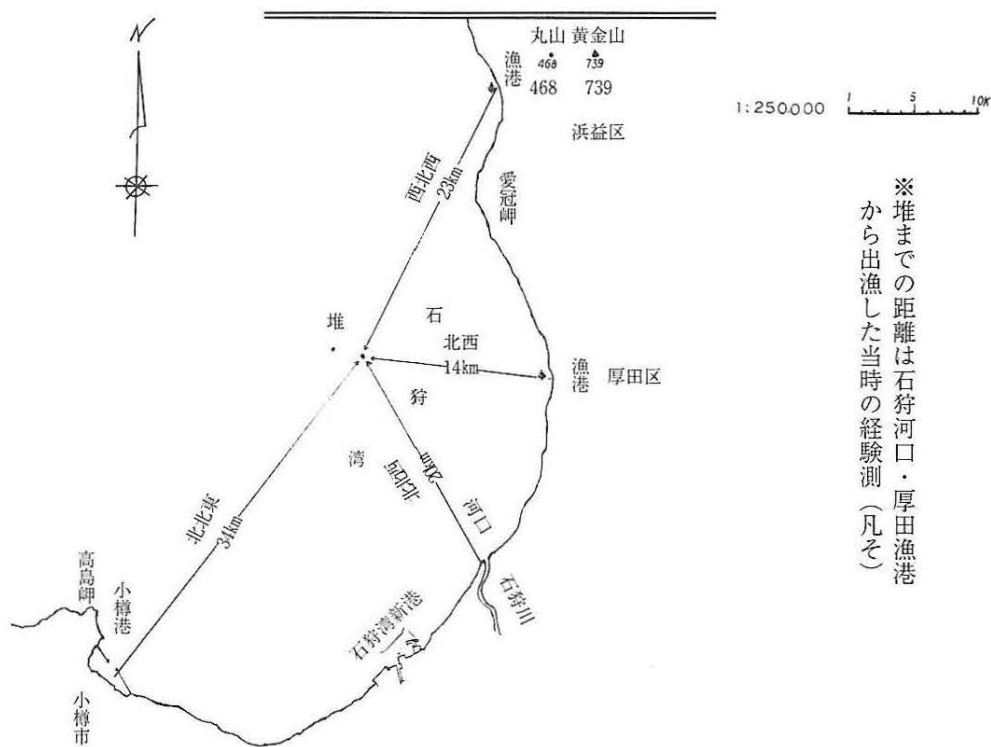
吉岡玉吉

昨今「日本海オロロンライン」の愛冠岬、雄冬岬の奇岩景勝地帯を観光遊覧船で周航する構想が取り沙汰されていると聞く。そのむかし（昭和初期）この付近には石狩、厚田の漁業者が好漁場のため集まる通称「丸山出し」という暗礁帯の漁場があった。これは「大灘」と目される沖合にあり、古くから知られていた漁場である。一般には馴染みは薄いものであるが、当時の沿岸漁業の形態の一端を知るためには必要なことと考へ紹介することとした。なお、大灘というのは「船で沖合に出て山の見えなくなる距離」ようするに沿岸漁業の限界線のことである。当時の漁船は山を目標に自船の位置や漁場の所在を知り操業をしていたことから、この呼称が生まれた。

「丸山出し」というのは石狩、厚田の漁師の間で、使用されていた言葉で浜益の丸山（四六八m）を目標として割り出されていた漁場のことで「鰯流し網」「五目延縄」などの際に利用された場所である。「丸山」というのは図に示したように浜益にある黄金山（浜益富士）の西に隣接する山のことである。厚田浜から出漁すると愛冠岬をかわずと右手に見え、ここに暗礁帯の一つがある。さらにここから二海里ほど沖に出ると右手に黄金山が見えここにも暗礁帯があり、根魚の好漁場である。このため石狩、厚田の漁師はまずこの「丸山」を目標に出漁し、「丸山出し」に到達した。

「丸山出し」の距離は、厚田村の北西約七、八海里の付近で、先にも述べたように愛冠岬をかわし浜益村の丸山が見える地点にある。この地点は水深四十五m〜六十mで「堆状」になっており、別名「沖の瀬」あるいは「根」とも呼んでいた。「堆」は広辞苑によると「大洋中海底にある断頭円錐形（頂上付近がカットされて平らな）の海山。上部

延縄漁場「丸山出し」推定概要図



※堆までの距離は石狩河口・厚田漁港から出漁した当時の経験測（凡そ）

は海の浅所で魚が集り、漁場となる。」とある。日本海で有名なものに大和堆、武蔵堆がある。

「丸山出し」の由来は定かでないが、明治十六年（一八八三）新潟県北蒲原郡から厚田村別狩に移住し漁業を営んで伊藤市丈が筆者と延縄漁のことで話していた際「オラが厚田に来たころすでに中番屋の人が『丸山出し』といって魚がいる場所だと良く獲りに行っていた。オラ達も今、鰯流し網や延縄に行く」と語ったことがある。これからすれば、明治の始めころには既に「丸山出し」という呼び名があったものと思われる。

昭和初期（一九二六）から昭和十三年（一九三八）ごろまで、厚田では鯨場仕事も一段落した六月上旬になると古老に習って若い者は「丸山出し」への延縄漁と操船、帆走、漁撈の訓練を兼ねて出漁するのが恒例となっていた。

「延縄」とは、釣漁具の一種で一般に幹縄、枝縄、浮き、浮き縄、釣針の各部よりなり、構造寸法は漁獲対象魚種により異なる。延縄の対象魚種には、マグロ、サケマス、スケトウ、タイ、サバなどがあり、魚の生息深度により浮き延縄（マグロ、サケマス）、底延縄（スケトウ、タイ、メヌキ、ソイ、カレイ、ヒラメ）、中層延縄（サバなど）の種類がある。

「丸山出し」で行なっていた「五目延縄」は底延縄に含まれる。またこの付近に棲息する魚種としては底魚に「ソウハチ、クロガシラ、カスベ、ヒラメ、オヒヨウ、ソイ、ガヤ、ヤナギノマイ、カジカ、ギシカジカ、マガレイ、タラ、アブラコ」がおり、中層魚に「サバ、ホッケ、フグ、コマイ」などがある。

さて「明日も晴れて、あいの風が吹き、日和もいよいよ丸山出しさ延縄だ」と若者が四、五人寄って「川崎」を整備し延縄十四、五枚持ち出して点検、餌のイワシ一・五cmほどに切つて策に清める。動力のない時代である故に風なしでは川崎に五丁櫓（小型では三丁櫓）で操船

することになる。初夏の朝まだき（午前三時ごろ）早飯を食べ、一升ビンに水を詰め、沖弁当（岡持ち用の弁当・一日中沖合などで漁をする時の弁当）を携えて「あらし」（朝方の出し風、東の微風）を受け、帆を上げて「丸山出し」目掛け帆走を開始する。

川崎船というのは、山形、秋田、新潟で使用されていた船で、北海道には明治三十年代（一八九八）新潟県出身の漁民によって導入されたとされる。主に青森県下北産の杉材で造られて長さ七・五m×十二m、総トン数三トン程度の帆船である。石狩本町地区の鮭鱒流し網、刺し網では不向きであったが、厚田浜益の鯨刺し網などに使用された。このほか小樽高島、余市、古平、岩内などのスケトウ延縄で使用された。また、石狩本町地区や厚田の新潟出身の漁師の間では、昭和初期まで鰯流し網や延縄で使用されていた。船体は華奢だったが水切りが良く、安定性に優れ櫓または帆により航行した。帆走では最大八ノ九ノット（時速十四キロから十六キロ）で走れた。昆布漁などの磯周り漁には不向きだったが、船足が速く沿岸から一兩日程度の航海、沖合い漁では便利な船だった。

風の吹き加減では異なるが順風なら約一時間半ぐらいで「丸山出し」到着となる。方探（方向探知機）、魚探（魚群探知機）などないころであり、「山立て」や潮の流れを見極め、流れを利用して上（かみ）から下（しも）へと延縄を投入する。延縄十四、五枚、全長約一・四kmは十分ほどで張ることができた。延縄の投入が終わると午前五時ごろとなる。延縄を揚げるまで三、四時間あるのでテンテン釣りを始める。途中で糸巻きに引っかかり針が落ちていかず時には中層で泳ぐサバが喰いつく。目当てのソイやヒラメが釣れず笑いものになる。「オイ、サバを釣りに来たんでないぞ、根魚を釣りに来たんだ」と腕の拙さを揶揄しあいながら、操船談義に花を咲かせ早目の昼飯を食べ、そうこうしている内に時間が来て縄揚げを始める。

仕掛けた延縄が根（丸山出し）から外れていないかと憂慮しながら縄を手繰る。程無く手答えを感じ、四、五キロのカスベが上がり、続いて二十cm級のガヤが釣れた。磯のガヤは十cm止まりだが「丸山出し」のは特別大きい。そしてソウハチと続き手繰るごとに次はないかと期待がかかる。これが五目延縄漁の醍醐味である。笹一枚分位揚げたら五、六キロのヒラメが掛って一回大喜び。次にヤマギノマイ、カジカなどが掛かる。なおも手繰って行くと根掛りでもしたように縄が重くなった。そのうち水中でもがく白い姿が見え始めた。ヒラメの大きいのかと期待して元糸を手に巻きつけながら力を入れて引くと二十キロもあるうかと思われるオヒヨウだった、オヒヨウはカレイ目カレイ科の大形魚でスケトウやカジカを食べる、普通体長一〜二mで大きなものになると三mを超えるものがある。

「丸山出し」ではこの位のオヒヨウは小さい方で「刺身」は大きくなるとヒラメには負けるが二三キロのものではヒラメに劣らず美味である。昭和四十九年（一九七四）苫前沖で雌、三十三歳、体長一・七m、体重二百二十キロの記録があり、石狩でも昭和十二年（一九三七）、吉田漁業部の定置網に雌、年齢不明。体長一・八m体重二十二・五キロのヒラメが揚がったのを石狩漁業協同組合出荷場で筆者が見ている。網を手繰ること凡そ二時間でソウハチ三十尾、カスベ二十尾、クロガシラ八尾、マガレイ三尾、ソイ（マゾイ）十二尾、ヤナギノマイ七、八尾、ガヤ二十三尾、ヒラメ八尾、オヒヨウ一尾の漁獲があったと記憶している。「丸山出し」でもはずれると釣果は皆無ということもある。そんな時には、古老や網元、親方に「まだまだ修行が足りない」をたしなめられことになる。綱（なわ）揚げが終わったところ、あいの風が吹き始めそれに乗じて帰る。この途中、「丸山出し」を目指す「鯛流し網」に向かう川崎船とすれ違うことがある。そうした光景は当時の初夏の風物詩の一つだった。この訓練では取れた魚は豊漁であれば村内で販売するが、先に上げたほどの漁では乗組員一同で分配し、

オヒヨウ、ヒラメは一同の晚餐の糧となった。この魚はそれぞれの家で処理する。例えばカスベは左右の胸びれを干物にし、またソウハチも干物として家々の軒下に吊るし乾燥する。村内でこのようなものを干してある家はほとんどが「丸山出し」の「五目延縄」に出漁した家だった。干物ほとんどは保存食であるが乾燥後、子供達は浜辺の玉石の上で叩いてお八つとして食べた。またソウハチの卵は、塩漬けにして一カ月位したら麴や南蛮を入れ発酵させて「切り込み」にして食べた。物のない時代ではそれも美味しく重宝な食べ物の一つだった。冷凍庫もない時代であるから、自家消費できない余分のソイ、ガヤ、ヤナギノマイなどは隣近所や縁者に配ったものである。近年ヤマギノマイは高級魚の仲間入りをしてしまったようであるが、当時はソイの五分の一度の値段で「ひと山いくら」のあまり見向きもされない魚だった。

「丸山出し」は鯨不漁の年、厚田では恵みの好漁場となっていた。近年この場所は、漁業者ばかりでなく釣り人にも知られ、小樽、石狩、厚田、浜益から四季を問わず「船釣り」のメッカとなっている。

参考文献

漁業生物図鑑 新北のさかなたち 上田吉幸他編二〇〇三、水産百
科事典 海文堂一九七二、北海道日本海漁撈漁具用語事典 吉岡玉吉
二〇〇三、広辞苑第四版 岩波書店一九九九

厚田ハタハタ・寄りブリコ

吉岡玉吉

厚田ハタハタ

ハタハタは普段は水深百五十メートルから五百メートルの底質が砂泥の比較的深い所に住んでいるが、産卵期になると岸边に寄ってきて藻場で産卵する。本道では、日本海沿岸、東部の網走、根室、厚岸、南部の噴火湾などで獲れるが、とくに厚田沖で獲れるハタハタは「厚田ハタハタ」と呼ばれるブランド物だ。漁期は十一月中旬から十二月中旬の一ヶ月程度と極めて短期間であるが、冬の到来を告げる魚として知られる。

漁期が短期間であり、時化の時期であるため浮沈が激しく不安定で危険な漁である。昭和初期から十年代までは豊漁だったが、次第に不漁となり昭和六十年ごろから平成十三年ごろにかけて数トンから数十トンと振るわなかつたが、近年では資源保護意識も功を奏しつつあり百トンの大台を超える年も出てきている。漁法は小型定置網、刺し網の二種類でいずれも小規模の沿岸漁業である。

ハタハタはスズキ目ハタハタ科の魚で鱒、鱈、雷魚、燭魚などと書き、本道、秋田ではハタハタ、東北ではカミナリウオ、新潟ではシマアジ、京都でオキアジという。ちなみにアイヌ語ではパタパタ、オタスイコル、ヤンチポルというそうだ。

ハタハタの体の特徴はウロコや側線がなく口が大きく、鰓蓋に五本の鋭い棘をもつ。体色は背側が黄褐色で不定形の濃く褐色の斑点、腹側は銀白色をしている。雌が大きく、雄は小形である。

寄りブリコ

ところでハタハタの卵を「ブリコ」というが、大体大きさは四、五

cmでボール状になっている。産卵はホンダワラやツノマタなどの海藻に行なわれるが卵は生み出されて数十秒海水に触れると粘着物質が溶けて固化する。ブリコという名は「振り子」からきているという説もあるがはっきりしていない。海が時化ると波によって卵塊の付着した海藻がちぎれ海岸に打ち上げられる。これが「寄りブリコ」である。

打ちあがる海岸は、嶺泊から古潭の間、押琴、小谷、青島の前浜、山下の沢から別狩、本村(仲番屋、現漁港)から崎番屋、ポンピラ、安瀬、濃昼などの浜で特に多いのは嶺泊からポンピラにかけてであった。時化が風ぐ夕方や朝方の潮廻りで渚に五十、百メートルの長さに、多いときは海藻屑とともに二、三十センチの厚さで堆積することもあった。

自然の摂理というか、漂流物は時化の後、風を指して岸に寄り、時化始めに漂流物や砂利などが潮と波にさらわれるのが常である。従って打ち上げられたブリコも二、三日渚で晒されても次の時化には波にさらわれて行く。ブリコの皮は硬く丈夫で打ち寄せられても破れることはない。渚に寄ることを繰り返すことはふ化率を高めるのではないかもしれない。

寄りブリコは、産卵してから四、五日目の時化で前浜に打ちあがる。人々はそれ見越して手籠を持って「ブリコ拾い」に行く。今日では資源保護のために、ブリコ拾いは禁止となっている。当時はそんなこともなく、多いときには十メートルと行かないうちに籠は一杯ということもあった。昭和初期の豊漁期ではカマスに一杯拾っても誰も文句を言う人はいなかった。またブリコ拾いを商売にする人もいなかった。拾っても近所に配ったり、小樽や石狩の知人、親戚に送る程度であった。ブリコは拾って湯がいて食べる。

ブリコの色は褐色、青、赤みを帯びるものなど色とりどりで、近年では「冬の浜を彩る宝石」とマスコミで取上げられることもあるが、石狩地区水産技術普及指導部で回収、人工ふ化事業に利用するためだけに拾うことはできなくなっている。

食べ物のない時代ではブリコは子供おやつだった。当時、風の朝、厚田村の人々は「明日の朝はブリコ浜さ寄るぞ」といって、朝はこぞって浜に出かけたものである。とくに十二月の末から年が明けるところになった「寄りブリコ」は卵のなかで仔魚がふ化寸前で動くのが見える。このころのブリコは格別に味が出て美味いと感じられる。

ブリコを食べる

ブリコは皮が丈夫でチョットヤソットでは噛み切れない。良く煮えたものは、相当歯の丈夫な人でも顎が痛くなるほどである。人々は「ブリコは美味しい」というが、煮たブリコは固く、身と一緒に食べるからこそ美味しいのではないかと思う。ハタハタの身は雌より、雄のほうが旨い。特にそのことが分るのが一夜干しの場合である。

ブリコは煮ると茹でるのではなく、「湯通し」の一寸進んだ程度がころあいだと思う。「寄りブリコ」を水洗いして熱湯(塩茹で、醤油茹で、いずれも昆布だし)がたぎったところに入れ、色が変わったら直ぐ上げるのがコツである。もちろん茹でなくとも食べることは可能だ。

昭和十年(一九三五)頃、ブリコ独自の料理法はなく、専ら「塩茹で」「醤油茹で」だけだった。石狩本町地区の人々でわざわざブリコ拾いに行く人はいなかった。そのわけは厚田から石狩に嫁いでいる家や知り合いのある人の家には、時期になるとカマス入りのブリコが通送の馬櫃で送られて来たからである。また、それを隣近所に分けブリコの味を楽しんだものである。ほど良く茹で上がったものを、そのまま齧るのがベストであるが、ブリコ球を四つくらいにちぎって口に入れて齧るとプチプチと音がする。若く歯の丈夫な人は半分くらいにちぎって口に放り込む、するとカリカリと側にいると小気味良い音が聞こえる。こうして茹でブリコを噛みながら四方山話に花を咲かせたものである。ブリコは噛んで中身の汁だけ食べる。卵の皮は固いので吐き出す。

先にのべたとおり、とくに美味いと感じるのは十二月から正月のふ化しかけのブリコは、浜で育った人でなければ味わえないものである。

ハタハタ料理

ブリコの親、ハタハタは昔から「馬の鼻息でも煮える」といわれるほど煮え易い魚である。食べ方はさまざまであるが、やはり第一位は一夜干しの姿焼きであろう。甘塩でヨモギの枯れた茎に通して目刺のようにして干す。第二位は飯鮨だと思ふ。厚田や石狩では昭和初期から食べられており、一緒に漬かったブリコも美味しい。第三位は三平汁。これは生でも塩したものでも可能であるが、ブリコが固いのに変わりなく、厚田や石狩の子供達は大抵食わずに取り除いたものである。第四位田楽。これは生で素焼きのハタハタに酢味噌などを塗って食べるもので、当時としては料理としては高級な方だった。第五位は粕漬けだと思ふ。

近年、ハタハタは減少の一途をたどっており、その卵塊であるブリコが打ち上げられることも少なくなってきた。かつてはハタハタ、ブリコは、石狩・厚田の冬を告げる魚として欠かすことのできないものであり、寄りブリコ拾いも初冬の風物詩であり、浜の忘れられない情景の一コマだった。

参考文献

- 『新北のさかなたち』二〇〇三 上田幸吉ほか編、『アイヌ語辞典』
二〇〇二 萱野 茂編、『厚田浜鱒漁回顧』学習シリーズ第一二号
吉岡玉吉、『水産百科事典』一九七二 海文堂、『あつたの歩み』二〇〇二 石狩市厚田区

石狩小学校、花川小学校の開校と統廃合の経緯

安井澄子

旧石狩市の学校の始まりは、安政五年（一八五八）設けられた「教導館（きょうどうかん）」と思われるが、これは石狩役所の武芸および学問の学校であり、一般人が学べたかどうか不明となっている。当時、石狩には百戸を越える家があったとされ村並であり寺子屋など何らかの子弟教育も始められたのではないかと想像されるが詳細は不明である。我が国の近代教育は明治五年七月の学制から始まる。これに伴う太政官布告では「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからんことを期する」とその決意を述べている。

本稿では明治初期からの石狩市の教育の歴史うち旧石狩市の学校の変遷についてまとめることにする。旧石狩市の学校の元は明治6年の「石狩教育所」と「花畔教育所」から始まったということが出来る。そしてこれらが母体となって各地区の学校につながっている。北海道大学図書館蔵の河野常吉による「石狩場所 札幌市街 石狩町 資料」による石狩本町地区の教育に関する聞き取りは次のようになっていいる。

「一 学校 開拓使ノ初頃 永嶋玄蔵ナルモノ寺子屋ヲ始メ読書習字等ヲ教フ。明治八年二月船場町小林熊次郎ナルモノ私宅ヲ借用シテ教育所ヲ開ク。当別移民賜目貫一郎ヲ雇ヒ教育所ヲ設ク。弁天町五番地大瀧林平其地所ト家トヲ献納シテ校舍ニ先ツ（大瀧ハ此時他へ移転ニ付献納価百円）。次テ能暲寺住職ノ婿里坂大法教員トナル。十三年五月石狩学校ト改称。十四年校舍焼失シテ後、今ノ地ニ移ル。後、今ノ地ニ移ル。止里坂大法止メ添田源五郎来タリ教員トナル。井尻半左エ門金百円ヲ献納ス」となっており明治初期から明治十二年頃までの石狩小学校の変遷が窺われる。

また明治十九年頃の石狩小学校の授業時間は三時間であり、科目は

「読書、作文、修司、算術、実業演習、裁縫」があったという。当学期は九月一日から翌年の八月三十一日とされ休業日は千歳小学校の例であるが「日曜日 秋季皇霊祭 神嘗祭 天長節 新嘗祭 歳末祭 始（十二月二十五日から一月十日） 孝明天皇祭 紀元節 春季皇霊祭 神武天皇祭 札幌神社祭 夏季休業（八月一日から八月三十一日）」であり、他でもほぼ同様だったと考えられる。明治二十六年の石狩尋常小学校の卒業式の様子は次のようであった。「卒業式は大試験を終えてから実施され、七月二十九日、夏の暑い盛りであった。卒業式には学芸品の陳列が行なわれ、大試験の問題案や、生徒の成績物（習字、作文、地理、歴史、理科の答紙、図画）などが並べられた。式場は運動場があてられ、正面に聖影及び勅語を奉置し、紫幕を以て奉蔽上に国旗を前に紅白の時花を飾り、その他の飾りつけは清浄と荘厳とに注意した。定刻に及ぶ頃には、町村吏、総代、生徒、父兄及び市中の主だった者が参観し、殊に案内した既卒者は溢れんばかりであった。女生徒唱歌に和して遊戯し、次いで男生徒は草鞋軽装で兵式体操を演習した。中でも婦人の来観が多かったのは非常に珍しく満足すべき卒業式であった。」（石狩教育史 一九八〇）

明治三十三年以前の小学校の運営は、授業料、寄付金及び市町村費が当てられていたが同年八月の小学校令の改定により授業料が原則廃止となった。また尋常小学校の修業年限も四年制に統一し、高等小学校は二年、三年または四年となった。

石狩小学校

石狩町誌による石狩小学校の沿革については次のように記されている。「明治四年二月、有志者の配慮により、弁天町の借用民家で能暲寺住職が二十余名に読書、習字などを教えた」とされており、このような背景があつて明治六年六月二十五日に「公立石狩教育所」が設立された。その後、この「公立石狩教育所」は明治十二年に「公立石狩学

校』と改称され、明治十九年六月二十日には『若生分校』が設けられた。又、『公立石狩学校』は明治二十八年に『石狩尋常高等小学校』とされ、これに明治三十年『石狩水産補習学校』（全道初の補習学校）が併置され、明治三十二年八月二十日に『高岡分校（分教場？）』が設けられた。さらに、明治三十八年四月には『石狩商業補習学校』が併置となり（明治三十五年の道廳令一二五号『実業補習学校規定実施方法』にもとづく）、明治四十一年に『発泉分教場』が設置された。

大正期に入っては十二年四月一日に『若生分校』が『石狩尋常高等小学校』から分離独立し、大正十五年に『石狩青年訓練所』が併置されている。昭和期に入ると、五年に『石狩実業補習学校』、十一年に『青年訓練所』に代わる『青年学校』が併置され、昭和十六年に『石狩国民学校』、昭和二十二年に『石狩小学校』と改称され、昭和三十一年に全道初の円形校舎が建てられている。（石狩町誌下巻）

平成八年九月市制施行により『石狩市立石狩小学校』と改称され、平成十五年十一月には開校一三〇周年記念式典が挙行されている。平成二十年で一三五年目を迎えている。

花川小学校

石狩町誌によると花川小学校の沿革について次のように記されている。「明治六年四月八日に『花畔教育所』として開かれ、明治十五年六月に『石狩学校花畔学校』、翌十六年五月に『花畔学校』、明治二十四年四月に『花畔小学校』、明治二十八年四月に『花畔尋常小学校』と改称された。また、明治三十一年四月には補習科が設けられ、翌三十三年一月に『志美分校』が設置され、翌三十四年四月に『志美分校』が『志美分教場』と改められ、それが明治三十五年四月一日に『志美尋常小学校』として独立した。更に、明治三十五年十月二十日には、『南線分教場』と『樽川簡易教育所』が付設され、三十七年六月に高等科が設けられ、同年八月に『花川尋常高等小学校』と改称された。

この後、明治三十九年四月に『南線分教場』が『南線尋常小学校』として独立し、明治四十一年に志美・樽川・南線の各所が本校の分教場とされ、明治四十五年六月になって『樽川分教場』が『樽川尋常小学校』として独立した。

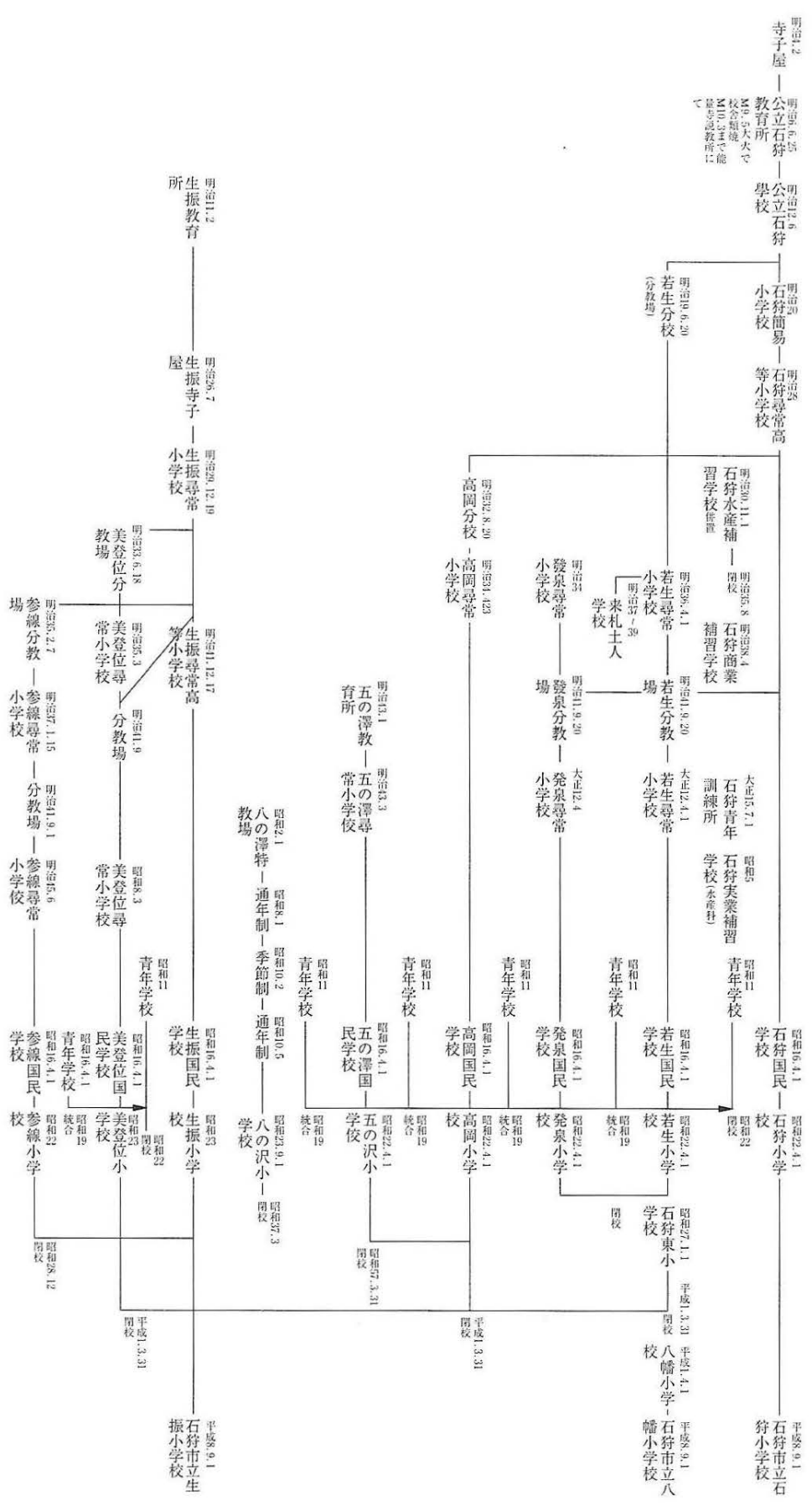
大正十五年七月に『青年訓練所』が併置され、昭和四年四月に『志美分教場』が『志美尋常小学校』となっている。五年十二月に『実業補習学校』が併置され、十年に『青年訓練所』が廃止されて『花川青年学校』の併置となった。更に、昭和十六年四月に『花川国民学校』、昭和二十二年四月には『花川小学校』と改称され、昭和五十二年四月『若葉小学校』への分離がなされ、翌五十三年四月に『志美小学校』の閉校に伴う本校への統合がなされている。（石狩町誌下巻）

平成八年九月市制施行により『石狩市立花川小学校』と改称されている。平成十五年四月一日『緑苑台小学校』への分離がなされ、同年十一月十五日には開校百三十周年記念式典が挙行されている。平成二十年で百三十五年目を迎えている。

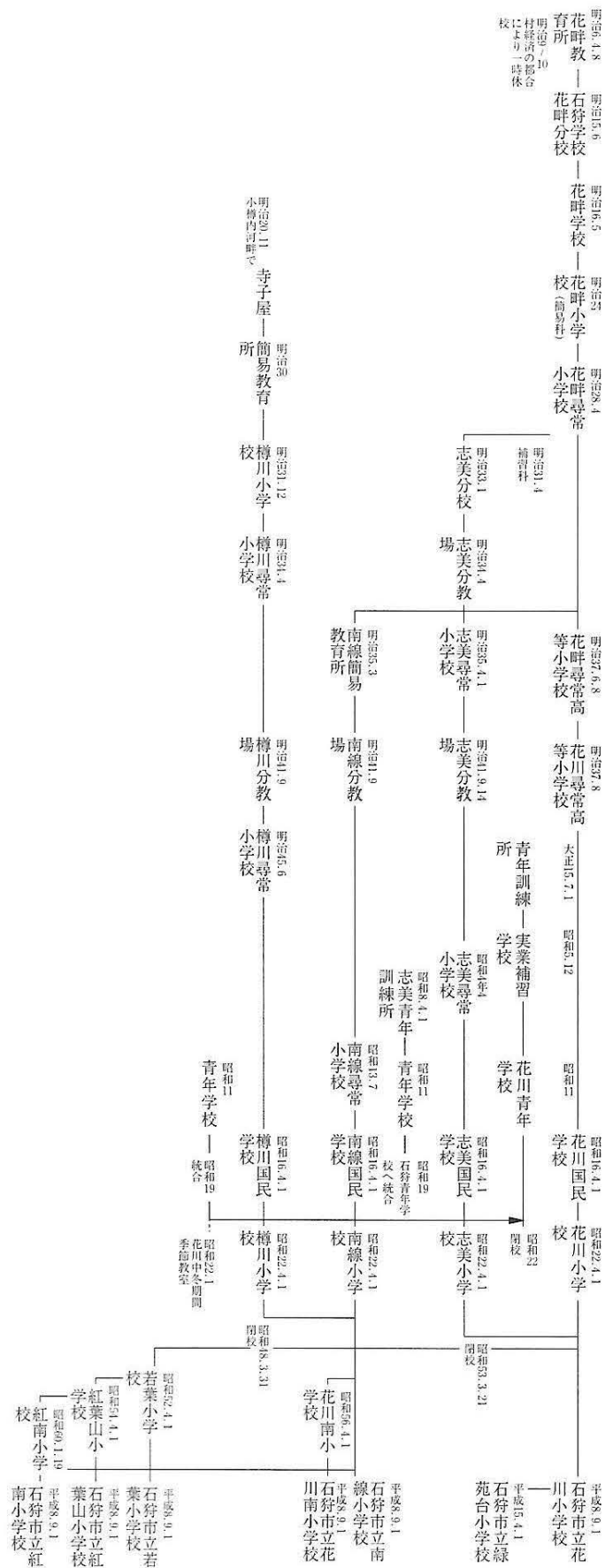
引用参考文献

- 石狩小学校一九七三『創立一〇〇年』開校百周年記念協賛会
- 石狩市二〇〇三『石狩市史年表』
- 石狩町一九九七『石狩町誌』下巻
- 石狩教育研究所編纂委員会編一九八〇『石狩教育史』
- 花川小学校一九八三『はなかわ』花川小学校開校二〇周年記念事業協賛会
- 北海道大学図書館蔵 河野常吉『石狩場所 札幌市街 石狩町 資料』

石狩小学校の開校と統廃合の経緯 (ながれ)



花川小学校の開校と統廃合の経緯（ながれ）



いしかり曆 (創刊号から第21号まで) の総目次

石橋孝夫編

いしかり曆 創刊号(88) (昭和55) 年8月

題字 花田知也

口絵 昭和16年4月 斗金山造林地 右端筆者(ポプラの話、密漁の話) / 鮭皮のケリ(下澤初太郎氏寄贈) / ケリの底の部分すべり止め(郷土資料紹介1)

発刊にあたって

会長 花田知也 p 1

ポプラの話、密漁の話

小西 茂 p 2 / p 7

生振古老物語

前川道寛 p 7 / p 10

花川南、北地区の開発と郷土資料館の建設

福田佐市 p 10 / p 13

第1回国勢調査から

金子仲久 p 13 / p 17

石狩町花川南地区(「通称」新札幌団地)の防風

田中實 p 18 / p 21

保安林に生息する野生鳥類について

沖本義久 p 21 / p 23

石狩町山菜摘記

田中 實 p 23 / p 25

若林清作翁聞書

田中 實 p 26 / p 30

(通称)新札幌団地開発史年表稿

石橋孝夫 p 31

郷土資料紹介1-鮭皮のケリについて

p 32

いしかり曆 第2号 1981 (昭和56) 年3月

挿画鈴木トミエ

出産費用のことなど

駒井秀子 p 1 / p 3

鯉場出稼ぎの頃のこと

沖本義尚 p 4 / p 5

思ひ出すままに

吉本愛子 p 6 / p 7

子供に聞かせる石狩町の昔話II南線地区II

鈴木トミエ p 7 / p 10

子供の頃の思い出

酪農今昔

金子仲久 p 10 / p 13

生振古老物語2-消えた街-生振治水工事市街考

福田佐市 p 14 / p 15

鮫神の誕生-石狩川の主伝説と妙鮫法亀大明神に
ついての覚書き

前川道寛 p 16 / p 20

編集後記

石橋孝夫 p 21 / p 32

いしかり曆 第3号 1982 (昭和57) 年1月

開拓時代の馬産について

理髪業一代

金子仲久 p 1 / p 5

北大中央図書館内北方資料室蔵村山家文書中の包蔵せる

井尻清蔵家文書目録

駒井秀子 p 6 / p 12

子供に聞かせる石狩町の昔話II花川南地区

子供に聞かせる石狩町の昔話IIIサケとわかもの

長谷川嗣 p 13 / p 17

第3号の編集を終えて

鈴木トミエ p 18 / p 21

いしかり曆 第4号 1984 (昭和59) 2月

ごあいさつ

山口福司 p 1

花畔古老昔語り-尾田アサヨさんの巻

「花畔団地」の野鳥について

吉本愛子 p 2 / p 5

昔の物の値段

果樹栽培の奨励

畑宮清一郎 p 6 / p 7

鮭と鯉の昔話

石狩平野の雁をめぐって

金子仲久 p 8 / p 11

生振古老物語III

南線地区(現花川北)の昔と今-阿部重利さんに聞く

福田佐市 p 14 / p 15

黒田晶子 p 15 / p 18

前川道寛 p 19 / p 20

石狩町の町村名(大字・字)について
田中 實 p 29 ~ p 32
昭和五十八年度 石狩町郷土研究会会員名簿 p 32

いしかり暦 第5号 1988(昭和60)年3月

郷土資料館の早期実現を

山口福司 p 1

花畔神社の由来

金子仲久 p 2 ~ p 7

古記録に見る石狩のサケ料理

畑宮清一郎 p 8 ~ p 9

古老談話より―村山コト氏談

田中 實 p 9 ~ p 11

幕末時代の鮭漁―介抱米を主とする

田中 實 p 11 ~ p 13

当別太美で聞いた話―本庄睦男のこと

前川道寛 p 14 ~ p 16

昭和59年度事業から(生振村見学会、浜益村見学会)

石橋孝夫 p 16 ~ p 18

花畔古老昔語り―織田テルさんの巻

吉本愛子 p 19 ~ p 23

復刻石狩文学

郷土研究会編 p 24 ~ p 38

石狩文学回顧

田中實 p 39

昭和59年度石狩町郷土研究会会員名簿

p 40

いしかり暦 第6号 1988(昭和61)年3月

石狩町の石碑調査について

会長

山口福司 p 1 ~ p 2

石狩町空襲について―調査メモ

青木 隆 p 3 ~ p 5

石狩町の石碑―調査メモ

金子仲久 p 6 ~ p 12

子供の頃に

阿部哲雄 p 12 ~ p 14

ふるさと探求

村井喜久司 p 15 ~ p 16

昔を偲んで

福田佐市 p 16 ~ p 17

著述に対しての私的メモ

長谷川嗣 p 17 ~ p 20

花畔古老昔語り―藤井リエさんの巻―

吉本愛子 p 20 ~ p 25

開拓と漢方草木

沖本義久 p 26

特別寄稿

前川道寛著「石狩俳壇誌」誇るべき文化遺産の発掘

大森亮三 p 27 ~ p 28

昭和60年度事業から

事務局石橋孝夫 p 29 ~ p 30

昭和60年度会員名簿

p 31

いしかり暦 第7号 1988(昭和63)年9月

石狩座について

青木 隆 p 1 ~ p 3

イシカリと風

田中 實 p 3 ~ p 9

除虫菊について

金子仲久 p 10 ~ p 20

早坂文雄をしのぶ

前川道寛 p 20 ~ p 24

特別寄稿 一九四五年七月十五日石狩空襲の思い出

中村秋雄 p 25 ~ p 29

いしかり暦 第8号 1989(平成元)年3月

長谷川嗣氏追悼号

会長 山口福司

追悼号発刊に寄せて

口絵 故長谷川嗣先生ノアドバルーン業時代(昭和8~10年) 岐阜県

庁屋上ノリチャード・エドモンド博士(現ロンドン大)と石狩

河口にて(昭和53年)ノ「渡辺惟精の日記」出版祝賀会でハル

エ夫人とともに祝辞を述べる(昭和58年)ノ北海道大学北方資

料室で資料に目を通す

長谷川嗣氏 年譜(稿)

長谷川心平・田中實編 p 1 ~ p 5

受賞略記(稿)

長谷川心平・田中實編 p 6

著述譜(抄)

長谷川嗣 田中 實補編 p 7 ~ p 9

解説・筆写史料目録(抄)

長谷川心平・田中 實編 p 10 ~ p 12

(仮題)長谷川嗣氏の胸懐録(抄)

文学作品 短歌
長谷川心平・田中 實編 p 13 ~ p 14
長谷川嗣 p 15 ~ p 16

詩 そのとき (詩らしく)

長谷川嗣 p 16 ~ p 17

ある古調 (詩らしく)

長谷川嗣 p 18

解説文書から

長谷川嗣編 石狩缶詰来歴―開拓使文書ヨリ (抜)

所載にあたって 田中 實 p 19

長谷川嗣編 石狩缶詰来歴―開拓文書ヨリ (抜) p 20 ~ p 26

松浦武四郎研究会のあゆみ 吉田千萬 p 27

「松浦武四郎研究会」例会記事 田中 實 p 28

編集後記 田中 實 p 29

いしかり暦 第9号 1990 (平成2) 年3月

いしかり渡船場物語

口絵 とせんのアルバム―石狩川渡船― 青木 隆撮影、絵葉書

さよなら終航海/さよなら終航海2/さよなら終航海3/八幡

町に向かう渡船 (絵ハガキ) 大正初期?/八幡町側棧橋 (絵ハ

ガキ) 大正初期?/八幡町側棧橋 (絵ハガキ) 大正初期?/渡

船待ちの人々 (絵ハガキ) 大正初期?/馬車やトラックを積ん

だ馬船 昭和24年ごろ/馬船から落ちたトラック 撮影年不明

/満員の乗客 (らんこう丸) 昭和24年/冠水した待合所 (本町

側) と渡船/馬船を曳くやはた丸 撮影年不明/海水浴に向か

う小学生、後方はフェリーポート 昭和47年7月/氷橋の点検

をする職員撮影年不明/車を満載した「あつた丸」 昭和47年

7月/氷橋を渡る親子 撮影年不明/渡船場に向う馬ソリ (八

幡町) 昭和35年12月/子供を抱いて渡す職員 撮影年不明/

氷をわって航行する「ちどり丸」 昭和53年1月

第一章石狩町内の渡船場について 石橋孝夫 p 1 ~ p 2

第二章花畔、生振、美登位地区の渡船場

一 花畔市街地渡船場 金子仲久 p 3 ~ p 7

二 聞き書き女船頭だった頃 松本ハナ談

吉本愛子・高瀬たみ p 8 ~ p 10

三 花畔北三線渡船場について 金子仲久 p 11 ~ p 12

四 生振村三線―「北の渡し」林山キエ談前川道寛 p 13

五 茨戸渡船場 横山敏美 p 14 ~ p 20

六 八線渡船場 横山敏美 p 21

七 生振基線渡船場 長谷川心平・田中 實補筆 p 22 ~ p 24

第三章石狩川渡船場

一 渡船場のあゆみ 青木 隆 p 25 ~ p 27

二 国営渡船場時代のようす 青木 隆 p 28 ~ p 31

三 渡船料金の移りかわり 青木 隆 p 32 ~ p 34

四 事業経営にたずさわった人々 石橋孝夫 p 35 ~ p 36

五 石狩川渡船場略年表 青木 隆・石橋孝夫編 p 37 ~ p 40

六 石狩の吹雪と氷橋 青木 隆 p 41 ~ p 42

七 聞き書き 渡船のお客さん 赤川孝子・後藤良子・三島照子談 駒井秀子 p 43 ~ p 48

八 磯舟から馬舟、そしてさつき丸の頃 吉岡タカさん、吉岡ヒデさん 大島晶子 p 49 ~ p 50

九 渡船に乗組んでいたころ 伊藤逸策 p 51 ~ p 52

十 渡船場勤務時代 永井英明 p 53 ~ p 55

いしかり暦 第10号 1991 (平成3) 年3月

石狩の冬―昭和初期から同30年代前半まで 田中 實編 p 1 ~ p 15

冬の年中行事 駒井秀子 p 16 ~ p 19

むかしの冬の憶い出

青木 隆 p 20 ~ p 25

石狩川治水工事と生振村治水市街地

吉野惣栄 p 26 ~ p 50

いしかり暦 第11号 1988(平成8)年3月

『澄月園池菱 清雅帖 石狩尚古社連句集』

解説前川道寛 校注窪

田 薫・田中 實

発刊にあたって

会長

一 尚古社と鎌田池菱

田中 實 p 2

二 俳人略歴

田中 實 p 3 ~ p 4

三 連歌・俳諧・連句

田中 實 p 4 ~ p 7

四 清雅帖解説

窪田 薫 p 8 ~ p 10

五 清雅帖外解説

前川道寛 p 11 ~ p 65

あとがき

前川道寛 p 67 ~ p 78

前川道寛、窪田薫 略歴

p 80

いしかり暦 第12号 1988(平成11)年3月

いしかり子ども風土記―郷愁の砂浜遊び

吉岡玉吉 p 1 ~ p 10

小樽内集落

高瀬たみ p 11 ~ p 12

石狩の近代化どのようにして進められたか (講演)

(テープ起こし高瀬たみ)

石狩花畔土地改良区生振地区について

君 尹彦 p 13 ~ p 19

石狩市八幡町高岡の通称名調べ

吉田隆義 p 20 ~ p 24

石狩史地方ノート一 樽川の運河・生振の養鶏・八幡の馬市

小川 茂 p 25 ~ p 28

鈴木トミエ p 29 ~ p 35

遊び心で推論した生振地名考

吉野惣栄 p 36 ~ p 46

養 蜂

金子仲久 p 43 ~ p 46

いしかり暦 第13号 2000(平成12)年3月

石狩尚古社資料館の資料から

中島勝久 p 1 ~ p 10

石狩右岸地区内治山砂防ダムについて

小川 茂 p 11 ~ p 13

幻となった石狩浜の鱒(鱈) 漁業

吉岡玉吉 p 14 ~ p 22

地神サン

吉野惣栄 p 23 ~ p 24

子育て観音 地域の母子を見守る

高瀬たみ p 25 ~ p 27

積丹岬

石川秀子 p 28 ~ p 29

神威岬についての思い出

金子仲久 p 30 ~ p 34

石狩の近代化はどのようにして進められたか (続) (講演)

(テープ起こし高瀬たみ)

年表見る村山家の沿革

君 尹彦 p 35 ~ p 48

いしかり暦 第14号 2001(平成13)年3月

村山耀一 p 49 ~ p 87

「亜麻」とトーマン団地

小川 茂・榎本新一 p 1 ~ p 9

石狩市八幡地区に現存する石倉

小川 茂・監修田中實 p 10 ~ p 15

いしかり点描・蝦夷錦

石川秀子 p 16 ~ p 18

りょうし(漁師) 懐古

吉岡玉吉 p 19 ~ p 24

漁人、浦百姓(本浦、端浦) 漁師

中村秋雄 p 25 ~ p 28

帝国石油八ノ沢工業所に働いて

中村秋雄 p 25 ~ p 28

石狩市産業組合物語(保証責任石狩町信用購買利用組合)

中村秋雄 p 25 ~ p 28

特別例会「巻物に見る歴史展」に参加して

中村秋雄 p 29 ~ p 32

不毛の大地に黄金の花咲くまで

高瀬たみ p 33 ~ p 36

いしかり暦 第15号 2002(平成14)年3月

小川 茂 p 37 ~ p 49

石狩市と巖谷小波

高瀬たみ p 1 ~ p 3

生振に残る茅葺(かやぶき) 屋根の家

吉田隆義 p 4 ~ p 5

石狩市右岸地域の農村電化設備の経緯 小川 茂 p 6 / p 7
 石狩町右岸地域の国、道の貸付牛導入の経緯 小川 茂 p 8
 北海道昔々(一) 吉野惣栄 p 9 / p 10
 石狩浜漁師天気予報あれこれ 吉岡玉吉 p 11 / p 19

いしかり暦 第16号 2003(平成15)年3月
 自由民権運動・秩父事件指導者
 一井上伝蔵、石狩の二十三年(図書館講座 講演)

(テープ起こし吉本直江)

石狩浜のコダマカイ 中嶋幸三 p 1 / p 12
 石狩浜の蛸貝とその模様 吉岡玉吉 p 13 / p 16
 石狩浜の網漁業 漁業―小手繰網漁業 吉岡玉吉 p 17 / p 21
 吉岡玉吉・補訂田中實 p 22 / p 35

いしかり暦 第17号 2004(平成16)年3月
 創立45周年記念特集号 柏林 郷土研究四十五周年
 カラーグラビア ある日の郷土研究会 活動と発刊図書
 会員の研究発表誌「いしかり暦」の一部 / 「いしかり暦」特集号ほか
 / いしかり郷土シリーズの各号 / 『いしかり暦』創刊号(昭和55年8月) / 石狩の詩情展―新聞記事とシンポジウム風景(平成12年3月)
 / 町内研修―石狩尚古社を見学(平成5年12月) / 町外研修―旭旭川市博物館見学(平成8年9月) / 市制施行記念―歴史パネル展(平成8年6月) / 町外研修―開拓の村を見学(平成4年10月) / 初めての公開講座で研究発表をする田中實会員(平成15年10月) / 例会に集まった会員(平成15年12月)(写真提供 吉本愛子、青木隆、鈴木トシエ、村山耀一の各氏)

発刊のことば ぶりかえれば四十五年 会長 村山耀一 p 3
 祝辞 歴史を記録する貴重な会 石狩市長 田岡克介 p 4
 第一章石狩市郷土研究会四十五年のあゆみ
 四十五年間の足跡 田中 實 p 7 / p 8
 第二章活動の記録
 第一期創立(昭和三十五年)から昭和五十年まで
 田中 實・鈴木トミエ p 9 / p 20
 第二期昭和五十一年から六十三年まで
 田中 實・鈴木トミエ p 21 / p 30
 第三期平成元年から十五年まで
 田中 實・鈴木トミエ p 30 / p 52

第三章 発刊図書

『いしかり暦』(創刊号から第十六号) p 53 / p 57
 いしかり郷土シリーズ1『石狩の空襲を語りつぐ』 青木 隆 p 58 / p 59
 いしかり郷土シリーズ2『石狩の碑第一輯―石碑等に見る石狩町の歩み』 山口福司 p 59
 いしかり郷土シリーズ3『石狩の碑第二輯―石碑等に見る石狩町の歩み』 石橋孝夫 p 60
 いしかり郷土シリーズ4『鎌田池菱と尚古社―中島家資料に見る石狩俳壇と各地の俳人達』 中島勝久 p 60 / p 61
 『町内資料に読む 石狩町女性史年表』 駒井秀子 p 61 / p 62
 『石狩本町地区市街図―明治三五年―四〇年(一九〇二―一九〇七)』 田中 實 p 62
 石狩市と石狩市郷土研究会合作による記録写真集『石狩市 21世紀に伝える写真集』 田中 實 p 62 / p 63
 第四章回想録―郷土研究会と私
 郷土研究会発足の当時を回想して 昭和三十五年入会

「石狩濱浜ホテル」平成四年入会	青木 隆 p 64 / p 65
亡き金子仲久さんに誘われて 平成八年入会	石川 秀子 p 65 / p 66
亡き小川茂さんに誘われて 平成十年入会	今井光男 p 67
砂丘の玫瑰 平成七年入会	榎本新一 p 67 / p 68
「なまなきひとむれ」の歴史昭和五十五年入会	君 尹彦 p 68
いまがあるとうこと 昭和五十五年入会	駒井秀子 p 68 / p 69
郷土研究会と私 昭和三十五年入会	鈴木トミエ p 69 / p 70
感謝をこめて 昭和六十年入会	高木憲了 p 70
郷土研究会は広く深い 平成四年入会	高瀬たみ p 71 / p 72
石狩生まれの私 平成九年入会	田中豈恵子 p 72
石狩の歴史にふれた俳句資料 平成四年入会	釣本峰雄 p 72 / p 73
まちどおしい古文書会 平成五年入会	中島勝久 p 73 / p 74
石狩空襲と研究会 平成四年入会	仲野 孝 p 74 / p 75
郷土研究会と私 平成五年入会	中村秋雄 p 75
郷土研究会は心のビタミン剤 平成七年入会	原澤文子 p 75 / p 76
郷土研究会入会まで 平成六十二年入会	星川富美子 p 76 / p 77
「石狩を知る」歎び 平成九年入会	村山耀一 p 77 / p 78
二代目会長を引きうけて 昭和五十五年入会	安井澄子 p 78 / p 79
石狩の漁労史を記したい 平成九年入会	山口福司 p 79 / p 80
私の郷土研究会 平成七年入会	吉岡玉吉 p 80 / p 81
心豊かなになれる会 昭和五十五年入会	吉永繁起 p 81
資料編	吉本愛子 p 81 / p 82
1 歴代役員と会員名簿	
2 石狩市郷土研究会会則	p 84 / p 89
3 予算の移り変わり	p 90 / p 91
4 新聞・広報紙などで紹介された研究会	鈴木トミエ p 94 / p 98
付 明治三十九年九月十八日 石狩案内 石狩新聞社	p 99 / p 118

付2 石狩町勢要覧 石狩町役場	大正十一年七月	解説田中 實 p 119 / p 120
大正十一年七月 石狩町勢一覽 石狩町役場		p 121 / p 154
あとがき		鈴木トミエ p 155 / p 156
題字原澤文子 挿画吉岡玉吉		
編集 創立45周年記念誌編集委員会		
編集委員 青木隆 石橋孝夫 駒井秀子 鈴木トミエ 高木憲了		
田中 實 星川文子 三島照子 村山耀一 山口福司 吉本愛子		
いしかり暦 第18号 2005(平成17)年3月		
村山家文書解説		
「場所請負人履歴 村山伝兵衛」 村山家文書を読む会 p 1 / p 12		
稀本紹介 明治14年函館印行の『讚神歌』 田中 實 p 13 / p 16		
石狩浜漁業関係者の主な祭事 吉岡玉吉 p 17 / p 20		
石狩本町地区あやかり名 昭和初期 昭和20年代まで 吉岡玉吉 p 21 / p 24		
石狩十三場所(元禄一三『一七〇〇』年)と地名由来 吉岡玉吉 p 25 / p 27		
(復刻) 石狩町沿革史 明治42年5月編纂 石狩町役場 p 28 / p 41		
いしかり暦 第19号 2006(平成18)年3月		
石狩市民図書館所蔵兵部省文書を読む 田岡克介 p 1 / p 3		
石狩尚古社資料館の資料から 中島勝久 p 4 / p 7		
三平汁と石狩鍋 吉岡玉吉 p 8 / p 12		
北千島サケ・マス流し網めしたき物語 吉岡玉吉 p 13 / p 34		
北千島占守島長崎港を基地として		

いしかり暦 第20号 2007(平成19)年3月

村山家文書解読 「石狩場所蝦夷人撫育筋書上」

村山家文書を読む会 p1 ~ p9

村山家文書解読 「村山家家訓」 村山家文書を読む会 p10 ~ p13

石狩川河口に於けるサケ地曳き網漁回顧 吉岡玉吉 p14 ~ p23

風の呼び名「あい風」(「あい」)について

吉岡玉吉・田中實 p24 ~ p32

いしかり暦 第21号 2008(平成20)年3月

高島家文書 明治三十六年六月廿日 運動会順序

三島照子 p1 ~ p7

村山家文書解読「村山本家石狩転出二伴う十二ヶ条心得ノ事」

村山家文書を読む会 p8 ~ p15

古谷長兵衛について

工藤義衛 p16 ~ p19

石狩市内の屋号 「丸山出し」と石狩湾のさかなたち

高瀬たみ・吉岡玉吉編 p20 ~ p44

厚田ハタハタ・寄りブリコ

吉岡玉吉 p48 ~ p49

石狩小学校花川小学校の開校と統廃合の経緯

安井澄子 p50 ~ p53

いしかり暦(創刊号から第21号まで)の総目次

石橋孝夫編 p54 ~ p60

いしかり暦(創刊号から第21号まで)の執筆者別目録

石橋孝夫編 p61 ~ p66

いしかり暦（創刊号から第21号まで）の執筆者別目録

石橋孝夫編

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
1	青木 隆	1986.3	石狩町空襲についてー調査メモ	第6号	p3 / p5
2	青木 隆	1988.3	石狩座について	第7号	p1 / p3
3	青木 隆	1990.3	渡船場のあゆみ	第9号	p25 / p27
4	青木 隆	1990.3	国営渡船場時代のようす	第9号	p28 / p31
5	青木 隆	1990.3	渡船場料金の移りかわり	第9号	p32 / p34
6	青木 隆	1990.3	石狩川渡船場略年表（共同執筆 石橋孝夫）	第9号	p37 / p40
7	青木 隆	1990.3	石狩の吹雪と氷橋	第9号	p41 / p42
8	青木 隆	1991.2	むかしの冬の憶い出	第10号	p20 / p25
9	青木 隆	2004.3	いしかり郷土シリーズ1『石狩の空襲を語りつぐ』	第17号	p58 / p59
10	青木 隆	2004.3	郷土研究会発足の当時に回想して	第17号	p65 / p65
11	阿部哲雄	1986.3	子供の頃に	第6号	p12 / p14
12	石川秀子	2000.3	積丹岬	第13号	p28 / p29
13	石川秀子	2001.3	いしかり点描・蝦夷錦	第14号	p16 / p18
14	石川秀子	2004.3	「石狩海濱ホテル」	第17号	p65 / p66
15	石橋孝夫	1980.8	郷土資料紹介1ー鮭皮のケリについて	創刊号	p31
16	石橋孝夫	1981.3	鮫神の誕生ー石狩川の主伝説と妙鮫法亀大明神についての覚書	第2号	p21 / p32

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
3	石橋孝夫	1981.3	編集後記	第2号	p33
4	石橋孝夫	1981.3	第3号の編集を終えて	第3号	p28
5	石橋孝夫	1985.3	昭和59年度事業から（生振村見学会、浜益村見学会）	第5号	p16 / p18
6	石橋孝夫	1986.3	昭和60年度事業から	第6号	p29 / p30
7	石橋孝夫	1990.3	石狩町内の渡船場について	第9号	p1 / p2
8	石橋孝夫	1990.3	石狩川渡船場略年表（共同執筆 青木 隆）	第9号	p37 / p40
9	石橋孝夫	2004.3	いしかり郷土シリーズ3『石狩の碑第二輯ー石碑等にもみる石狩の歩み』	第17号	p60
10	石橋孝夫	2008.3	村山家文書解説「村山本家石狩転出に伴フ十二ヶ条心得ノ事」解説	第21号	p14 / p15
11	石橋孝夫	2008.3	いしかり暦（創刊号から第21号まで）の総目次	第21号	p54 / p60
12	石橋孝夫	2008.3	いしかり暦（創刊号から第21号まで）の執筆者別目録	第21号	p61 / p66
13	伊藤逸策	1990.3	渡船に乗組んでいたころ（特別寄稿）	第9号	p51 / p52
14	今井光男	2004.3	亡き金子仲久さんに誘われて	第17号	p67
15	榎本新一	2001.3	「亜麻」とトーマン団地（共同執筆 小川 茂）	第14号	p1 / p9
16	榎本新一	2004.3	亡き小川茂さんに誘われて	第17号	p67 / p68
17	大森亮三	1987.3	特別寄稿 前川道寛著「石狩俳壇誌」誇るべき文化遺産の発掘	第6号	p27 / p28
18	小川 茂	1999.3	石狩市八幡町高岡の通称名調べ	第12号	p25 / p28
19	小川 茂	2000.3	石狩右岸地区内治山砂防ダムについて	第13号	p11 / p13
20	小川 茂	2001.3	「亜麻」とトーマン団地（共同執筆 榎本新一）	第14号	p1 / p9

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
52	金子仲久	1990.3	花畔北三線渡船場について	第9号	p 11 / p 12
51	金子仲久	1990.3	花畔市街地渡船場	第9号	p 3 / p 7
50	金子仲久	1988.3	除虫菊について	第7号	p 10 / p 20
49	金子仲久	1986.3	石狩町の石碑―調査メモ	第6号	p 6 / p 12
48	金子仲久	1985.3	花畔神社の由来	第5号	p 2 / p 7
47	金子仲久	1984.2	果樹栽培の奨励	第4号	p 11 / p 13
46	金子仲久	1984.2	昔の物の値段	第4号	p 8 / p 11
45	金子仲久	1982.3	開拓時代の馬産について	第3号	p 1 / p 5
44	金子仲久	1981.3	子供の頃の思い出	第2号	p 10 / p 13
43	金子仲久	1980.8	第1回国勢調査から	創刊号	p 13 / p 17
42	工藤義衛	2008.3	古谷長兵衛について	第21号	p 16 / p 19
41	沖本義久	1986.3	開拓と漢方草木	第6号	p 26
40	沖本義尚	1981.3	鯉場出稼ぎの頃のこと	第2号	p 4 / p 5
39	沖本義久	1980.8	石狩町山菜摘記	創刊号	p 21 / p 23
38	小川茂	2002.3	石狩町右岸地域の国、道の貸付牛導入の経緯	第15号	p 8
37	小川茂	2002.3	石狩市右岸地域の農村電化設備の経緯	第15号	p 6 / p 7
36	小川茂	2001.3	不毛の大地に黄金の花咲まで	第14号	p 37 / p 49
35	小川茂	2001.3	石狩市八幡地区に現存する石倉(監修 田中實)	第14号	p 10 / p 15

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
70	駒井秀子	1991.2	冬の年中行事	第10号	p 15 / p 19
69	駒井秀子	1990.3	聞き書き 渡船のお客さん 赤川孝子・後藤良子・三島照子談	第9号	p 43 / p 48
68	駒井秀子	1984.2	南線地区(現花川北)の昔と今―阿部重利さんに聞く	第4号	p 23 / p 28
67	駒井秀子	1982.3	理髪業一代	第3号	p 6 / p 12
66	駒井秀子	1981.3	出産費用のことなど	第2号	p 1 / p 3
65	小西茂	1980.8	ポプラの話、密漁の話	創刊号	p 2 / p 7
64	黒田晶子	1990.3	磯舟から馬舟、そしてさつき丸のころ 吉岡タカさん、吉岡ヒデさん	第9号	p 49 / p 50
63	黒田晶子	1984.2	石狩平野の雁をめぐって	第4号	p 15 / p 18
62	窪田薫	1996.3	連歌・俳諧・連句(特別寄稿)	第11号	p 8 / p 10
61	郷土研究会編	2005.3	(復刻)石狩町沿革史 明治42年5月 編纂石狩町役場	第18号	p 28 / p 41
60	郷土研究会編	2004.3	大正十一年七月 石狩町勢要覧 石狩町役場	第17号	p 119 / p 154
59	郷土研究会編	2004.3	明治三十九年九月十八日 石狩案内	第17号	p 99 / p 118
58	郷土研究会編	1985.3	復刻 石狩文学	第5号	p 24 / p 38
57	君尹彦	2004.3	砂丘の玫瑰	第17号	p 68
56	君尹彦	2000.3	石狩の近代化はどのようにして進められたか(続)(講演)	第13号	p 35 / p 48
55	君尹彦	1999.3	石狩の近代化はどのようにして進められたか(講演)	第12号	p 13 / p 19
54	金子仲久	1996.3	神威岬についての思い出	第13号	p 30 / p 34
53	金子仲久	1996.3	養蜂	第12号	p 43 / p 46

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
88	3	高瀬 ため	2000.3	子育て観音 地域の母子を見守る	第13号 p 25 / p 27
87	2	高瀬 ため	1999.3	小樽内集落	第12号 p 11 / p 12
86	1	高瀬 ため	1990.3	聞き書き女船頭だった頃 松本ハナ 談(共同執筆 吉本愛子)	第9号 p 8 / p 10
85	1	高木 憲了	2004.3	郷土研究会と私	第17号 p 70
84	2	田岡 克介	2006.3	石狩市民図書館所蔵兵部省文書を読む	第19号 p 1 / p 3
83	1	田岡 克介	2004.3	祝辞 歴史を記録する貴重な会	第17号 p 4
82	10	鈴木トミエ	2004.3	あとがき	第17号 p 155 / p 156
81	9	鈴木トミエ	2004.3	資料編4 新聞・広報誌などで紹介された研究会	第17号 p 94 / p 98
80	8	鈴木トミエ	2004.3	いまがあるということ	第17号 p 69 / p 70
79	7	鈴木トミエ	2004.3	第三期 平成元年から十五年まで (共同執筆 田中 實)	第17号 p 30 / p 52
78	6	鈴木トミエ	2004.3	第二期 昭和五十二年から六十二年まで (共同執筆 田中 實)	第17号 p 21 / p 30
77	5	鈴木トミエ	2004.3	第一期 創立(昭和三十五年)から 昭和五十年まで(共同執筆 田中 實)	第17号 p 9 / p 20
76	4	鈴木トミエ	1999.3	石狩地方史ノート一 樽川の運河・ 生振の養鶏・八幡の馬市	第12号 p 29 / p 35
75	3	鈴木トミエ	1982.3	子供に聞かせる石狩町の昔話Ⅲ サ ケとわかもの	第3号 p 22 / p 27
74	2	鈴木トミエ	1982.3	子供に聞かせる石狩町の昔話Ⅱ 花 川南地区	第3号 p 18 / p 21
73	1	鈴木トミエ	1981.3	子供に聞かせる石狩町の昔話Ⅰ 南線 地区	第2号 p 7 / p 10
72	7	駒井 秀子	2001.3	「なまなまきひとむれ」の歴史	第17号 p 68 / p 69
71	6	駒井 秀子	2001.3	「町内資料に読む」石狩町女性史年 表	第17号 p 61 / p 62

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
106	14	田中 實	1989.3	長谷川嗣編「石狩岳話来歴」開拓使 文書ヨリ(抜)所載にあたって	第8号 p 19
105	13	田中 實	1989.3	(仮題)長谷川嗣氏の胸懐録(抄) (長谷川心平共編)	第8号 p 13 / p 14
104	12	田中 實	1989.3	長谷川嗣氏 解説・筆写資料目録 (抄) (長谷川心平共編)	第8号 p 10 / p 12
103	11	田中 實	1989.3	長谷川嗣氏 著述譜(抄) (長谷川 心平共編)	第8号 p 7 / p 9
102	10	田中 實	1989.3	長谷川嗣氏 受賞略歴(稿) (長谷 川心平共編)	第8号 p 6
101	9	田中 實	1989.3	長谷川嗣氏 年譜(稿) (長谷川心 平共編)	第8号 p 1 / p 5
100	8	田中 實	1988.3	イシカリと風	第7号 p 3 / p 9
99	7	田中 實	1985.3	石狩文学回顧	第5号 p 39
98	6	田中 實	1985.3	幕末時代の鮭漁一介抱米を主とする	第5号 p 11 / p 13
97	5	田中 實	1985.3	古老談話より「村山コト氏談	第5号 p 9 / p 11
96	4	田中 實	1984.2	石狩町の町村名(大字・字)につい て	第4号 p 29 / p 32
95	3	田中 實	1980.8	(通称)新札幌団地開発史年表稿	創刊号 p 26 / p 30
94	2	田中 實	1980.8	若林清作翁聞書	創刊号 p 23 / p 25
93	1	田中 實	1980.8	石狩町花川南地区(「通称」新札幌 団地)「防風保安林」に生息する野生鳥 類について	創刊号 p 18 / p 21
92	7	高瀬 ため	2008.3	石狩市内の屋号(吉岡玉吉との共編)	第21号 p 20 / p 44
91	6	高瀬 ため	2004.3	感謝を込めて	第17号 p 71 / p 72
90	5	高瀬 ため	2002.3	石狩市と巖谷小波	第15号 p 1 / p 3
89	4	高瀬 ため	2001.3	特別例会「巻物に見る歴史展」に参 加して	第14号 p 33 / p 33

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
124	永井英明	1990.3	渡船場勤務時代(特別寄稿)	第9号	p 53 / p 52
123	釣本峰雄	2004.3	石狩生まれの私	第17号	p 72 / p 73
122	田中 豊恵子	2004.3	郷土研究会は広く深い	第17号	p 72
121	田中 實	2007.3	風の呼び名「あい風」(「あい」について)(共同執筆 吉岡玉吉)	第20号	p 24 / p 32
120	田中 實	2005.3	稀本紹介 明治14年函館印行の『讀神歌』	第18号	p 13 / p 16
119	田中 實	2004.3	付2石狩町勢要覽 石狩役場 大正十一年七月 解説	第17号	p 119 / p 120
118	田中 實	2004.3	石狩市と石狩市郷土研究会の合作による記録写真集「石狩市21世紀に伝える写真集」	第17号	p 62 / p 63
117	田中 實	2004.3	「石狩町本町地区市街地図(明治三五年/四〇年(一九〇一)一九〇七)」	第17号	p 62
116	田中 實	2004.3	第三期 平成元年から十五年まで(共同執筆 鈴木トミエ)	第17号	p 30 / p 52
115	田中 實	2004.3	第二期 昭和五十二年から六十三年まで(共同執筆 鈴木トミエ)	第17号	p 21 / p 30
114	田中 實	2004.3	第一期 創立(昭和三十五年)から昭和五十年まで(共同執筆 鈴木トミエ)	第17号	p 9 / p 20
113	田中 實	2004.3	四十五年間の足跡	第17号	p 7 / p 8
112	田中 實	1996.3	俳人略歴	第11号	p 4 / p 7
111	田中 實	1996.3	高古社と鎌田池菱	第11号	p 3 / p 4
110	田中 實	1996.3	発刊にあたって	第11号	p 2
109	田中 實	1991.2	石狩の冬―昭和初期から同30年代前半まで	第10号	p 1 / p 15
108	田中 實	1989.3	編集後記	第8号	p 29
107	田中 實	1989.3	「松浦武四郎研究会」例会記事	第8号	p 28

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
142	長谷川 嗣	1982.3	著述に対しての私的メモ	第6号	p 17 / p 20
141	長谷川 嗣	1982.1	北大中央図書館内北方資料室蔵村山家文書中の包蔵せる井尻清蔵家文書目録	第3号	p 13 / p 17
140	長谷川心平	1990.3	生振基線渡船場(田中實補筆)	第9号	p 22 / p 24
139	長谷川心平	1989.3	(仮題)長谷川嗣氏の胸懐録(抄)(田中實共編)	第8号	p 13 / p 14
138	長谷川心平	1989.3	長谷川嗣氏 解説・筆写資料目録(抄)(田中實共編)	第8号	p 10 / p 12
137	長谷川心平	1989.3	長谷川嗣氏 著述譜(抄)(田中實共編)	第8号	p 7 / p 9
136	長谷川心平	1989.3	長谷川嗣氏 受賞略歴(稿)(田中實共編)	第8号	p 6
135	長谷川心平	1989.3	長谷川嗣氏 年譜(稿)(田中實共編)	第8号	p 1 / p 5
134	中村秋雄	2004.3	石狩空襲と研究会	第17号	p 75
133	中村秋雄	2001.3	石狩市産業組合用語(保証責任石狩町信用購買利用組合)	第14号	p 29 / p 32
132	中村秋雄	2001.3	帝国石油八ノ沢工業所に働いて	第14号	p 25 / p 28
131	中村秋雄	1988.3	特別寄稿 一九四五年七月十五日石狩空襲の思い出	第7号	p 25 / p 29
130	仲野 孝	2004.3	まじどおしい古文書会	第17号	p 74 / p 75
129	中嶋幸三	2003.3	自由民権運動・秩父事件指導者!井上伝蔵、石狩の二十三年(講演)	第16号	p 1 / p 12
128	中島勝久	2006.3	石狩尚古社資料館の資料から	第19号	p 4 / p 7
127	中島勝久	2004.3	石狩の歴史にふれた俳句資料	第17号	p 73 / p 74
126	中島勝久	2004.3	いしかり郷土シリーズ4「鎌田池菱と尚古社」中島家資料にみる石狩俳壇と各地の俳人たち	第17号	p 60 / p 61
125	中島勝久	2003.3	石狩尚古社資料館の資料から	第13号	p 1 / p 10

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
160	前川道寛	1988.3	早坂文雄をしのぶ	第7号	p 20 / p 24
159	前川道寛	1985.3	当別太美で聞いた話―本庄睦男のこと	第5号	p 14 / p 16
158	前川道寛	1984.2	生振古老物語Ⅲ	第4号	p 19 / p 23
157	前川道寛	1981.3	生振古老物語2―消えた街―生振治水工事市街考	第2号	p 16 / p 20
156	前川道寛	1980.8	生振古老物語	創刊号	p 7 / p 10
155	星川富美子	2004.3	郷土研究会は心のビタミン	第17号	p 76 / p 77
154	福田佐市	1986.3	昔を偲んで	第6号	p 16 / p 17
153	福田佐市	1984.2	鮭と鯨の昔話	第4号	p 14 / p 15
152	福田佐市	1981.3	酪農近昔	第2号	p 14 / p 15
151	福田佐市	1980.8	花川南、北地区の開発と郷土資料館野建設	創刊号	p 10 / p 13
150	原澤文字	2004.3	郷土研究会と私	第17号	p 75 / p 76
149	花田知也	1980.8	発刊にあたって	創刊号	p 1
148	畑宮清一郎	1985.3	古記録に見る石狩のサケ料理	第5号	p 8 / p 9
147	畑宮清一郎	1984.2	花畔団地“の野鳥について	第4号	p 6 / p 7
146	長谷川嗣	1989.3	長谷川嗣編「石狩缶詰来歴―開拓使文書ヨリ(抜)」	第8号	p 20 / p 26
145	長谷川嗣	1989.3	ある古調(詩らしく2)	第8号	p 18
144	長谷川嗣	1989.3	詩 そのとき(詩らしく)	第8号	p 16 / p 17
143	長谷川嗣	1986.3	文学作品 短歌	第8号	p 15 / p 16

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
178	山口福司	1986.3	石狩町の石碑調査について	第6号	p 1 / p 2
177	山口福司	1985.3	郷土資料館の早期実現を	第5号	p 1
176	山口福司	1984.2	こあいさつ	第4号	p 1
175	安井澄子	2008.3	石狩小学校、花川小学校の開校と統廃合の経緯	第21号	p 50 / p 53
174	安井澄子	2004.3	「石狩を知る」欲び	第17号	p 78 / p 79
173	村山耀一	2004.3	郷土研究会入会まで	第17号	p 77 / p 78
172	村山耀一	2004.3	発刊のことは ふりかえれば四十五年	第17号	p 3
171	村山耀一	2000.3	年表に見る村山家の沿革	第13号	p 49 / p 87
170	村山家文書会	2007.3	村山家文書解説「村山本家石狩転出二伴フ十二ヶ条心得ノ事」	第21号	p 8 / p 15
169	村山家文書会	2007.3	村山家文書解説「村山家訓」	第20号	p 10 / p 13
168	村山家文書会	2007.3	村山家文書解説「石狩場所蝦夷人撫育筋書上」	第20号	p 1 / p 9
167	村山家文書会	2005.3	村山家文書解説「場所請負人履歴村山(佐兵衛)」	第18号	p 1 / p 12
166	村井喜久司	1986.3	ふるさと探求	第6号	p 15 / p 16
165	三島照子	2008.3	高島家文書明治三十六年六月廿日運動会順序	第21号	p 1 / p 7
164	前川道寛	1996.3	あとがき	第11号	p 79
163	前川道寛	1996.3	清雅帖外解説	第11号	p 67 / p 78
162	前川道寛	1996.3	清雅帖解説	第11号	p 11 / p 65
161	前川道寛	1990.3	生振村三線―「北の渡し」林山キエ談	第9号	p 13

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
197	山口福司	1989.3	追悼号発刊に寄せて	第8号	巻頭
180	山口福司	2004.3	いしかり郷土シリーズ2「石狩の碑 第一輯―石碑等―にみる石狩町の歩み」	第17号	p.59
181	山口福司	2004.3	二代目会長を引きうけて	第17号	p.79 / p.80
182	横山敏美	1990.3	茨戸渡船場	第9号	p.14 / p.20
183	横山敏美	1990.3	八線渡船場	第9号	p.21
184	吉岡玉吉	1999.3	いしかり子ども風土記―郷愁の砂浜 遊び	第12号	p.1 / p.10
185	吉岡玉吉	2000.3	幻となった石狩浜の鯛(鰯)漁業	第13号	p.14 / p.22
186	吉岡玉吉	2001.3	りょうし(漁師)懐古 漁人、浦百 姓(本浦、端浦)漁師	第14号	p.19 / p.24
187	吉岡玉吉	2002.3	石狩浜漁師天気予報あれこれ	第15号	p.11 / p.19
188	吉岡玉吉	2003.3	石狩浜のコダマカイ	第16号	p.13 / p.16
189	吉岡玉吉	2003.3	石狩浜の蜆貝とその模様	第16号	p.17 / p.21
190	吉岡玉吉	2003.3	石狩浜の漁業―小手繰網漁業(補訂 田中實)	第16号	p.22 / p.35
191	吉岡玉吉	2004.3	石狩の漁労史を記したい	第17号	p.80 / p.81
192	吉岡玉吉	2005.3	石狩浜漁業関係者の主な祭事	第18号	p.17 / p.20
193	吉岡玉吉	2005.3	石狩本町地区あやかり名―昭和初期 /昭和20年代まで	第18号	p.21 / p.24
194	吉岡玉吉	2005.3	石狩十三場所(元禄一三―一七〇〇) 年)と地名由来	第18号	p.25 / p.27
195	吉岡玉吉	2006.3	三平汁と石狩鍋	第19号	p.8 / p.12
196	吉岡玉吉	2006.3	北千島サケ・マス流し網魚めしたき し語―北千島古守島長崎港を基地と	第19号	p.13 / p.34
197	吉岡玉吉	2007.3	石狩河口に於けるサケ地曳網漁回顧	第20号	p.14 / p.23

No	執筆者名	発表年	題名	掲載号数	掲載ページ
198	吉岡玉吉	2007.3	風の呼び名「あい風」(「あい」に ついて)(共同執筆 田中 實)	第20号	p.24 / p.32
199	吉岡玉吉	2008.3	石狩市内の屋号(高瀬たみとの共編)	第21号	p.20 / p.44
200	吉岡玉吉	2008.3	丸山出しと石狩湾のさかなたち	第21号	p.45 / p.47
201	吉岡玉吉	2008.3	厚田ハタハタ・寄りブリコ	第21号	p.48 / p.49
202	吉田千萬	1989.3	松浦武四郎研究会のあゆみ	第8号	p.27
203	吉田隆義	1999.3	石狩花畔土地改良区生振地区につい て	第12号	p.20 / p.24
204	吉田隆義	2002.3	生振に残る茅葺(かやぶき)屋根の 家	第15号	p.4 / p.5
205	吉永繁起	2004.3	私の郷土研究会	第17号	p.81
206	吉野惣栄	1991.2	石狩治水工事と生振村治水市街地	第10号	p.26 / p.50
207	吉野惣栄	1999.3	遊び心で推論した生振地名考	第12号	p.36 / p.46
208	吉野惣栄	2000.3	地神サン	第13号	p.23 / p.24
209	吉野惣栄	2002.3	北海道昔々(一)	第15号	p.9 / p.11
210	吉本愛子	1981.3	思い出すままに	第2号	p.6 / p.7
211	吉本愛子	1984.2	花畔古老昔語り―尾田アサヨさんの 巻	第4号	p.2 / p.5
212	吉本愛子	1985.3	花畔古老昔語り―織田テルさんの巻	第5号	p.19 / p.23
213	吉本愛子	1986.3	花畔古老昔語り―藤井リエさんの巻	第6号	p.20 / p.25
214	吉本愛子	1990.3	聞き書き女船頭だつた頃 松本ハナ さん(共同執筆 高瀬たみ)	第9号	p.8 / p.10
215	吉本愛子	2004.3	心豊かになれる会	第17号	p.81 / p.82

いしかり暦 第二十一号

平成二〇年三月三十一日 印刷

平成二〇年三月三十一日 発行

発行者 石狩市郷土研究会

石狩市花川南五条二丁目二二二

村山耀一方

TEL 〇一三三二七二一七四八九